惜陰耄録

四

昭和八年五月中浣起筆

特別
イ14
1919
452

176717

惜陰亭録 四

昭和八年五月中浣起筆

名古屋三日遊記

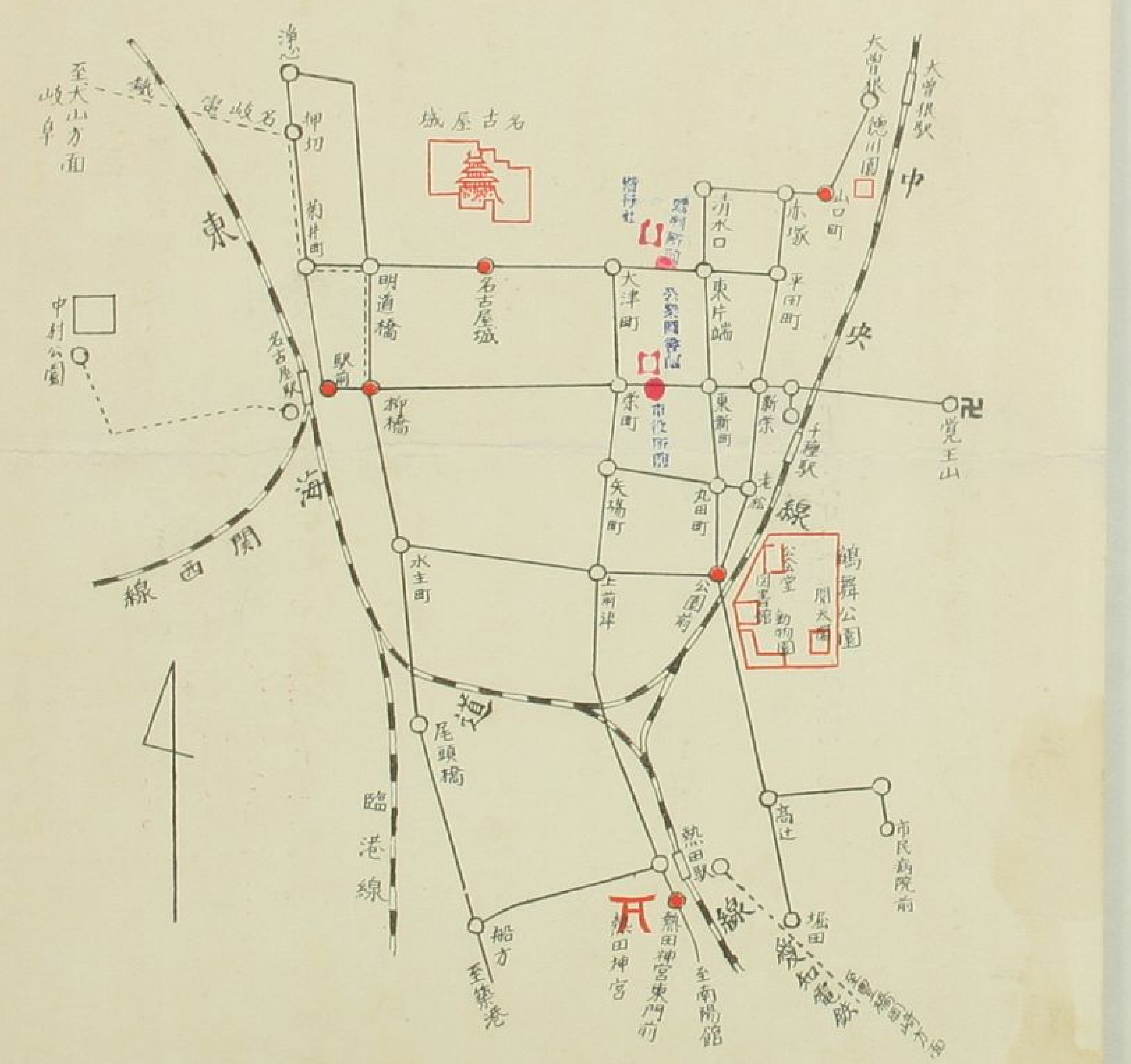
名古屋ハしばしば往復すれども、いつも匆卒去来して
近時の貴展ありしも此地を備さに見すごす様
今を得ざりしが、今次偶〻此地ニ国書踏探会の大
会を開催することゝなりしを好機とし、十一日よ
り十三日ニ渉る三日間ニ中京趣味を満喫せんと
急遽出動き十日午後の特急富士にて先生
等、和田宗兄林喜来氏と隣ちおなじ行を共ニ

光悦手造赤樂雲文茶碗 その一

是岡家藏

「 38- 9238

大會々場及見學個所案内略圖



す、此汽車一時東京驛を發して六時四十五分名古屋に
着す、快速頗る意に適ふ、着後余等一行と別れて前
年大隈侯と宿泊しける八勝館に到る、此の旅館
は字八事山にあり興正寺の前に在つて敷地一萬四
千坪、自然の森林の中に亭榭を點綴し、長廊を
以つて各室を連絡し各室の構造と裝飾皆風致
あり、停車場よりこゝまで六哩の距離あり、今は
電車通じ無時に往來せんは便なるも昔日の
出入りに加除不便を免かれず、唯だ此旅館の
清新は亭の結構忘る能はさる所なれ、勉強
は汽車中甚だ渇ましければ、旅館に着後小酌す、
寢後松濤の聲枕邊に達し聯句を演謝す

榛原製

す、此汽車一時東京驛を発して六時四十五分名古屋に
着す、快速頗る意に適ふ、萬綠會(?)ありと聞きて前
年大隈侯と宿泊したる八勝館に到る、此の旅館
は八事山なる興正寺の前に在つて敷地一萬四
千坪、自然の森林の中に亭樹欄を點在し、長廊を
以つて各室を連絡し、茶室の構造と特に節月(?)風致(?)
あり、停車場より此處まで六哩の距離あり、今は
電車も通じ無時(?)に往けんは便あるも昔日の
出入りは加除(?)不便を免かれず、唯だ此旅館の
清新なる亭の結構意に能くかなふものあり、勉強(?)
は汽車中疲労ましけれど、旅館に着後小閑ず、
瓢傍(?)松濤の聲枕邊に達し睡眠を促(?)す

一 鶴舞公園
公會堂、市立名古屋圖書館、動物園、開天閣
一 熱田神宮
公園前（公衆電話前停留所）より名古屋驛行（
り上前津にて、内田橋行又は、南陽館前行に乘
一 德川園
公園前（奎榮ビル前停留所）より大曾根行（お
電車道を北へ約牛町進み、右折して東へ約四町
一 名古屋城
公園前（名古屋銀行前停留所）より平田町行（わ
古屋城前停留所に至る、それより廓内を北へ約
一 中村公園
豐臣秀吉誕生地、豐國神社あり。其の南隣妙行寺
清正公を祀る。
一 覺王山
日暹寺、境内に佛骨奉安塔、征露戰勝碑あり、
一 柳橋驛
日本ライン、犬山方面行電車（名岐電鐵）發着所

[illegible]

公衆圖書館

公園前（亨栄ビル前停留所）より押切行（き印）電車に乗れば乗換なしにて市役所前停留所に至る、それより縣廳西側を北へ約半町西側

偕行社

公園前（亨栄ビル前停留所）より大曽根行（お印）電車に乗り、東片端にて名古屋驛行（わ印）に乗換へ裁判所前停留所にて下車、西へ約半町北側

一 鶴舞公園

公會堂、市立名古屋圖書館、動物園、聞天閣（苑内に猿面茶屋）等あり。

一 熱田神宮

公園前（公衆電話前停留所）より名古屋驛行（わ印）又は、水主町（かこまち）行（こ印）電車に乗り上前津にて、内田橋行又は、南陽館前行に乗換へ、神宮東門前にて下車。

一 徳川園

公園前（亨栄ビル前停留所）より大曽根行（お印）の電車に乗り、山口町にて下車、電車道を北へ約半町進み、右折して東へ約四町。

一 名古屋城

公園前（名古屋銀行前停留所）より平田町行（わ印）の電車に乗れば乗換なしにて、名古屋城前停留所に至ろ、それより廓内を北へ約五町。（名城入口迄市營バスの便あり）

一 中村公園

…地と稱せられ、

[illegible]

一 鶴舞公園

公會堂、市立名古屋圖書館、動物園、聞天閣（苑内に猿面茶屋）等あり。

一 熱田神宮

公園前（公衆電話前停留所）より名古屋驛行（わ印）又は、水主町（かこまち）行（こ印）電車に乗り上前津にて、内田橋行又は、南陽館前行に乗換へ、神宮東門前にて下車。

一 德川園

公園前（商工ビル前停留所）より大曾根行（お印）の電車に乗り、山口町にて下車、電車道を北へ約半町進み、右折して東へ約四町。

一 名古屋城

公園前（名古屋銀行前停留所）より平田町行（わ印）の電車に乗れば乗換なしにて、名古屋城前停留所に至る、それより廓内を北へ約五町。（名城入口迄市營バスの便あり）

一 中村公園

豐臣秀吉誕生地、豐國神社あり。其の南隣妙行寺境内は加藤清正誕生地と稱せられ、清正公を祀る。

一 覺王山

日暹寺、境内に佛骨奉安塔、征露戰勝碑あり、附近に末森城趾あり。

一 柳橋驛

日本ライン、犬山方面行電車（名岐電鐵）發着所。

ここに志むくる、六性と渇水の聲を遠く少く、幽
寂の境真に味ふるを足る。
翌朝四圍閑として宮内嘻く究から深夜の如し
時器を撥まんが既に六時を過ぐ、即ち起床
して、朝食後筆を走りき庭園を散策し
未獨倚さん閑寂を味ひ大いに蘇ふ、十時に
閑坐書を讀み、終て公園内の公会堂に列り、大
会の式に臨む、式は例の如く例の如くなるも廿
五年勤續の従業員を表彰する式あり、日合
極寿廿四名の多きを數ふ、今日全國より来
会二万三千数名、これこそ大入りなる午
後和田前博士と公園を散策し遊

榛原製

ここを去ぬしろう、六位と閑の静を遠く少く、越
寂の境真に味ふに足る。
翌朝四周閑として、宮内嘯く究から深夜のめし
時為を換まんぴ既に六時をさく、即ち起床
して、朝香修行を鬼ずき庭園を散策し
未獨性倚さん閑寂を味ひ大いに養ふ、十時と
閑生書を実み、又とは公園の八公望に川の、大

設されたる加茂季鷹翁の銅像を祭る。此公園へ
来る者の目に殊に心を引くは、規模大ならずして一高
楼、未だ樹木無き頃より数年を経し八層
美観を呈せん。園の一隅に二三の建造物あり。
其一は少天閣と云ふ。明治四十三年貴賓を饗し
て建設せられしものなり。今も貴賓を請し宴を
張ることあり。閣の高く眺望に便なり。庭園
の樹石は雅なり。少天閣の名は、当公園の
名称を東京府にて選ぶ名なる者を、此の閣
に附属して古風の建物あり、松月亭と唱ふ
ることあり。と蒲生齊莊公の書額を掲ぐ。
ふ入りて見れば室の天井には十二支を画しある。

絵あり。筆者不明なれども面白きものなり。他に
一建造物あり。三者中最も古く、且つおもしろき
構来のものなり。こゝは德川旧臣が清洲城を移し
ゝ古田織部正に命じて造営せしめし茶室
にて、極めて質素の佳営なれども雅致あり。庭
園も風致点捌し得べし。惜むらくは方を移さ
れ漸やく其原型の地を得ず。此の二つの建物
は公園内の最も異彩を放ちて珍重すべきなり。
公園の設置終りて円通寺領に列し、真福寺宝
生院の貴重なる図書は特に手薄の為こゝに持出さ
れ陳列されあり。展観に便なるを得たり
列品の内、国宝は十三點の多きを数ふ。皆な

聞天閣之記

本建築は明治四十二年七月の起工にして、その頭梁は鈴木幸右衛門、木曾御料林材を以つて建造せるものにして、明治四十三年關西府縣聯合共進會貴賓館として設立せるものなり。

松月齋之記

松月齋は元愛知縣商品陳列所庭内に、猿面茶席と共にありしものなり。元々茶席とは何等の關係なき建物なれど、尾藩主徳川齊荘公の書齋なりしと云ひ傳ふ。建築は徳川末期の優秀なる遺構と稱せらる。是亦今回の移建に際し、一部の建增をなしたり。

榛原製

聞天閣苑内略記

猿面茶席之記

茶席は織田信長の清須城主たりし時、古田織部正に命じて造らせしものなり。慶長十五年、清須に在りし形狀を改めず、名古屋城内に其儘移建され其後兩度の移構を經て、明治十三年愛知縣博物館(後に愛知縣商品陳列所)に移したり、然るに同陳列所の廢止により、名古屋市へ移管され最近現在の聞天閣苑内に移建し、一部建增をなし畧完成せり。

其の床柱に二つの節あり、よく猿面に類するを以つて猿面茶席の名あり。

(市立名古屋圖書館誌)

久しく此書名を知れるも始めて目睹のことなりき、予往
年大隈老侯に随伴して名古屋に来りし日、真福
寺をおとづれ訪問したることありしが、國寶の蔵書
東京の大學史料に持去られてあつて一點も見る
を得ざりしが、今次初めて宿志を果すを得て眼
此上なき眼福を縦にし得、國寶圖書を謁し
あれども予は此の真福寺本を第一に推さんとす、
古来此寺は日本の三大文庫として称されたる一にして根来
天仁二寺早く亡ぶ、真福寺本の依然今存するは
學界の幸福と云ふて可なり、昔し此る志なく
火災あり、これを免かれたるは真に幸と云ふべし
各種の國寶に就て今條述の暇あらず　富田入

榛原製

昭和八年五月十一日開催

大須眞福寺所藏

國寶典籍 展覽會目錄

會場 市立名古屋圖書館

一千の目録又は和而委しき注あり、左にこれを収めて参
考とす、真福寺本の珍重すべきは國寶のみにあ
らず、數種の宋版皆珍とすべし

大須眞福寺所藏 國寶典籍 展覽會目錄

大須眞福寺は、今名古屋市中區門前町にあり。もと尾張の國中島郡長岡庄大須にありしが、この地年々木曾川の水害を蒙るところより、慶長年間に至り、德川家康成瀨正成に命じて現在の地に移す。

古事記　寫本　三帖　(國寶)

本書は、現存せる古事記の古寫本中、書寫年代の確證ある、最古のものとして知らる。

上、中の二卷は應安四年、下卷は同五年の書寫にして、上卷に執筆賢瑜俗老廿八歲、中卷に執筆金剛資賢瑜俗老廿八、下卷に執筆賢瑜俗老廿九歲とあり。

秘藏寶鑰 卷上　寫本　一帖

奥書。應安第三天十一月二十七日於尾州大須庄北野眞福寺寶生坊書寫畢

金剛資賢瑜　廿七歲

この奥書により前記古事記の書寫年代を知り得るなり。

眞言宗義抄 第一　寫本　一册

奥書。明德庚午黃鐘中旬候於尾州長岡庄北野眞福寺

寶生院令書訖　阿闍梨賢瑜

古事記上卷抄　寫本　一卷

前揭古事記よりも書寫年代古く、鎌倉末期の寫本といふ。

日本靈異記 中、下卷　寫本　二卷　(國寶)

鎌倉時代の書寫といふ。

尾張國解文　寫本　一卷　(國寶)

奥書。於勢州桑名郡內富津御厨小山勝福寺依雖背仰付鳥跡了　正中貳年八月十一彼岸第三午尅了

本書は、一條天皇の永祚元年、尾張國の郡司百姓が、國守藤原元命の非違に就き、三十一條を陳べたる訴狀にして、當時の地方政治を考究する好資料たり。

將門記　寫本　一卷　(國寶)

奥書。承德三年正月二十九日於大智房酉時許書了同年二月十日未時讀了

卷末に「天慶三年六月中記文」とあるを以て、原本は將門滅亡後四箇月にして記述されたることを知る。

本朝文粹 卷第十二、第十四　寫本　二卷(國寶)

卷第十四奥書。弘安三年七月九日酉刻計書寫畢堯順正應元年夷則九日以家說授申巳訖　散木藤原淳範

本書は、藤原明衡が支那の文選を規範とし、本朝名家文筆の純粹なるものを選輯せるものにして十四卷より成る。

七大寺年表　寫本　二卷　(國寶)

奥書。永万元年十月此書寫了　惠珍之

本書は、南都七大寺の諸大德の綱位、補任の次第、其他堂塔の建立、佛像の安置、法會の執行、諸僧の行動等に至るまで年表風に記述せるものなり。

口遊　寫本　一册　(國寶)

奥書。干時弘長三年二月五日於山田亭愚息行文書寫之少々加愚筆畢

本書は、圓融天皇の天祿元年、源爲憲が左近衞中將參議藤原爲光の長子松雄君の爲に記述せるものなり。

漢書食貨志　寫本　一卷　(國寶)

本書は、奈良朝頃の書寫に係る漢書顏師古の註の零卷にして食貨志上卷のみを存す。卷末には奈良朝式部省の藏書印あり。

翰林學士詩集　殘缺　寫本　一卷　(國寶)

本書其終に、集卷第二とあるを以て第二卷と思惟せらる。裏面に表制集第五を書寫す。初唐時代の寫本といふ。

琱玉集 卷第十二、卷第十四寫本 二卷　(國寶)

卷第十二の奥書。用紙一十九張、寫天平十九年歲在丁亥秋七月日。裏面に表制集卷第三を書寫す。

卷第十四の奥書。紙一十六張、天平十九年歲丁亥三月寫。裏面、表制集卷第

尾張國解文　寫本　一巻（國寶）

奥書。於勢州桑名郡内富津御厨小山勝福寺依難背仰付鳥跡了　正中貳年八月
十一彼岸第三午尅了

本書は、一條天皇の永祚元年、尾張國の郡司百姓が、國守藤原元命の非違に就き、三十一條を陳べたる訴狀にして、當時の地方政治を考究する好資料たり。

將門記　寫本　一巻（國寶）

奥書。承德三年正月二十九日於大智房酉時許書了同年二月十日未時讀了

巻末に「天慶三年六月中記文」とあるを以て、原本は將門滅亡後四箇月にして記述されたることを知る。

本朝文粹　巻第十二、第十四　寫本　二巻（國寶）

巻第十四奥書。弘安三年七月九日西刻計書寫畢堯順正應元年夷則九日以家説
授申已訖　散木藤原淳範

本書は、藤原明衡が支那の文選を規範とし、本朝名家文筆の純粹なるものを選輯せるものにして十四巻より成る。

七大寺年表　寫本　二巻（國寶）

奥書。永万元年十月此書寫了　惠珍之

本書は、南都七大寺の諸大德の綱位、補任の次第、其他堂塔の建立、佛像の安置、法會の執行、諸僧の行動等に至るまで年表風に記述せるものなり。

口遊　寫本　一册（國寶）

奥書。干時弘長三年二月五日於山田亭愚息行文書寫之少々加愚筆畢

本書は、圓融天皇の天祿元年、源爲憲が左近衛中將参議藤原爲光の長子松雄君の爲に記述せるものなり。

漢書食貨志　寫本　一巻（國寶）

本書は、奈良朝頃の書寫に係る漢書顏師古の註の零巻にして食貨志上巻のみを存す。巻末には奈良朝式部省の藏書印あり。

翰林學士詩集　残鈌　寫本　一巻（國寶）

本書其終に、集巻第二とあるを以て第二巻と思惟せらる。裏面に表制集第五を書寫す。初唐時代の寫本といふ。

琱玉集　巻第十二、巻第十四寫本　二巻（國寶）

巻第十二の奥書。用紙一十九張、寫天平十九年歳在丁亥秋七月日。裏面に表
制集巻第三を書寫す。
巻第十四の奥書。紙一十六張、天平十九年歳丁亥三月寫。裏面、表制集巻第
二

琱玉集復舊庫記　寫本　一巻

因に、琱玉集は幕末故ありて一旦寺門の外に出で、其後再寶生院に復舊す。
本書は其因緣を嘉永六年に淺井正巽が記したるものなり。

禮部韻略　残鈌　宋版　三册

巻末。勑宜令刊修廣韻所國子監　並依所奏施行牒至准勅故牒　景祐四年六月
日牒　云云

玉篇　残鈌　宋版　一册

韻書　残鈌　宋版　一册

新雕中字雙金　宋版　一册

題簽の一側に、此本今將經籍子史重加校勘近五百余一件錯誤、他側に、並一改譜甚至精詳已酉熈寧二年十月望日印行とあり。
巻末。聖宋已酉熈寧二年孟冬十月望日白

紹聖新添周易神煞曆　残鈌　宋版　一巻

民間刊行の俗本曆なり。紹聖は北宋哲宗時代の年號にして四ヶ年に亘る。

小野六帖　寫本　六册

奥書。文保二年戊午十二月廿一日於河内國錦部郡天野山北谷文珠院以師王御
本書寫了（中畧）
金剛資禪惠　行年卅五歳

眞福寺の開山能信上人の熱心なる古書蒐集事業に同情して、河内國金剛寺の學頭禪惠が自ら寫して能信上人に贈りしもの、禪惠は勤王家として名高し。

續本朝往生傳　寫本　一巻（國寶）

奥書。建長五年　癸丑　十二月六日於西峯草庵書寫了乗忍

弘法大師傳　寫本　二巻（國寶）

奥書。元曆元年五月八日巳尅書寫了並一交了

弘法大師御入定勘決記　寫本　二册（國寶）

奥書。建曆元年八月二日　未時　於高野山千手院坊書畢（中略）佛子日海（中
略）干時貞治第三曆黄鐘中九日於尾張國那古野安養寺壇所忍寒氣書寫
了　金資　深惠

大日經序分義短釋　残鈌　寫本　一册

奥書。嘉曆三年六月十五日於武州多西郡高幡不動堂書寫畢　金剛佛子能信

今の真福寺は市の門前町にあり、此地の東京の浅草に比
すべき盛り場なり、此近きに秩序なく、貴重書を蔵する
寶生院と称する寺内にありて、倉庫の特に備へて一説
を伝ふるが如くなり。少なき日本人の蔵する、これと一萬
五千の古書を蔵し、若し一回禄の災あらば、恐らくは珍籍
は悉く灰燼と化せん。院主近比書庫改築の急あ
りと曰ふ。吾等同志と共に遠近貴人の間に若干の
寄附をなさん。勿論貴書の一助也
和田と同伴自動車を飛ばして熱田に到り大社を拝
す。此は神殿改造中にて神霊は仮殿に遷
座しあり。之を拝し、特に神庫にて寶器
を見ることを得、國寶六七點あり、文書と刀剣は

榛原製

◇熱田神宮寶物陳列目録

後花園天皇御宸筆神領寄進状（國寶）
足利義教公筆（國寶）
後水尾天皇御製　懷紙
後奈良天皇御製　短冊
加藤清正主計書状
菅公神像
源頼朝卿筆
織田信長公筆
舞樂古面　七
日本書記（國寶）
古瓶子　三
豊太閤印
古蒔繪文庫（國寶）
蓬萊鏡奩
沙門勘進状
古箙
鏡懸　二
神領目錄
春敲門額
馬場氏古文書
舞樂古圖

明治天皇七口刀
兵庫鎖太刀（國寶）
刀劒　五口（國寶）
懸丸刀
蜘蛛切丸
利丸
大太刀　二口

最も貴重のもの也。同寺は日本書記
のあるの他に見つべきこともなし。去りて境内
を散策し、公會堂に戻り、名古屋
市長大岩勇夫の招待會に臨む

十二日ハ亦好晴を得、十時旅館を出て自動車を組
り自撃行者たるを見んとて行く、偶々城實比島
（京都四条鉄衣）行達（神戸四条鉄長）と会合し
せしも先づ御殿をみる、御殿にハ表玄関より紫宸殿
並ぶ源黒木書院柳の間孔雀の間等あり、上洛
殿ハ陛下御臨幸の際来り給ふ御座所となされ
所ぞ、室内の装飾殊に華麗にして各室皆名
画を以て飾られ、金碧燦爛目を眩するばかり上洛
殿ハ殊に豪華を極め其欄間の彫刻の如きハ驚
くべき技巧を見えたり、傍しき金襖の絵ハ狩野流
の粋を在まることにて探幽の絵多し、さきを覚
ゆ、前年京都の二條城を拝観したる時の豪華

さ驚きたるが、これハ彼れに比して優るとも劣ることハ無
かりしが、絵画の破損の少きハ京都に優れりと
思はれたり、此城ハ慶長十五年徳川家康諸侯に命
じて築城せしめたるところにて日本三名城の一と称せ
らる。明治廿六年離宮となり、昭和五年名古
屋市に払下げられ、天守閣御殿櫓門等国宝
に推さる。御殿拝観の後天主閣を見る、これが為
階段が狭く険しくして難渋しけりと謂ふるほどなり
高さ四十尺、頂上に金の鯱が左右に飾付け
あって、北方にあるが雄南方にあるが雌にて高さ
八尺三寸、これを使用の黄金ハ慶長小判一萬七
千九百七十五両と言はれて居る、楼ハ五層の壮構也

昭和八年五月十二十三日

尾張徳川黎明會 陳列目録

於名古屋 徳川園

音ノ稱アリ

蒔繪ハ幸阿彌長重、歌ノ文字ハ梶井宮圓融院、彫刻ハ法橋顕乘ナリ

左 床 脇

螺鈿飾太刀拵

藩祖義直淺野幸長ノ女春姫（高原院）ヲ娶リシ時淺野家ヨリ贈リシモノ

螺鈿飾太刀ハ勅授帯劔ノ人公事ノ時佩用スルモノ 鐔、棗形、金無垢七子地唐草葵紋肉彫

紋六個廻リ菱形葵葉形ノ中ニ寶石六個ヲ嵌入ス 鞘、平目梨子地唐草蒔繪ニ金粉金具蒔繪及螺鈿ニテ葵紋散、紋ノ數三十二、中蒔繪十、金具十二、螺鈿十

金具ハ總テ後藤家ノ作、螺鈿ハ平山道人作ナリトイフ

城内ますを清潔にし至る風致に富む、繊細なるに感じ
させらるゝありき。
城を辞して松島伊達と自動車にて来、徳川邸の
陳列を観る、此の陳列は特に吾等一行の為めにせしもの
なるものにて尾張徳川黎明会の目録好意に出づ、此
邸はもと尾州藩家老の住し所なるを君侯の
居宅は城内にありし由なれど今は無く、此邸一時
義親侯住されたれども、今は徳川園と称され財団法
人となる。列品は皆徳川家の宝器にして国書中
にも殊に稀覯のものあり、藩祖の撰述に係るもの
あれは従前見るを能はざりしもの也、殊に玄家華
に至りては首並の数まで何れの名も皆史的来

榛原製

床掛物

傳王若水筆　　三幅對

牡丹ノ書

盆石　　銘　夢浮橋

傳曰、後醍醐天皇特ニ愛玩セサセ給ヒ常ニ玉座ヲ離シ給ハズ芳野御遷幸ノ時モ御懐中ニ携ヘ給ヒシト

机　　初音蒔繪

右床脇

香爐　　名物　銘　千鳥

蓋摘千鳥ハ後藤祐乘作ナリ

香合　　薄梨子地長角蝶蒔繪

手筥　　梨子地離ニ梅蒔繪

塵壺　　青磁文字入

豊臣秀吉座右ニ使用シタル塵壺

出書院

文臺料紙硯箱　　初音蒔繪

初音蒔繪ノ調度品ハ寛永十六年九月將軍家光ノ長女千代姫(靈仙院)尾州德川家二代光友(瑞龍院)ニ婚嫁ノ時所謂嫁入道具一切源氏物語初音ノ巻ノ「年月を松にひかれてふる人に今日鶯の初音聞かせよ」ヲ歌繪トシテ蒔繪ニ意匠シ製作シタルニヨリ初音ノ稱アリ

蒔繪ハ幸阿彌長重、歌ノ文字ハ梶井宮圓融院、彫刻ハ法橋顯乘ナリ

左床脇

螺鈿飾太刀拵

藩祖義直淺野幸長ノ女春姫(高原院)ヲ娶リシ時淺野家ヨリ贈リシモノ

螺鈿飾太刀ハ勅授帶劔ノ人公事ノ時佩用スルモノ　鐔、楽形、金無垢七子地唐草葵紋肉彫

紋六個回リ菱形葵葉形ノ中ニ寶石六個ヲ嵌入ス　鞘、平目梨子地唐草蒔繪ニ金粉金具蒔繪及螺鈿ニテ葵紋散、紋ノ數三十二、中蒔繪十、金具十二、螺鈿十

金具ハ總テ後藤家ノ作、螺鈿ハ平山道人作ナリトイフ

屏風　　長篠小牧兩合戰圖　一雙

傳曰、兩合戰實見者ノ畫カシメタルモノナリト

陳列品

詩仙堂額　　書 石川丈山筆　畫 狩野探幽筆　　三十六枚

左方

第一　蘇武　　第二　謝靈運

第三　陳子昂　　第四　李白

第五　王維　　第六　高適

第七　儲光義　　第八　帝應物

第九　韓愈　　第一〇　劉禹錫

第一一　蘆同　　第一二　杜牧

第一三　寒山　　第一四　林逋

第一五　梅堯臣　　第一六　歐陽修

第一七　黃庭堅　　第一八　陳與義

右方

第一　陶潛　　第二　鮑昭

第三　杜審言　　第四　杜甫

第五　孟浩　　第六　岑參

第七　王昌齡　　第八　柳長郷

第九　柳宗元　　第一〇　白居易

第一一　李賀　　第一二　李商隱

第一三　靈徹　　第一四　邵雍

第一五　蘇舜欽　　第一六　蘇軾

第一七　陳師道　　第一八　曾幾

駿河讓本ノ部　本御ノ朱印アリ

蒔繪ハ幸阿彌長重、歌ノ文字ハ梶井宮圓融院、彫刻ハ法橋顯乘ナリ

左　床　脇

螺鈿飾太刀拵

藩祖義直淺野幸長ノ女春姫（高原院）ヲ娶リシ時淺野家ヨリ贈リシモノ

螺鈿飾太刀ハ勅授帶劍ノ人公事ノ時佩用スルモノ　鐔、楽形、金無垢七子地唐草葵紋肉彫

紋六個回リ菱形葵葉形ノ中ニ寶石六個ヲ嵌入ス　鞘、平日梨子地唐草蒔繪ニ金粉金具蒔繪及螺鈿ニテ葵紋散、紋ノ數三十二、中蒔繪十、金具十二、螺鈿十

金具ハ總テ後藤家ノ作、螺鈿ハ平山道人作ナリトイフ

屏　風　長篠小牧兩合戰圖　一雙

傳曰、兩合戰實見者ノ畫カシメタルモノナリト

陳　列　品

詩仙堂額　書 石川丈山筆　畫 狩野探幽筆　三十六枚

左　方

第一　蘇　　武　　第二　謝　靈　運

第三　陳　子　昂　　第四　李　　白

第五　王　　維　　第六　高　　適

第七　儲　光　義　　第八　帝　應　物

第九　韓　　愈　　第一〇　劉　禹　錫

第一一　盧　　同　　第一二　杜　　牧

第一三　寒　　山　　第一四　林　　逋

第一五　梅　堯　臣　　第一六　歐　陽　修

第一七　黃　庭　堅　　第一八　陳　與　義

右　方

第一　陶　　潛　　第二　鮑　　昭

第三　杜　審　言　　第四　杜　　甫

第五　孟　　浩　　第六　岑　　參

第七　王　昌　齡　　第八　柳　長　鄕

第九　柳　宗　元　　第一〇　白　居　易

第一一　李　　賀　　第一二　李　商　隱

第一三　靈　　徹　　第一四　邵　　雍

第一五　蘇　舜　欽　　第一六　蘇　　軾

第一七　陳　師　道　　第一八　曾　　幾

駿河讓本ノ部　［御本］ノ朱印アリ

一、續日本紀　寫本、卷子本　四十卷

第十一卷ヨリ第四十卷マデ毎卷首尾ニ金澤文庫ノ黑印アリ

第一卷ヨリ第十卷マデ補寫

一、齊民要術　寫本、卷子本　九卷

第三卷鈌　毎卷首尾ニ金澤文庫ノ黑印アリ

第一卷奧書

書寫點校之子細記第十卷奧了

本云

寶治二年戊申九月十七日康樂寺僧正讓賜之

典藥權助和氣種成在判

仁安元年十月六日於東坂本河原口坊以唐摺本書寫了

一校了

同七月又校了

建治二年正月十五日以近衛羽林借賜之摺本校合了

第十卷奧書

本云

寶治二年戊申九月十七日辛酉自康樂寺僧正之手傳取之

典藥權助和氣在判

仁安元年九月晦於百齊寺以唐本摺本書了

仁安元年一校了、同十月七日又校了

此書一部十卷小川僧正御存自京都令借下本給之間書寫校合了于時文永十一年三月十一日

越州刺史花押

一、太平聖惠方　宋版　五十一册

二十四册　刻本　毎册首尾ニ金澤文庫ノ黑印アリ

二十七册　寫本

同正誤　寫本　二册

尾張藩醫官山崎克明ナシテ撰述セシメタルモノ

一、中州集　元版　六册

編首ノ總目ニ乙卯新刊トアレバ元ノ仁宗延祐二年即我國花園天皇ノ正和四年（紀元一九七五年）ノ刊行ニシテ中州集刊本最古ノモノナリ

一、春秋公羊疏　寫本　六册

宋版ヲ寫シタルモノカ　書寫セル人ハ少クモ六、七人ヲ下ラズ

一、春秋集傳大全　明版　十册

一、杜氏通典　朝鮮版　七十五冊
日錄ノ見返シニ左ノ識語アリ
嘉靖三十九年九月　日
內賜司諫院獻納李翎杜氏通典一件
命除謝
恩　左副承旨臣李
序文ノ初ニ「宣賜之記」ノ方二寸六分五厘篆文朱字印ヲ押捺セリ

一、三國遺事　朝鮮版　二冊

一、沙石集　慶長活字本　八冊
第一冊第二冊鈌
外題沙石集ノ文字ハ尾張藩書物奉行松平君山ノ筆ナリ

一、方丈記　嵯峨本　一冊

一、大藏一覽集　慶長活字本　十一冊
第五卷鈌

一、群書治要　元和活版　四十七冊

以上

尾張藩祖義直撰述本ノ部

一、系圖　一折
淸和天皇ニ始マリ正保二年家綱ニ終ル

一、年譜　五冊
正保三年四月十七日ノ義直自序アリ
家康一代ノ事蹟ヲ最モ正確ニ記述セルモノニシテ天文十一年壬寅十二月小二十六日於參州岡崎城誕生ニ始マリ元和三年四月大十六日移神於正殿ニ終ル
義直數十年ノ心力ヲ盡シテ親ラ撰スル所ニシテ正保三年四月十七日系圖ト共ニ將軍ニ獻ジ副本ヲ家ニ留メタリ德川氏松平氏ノ系譜ハ實ニ是ヲ以テ完成ス

一、神祇寶典　寫本　十冊
正保三年二月朔日ノ義直自序アリ
本朝ノ神國ナル所以ヲ明ニシ佛家ノ本地垂迹ノ說ヲ打破スルガ爲ニ國史舊記ニ據リテ本朝ノ神名ヲ正シタルモノナリ漢文ニテ記述セリ

一、類聚日本紀　寫本　七十冊
正保三年十一月ノ義直自序アリ
日本書紀　續紀　後記　實錄ヲ集メテ大成セルモノ　即チ上ハ神代ニ起リ光孝天皇ニ至ル、終ニ神代系圖　帝王系圖ヲ附ス　帝王系圖ハ神武天皇ヨリ後陽成天皇ニ至ル、漢文ニテ記述セリ

一、軍證志　寫本　三冊
神武天皇長髓彥ヲ討チ給ヒシヨリ慶長五年大聖寺小松ノ役ニ至ル迄歷代大小各戰鬪ノ概要ヲ片假名交リ文ニテ記シ之ニ一々評ヲ加ヘタリ

一、軍書萃言　義直自筆本　一冊
易、孫子、吳子、司馬法、尉繚子、六韜、三略、大宗問對等ヨリ兵語ヲ拔萃セルモノ、漢文ニテ記述セリ

一、軍書合鑑　寫本　一冊
各兵書ヲ引擄シテ將タルモノヽ心得ヲ片假名交リ文ニテ記セリ即チ兵ヲ好ムニ非ズシテ能ク國ヲ治ムルヲ以テ良將トスル事ヲ說ケリ
本書ノ末尾ニ依王命被催軍ノ一條アリ是レ義直勤王ノ深意ヲ記シタルモノナリト云フ

一、成功記　寫本　十八冊
德川氏父祖ヨリ元和三年四月家康ヲ日光山ニ改葬スル迄ノ事蹟ヲ漢文ニテ記セリ
此書初メハ三河記トイヒシガ後ニ成功記ト改ム、本書撰述ニ方リテハ義直儒臣ト討議シ一字一句ヲモ苟モセズ時ニハ深夜ニ及ビテモ尙ホ議論ヲ鬪ハシタリトイフ斯ノ如ク義直ガ心血ヲ灑ギテ撰述セシ書ナレバ極メテ貴重ノ物トシテ公子ト雖モ容易ニ閱覽ヲ許サズ家ヲ繼グニ及ビテ始テ讓與セシトイフ

一、初學文宗　義直自筆本　一冊
義直晚年ノ著述ニシテ脩身齊家治國ノ要ヲ假名交リ文ニテ記シ子孫ノ訓誡トセシモノナリ

清和天皇ニ始マリ正保二年家綱ニ終ル

一、年　譜　五　冊

正保三年四月十七日ノ義直自序アリ
家康一代ノ事蹟ヲ最モ正確ニ記述セルモノニシテ天文十一年壬寅十二月小二十六日於參州岡崎城誕生ニ始マリ元和三年四月大十六日移神於正殿ニ終ル

一、神　祇　寶　典　寫　本　十　冊

義直數十年ノ心力ヲ盡シテ親ラ撰スル所ニシテ正保三年四月十七日系圖ト共ニ將軍ニ献ジ副本ヲ家ニ留メタリ德川氏松平氏ノ系譜ハ實ニ是ヲ以テ完成ス
正保三年二月朔日ノ義直自序アリ
本朝ノ神國ナル所以ヲ明ニシ佛家ノ本地垂迹ノ説ヲ打破スルガ爲ニ國史舊記ニ據リテ本朝ノ神名ヲ正シタルモノナリ漢文ニテ記述セリ

一、類　聚　日　本　紀　寫　本　七　十　冊

正保三年十一月ノ義直自序アリ
日本書紀　續紀　後記　實錄ヲ集メテ大成セルモノ　即チ上ハ神代ニ起リ光孝天皇ニ至ル、終ニ神代系圖　帝王系圖ヲ附ス　帝王系圖ハ神武天皇ヨリ後陽成天皇ニ至ル、漢文ニテ記述セリ

一、軍　證　志　寫　本　三　冊

神武天皇長髓彥ヲ討チ給ヒショリ慶長五年大聖寺小松ノ役ニ至ル迄歷代大小各戰鬪ノ概要ヲ片假名交リ文ニテ記シ之ニ一々評ヲ加ヘタリ

一、軍　書　萃　言　義直自筆本　一　冊

六韜、三略、大宗問對等ヨリ兵語ヲ拔萃セルモノ、孫子、吳子、司馬法、尉繚子、漢文ニテ記述セリ

一、軍　書　合　鑑　寫　本　一　冊

各兵書ヲ引據シテ將タルモノヽ心得ヲ片假名交リ文ニテ記セリ即チ兵ヲ好ムニ非ズシテ能ク國ヲ治ムルヲ以テ良將トスル事ヲ說ケリ
本書ノ末尾ニ依王命被催軍ノ一條アリ是レ義直勤王ノ深意ヲ記シタルモノナリト云フ

一、成　功　記　寫　本　十　八　冊

德川氏父祖ヨリ元和三年四月家康ヲ日光山ニ改葬スル迄ノ事蹟ヲ漢文ニテ記セリ
此書初メハ三河記トイヒシガ後ニ成功記ト改ム、本書撰述ニ方リテハ義直儒臣ト討議シ一字一句ヲモ苟モセズ時ニハ深夜ニ及ビテモ尙ホ議論ヲ鬪ハシタリトイフ
斯ノ如ク義直ガ心血ヲ灑ギテ撰述セシ書ナレバ極メテ貴重ノ物トシテ公子ト雖モ容易ニ閱覽ヲ許サズ家ヲ繼グニ及ビテ始テ讓與セシトイフ

一、初　學　文　宗　義直自筆本　一　冊

義直晚年ノ著述ニシテ脩身齊家治國ノ要ヲ假名交リ文ニテ記シ子孫ノ訓誡トセシモノナリ

城内まで清潔まで風致と富む、纖細まるを思ひ
さることあるらき。

一、軍證志　寫本　三冊
ニ至ル、終ニ神代系圖　帝王系圖ヲ附ス　帝王系圖ハ神武天皇ヨリ後陽成天皇ニ至ル、漢文ニテ記述セリ

神武天皇長髓彥ヲ討ヲ給ヒシヨリ慶長五年大聖寺小松ノ役ニ至ル迄歷代大小各戰闘ノ概要ヲ片假名交リ文ニテ記シ之ニ一々評ヲ加ヘタリ

一、軍書萃言　義直自筆本　一冊
易、孫子、吳子、司馬法、尉繚子、六韜、三略、大宗問對等ヨリ兵語ヲ拔萃セルモノ、漢文ニテ記述セリ

一、軍書合鑑　寫本　一冊
各兵書ヲ引據シテ將タルモノヽ心得ヲ片假名交リ文ニテ記セリ即ヲ兵ヲ好ムニ非ズシテ能ク國ヲ治ムルヲ以テ良將トスル事ヲ說ケリ
本書ノ末尾ニ依王命被催軍ノ一條アリ是レ義直勤王ノ深意ヲ記シタルモノナリト云フ

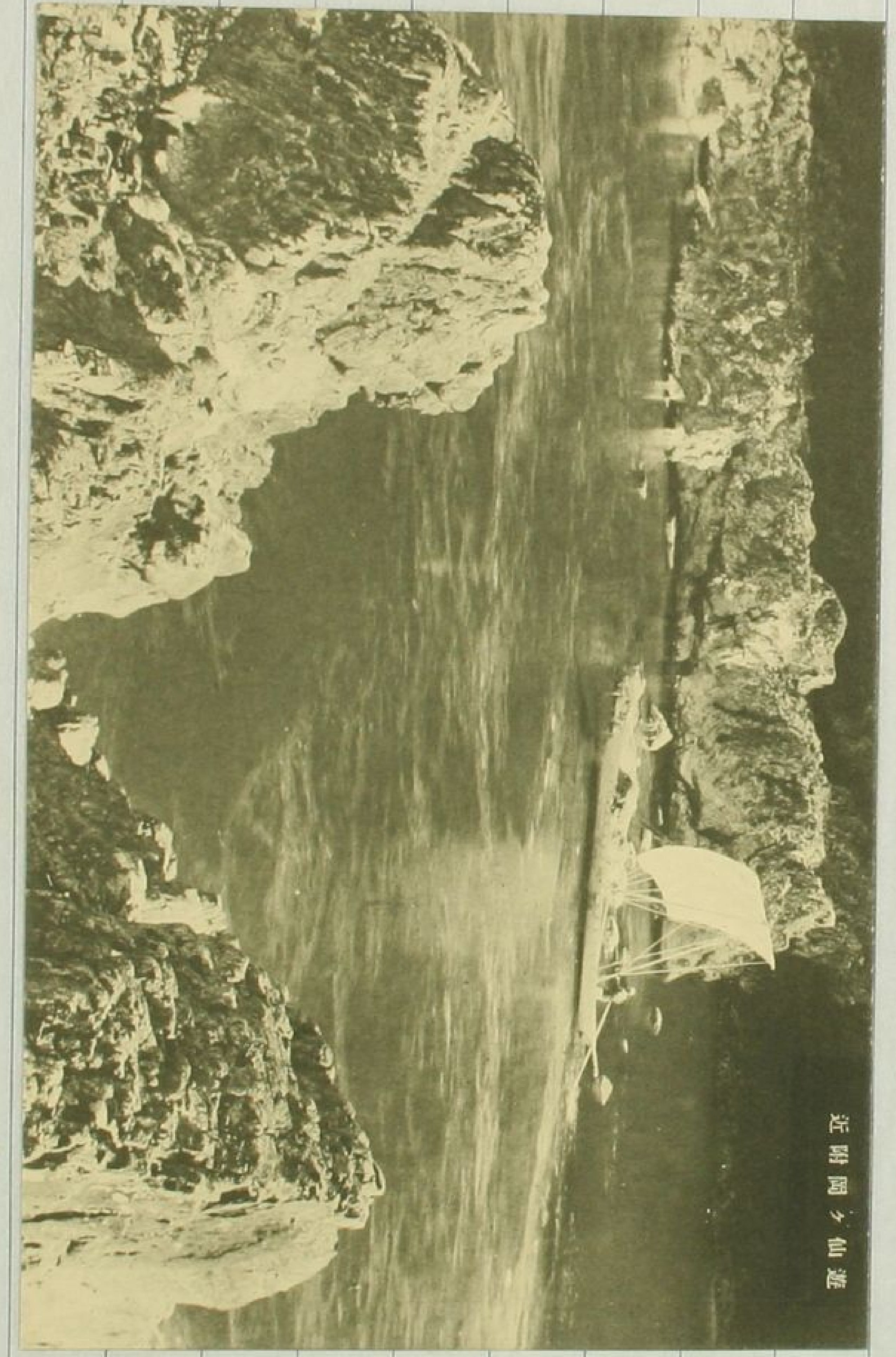
一、成功記　寫本　十八冊
德川氏父祖ヨリ元和三年四月家康ヲ日光山ニ改葬スル迄ノ事蹟ヲ漢文ニテ記セリ

来歴あり、夢香椿千鳥の香炉 初音蒔絵の文
台料紙硯箱 [illegible]公の[illegible]壺、螺鈿飾りの太
刀など皆此時の名器也、屏風ハ此度長篠の戦争
を図したる[illegible]戦争を図す者人画なるを
戦争を目睹したる人の手よ成りたりと云へバ実
の画として見るべき史料とするべきこと[illegible]
犬山の城仏壇と描けり額の原画も[illegible]陳列品と
大なる美術を添ふ等
此の[illegible]に揃へ皆此の国[illegible]と踏ひ、国旗
[illegible]も不慣ろも其使を盛す、幸ひ[illegible]
[illegible]御納戸を[illegible]其家名を

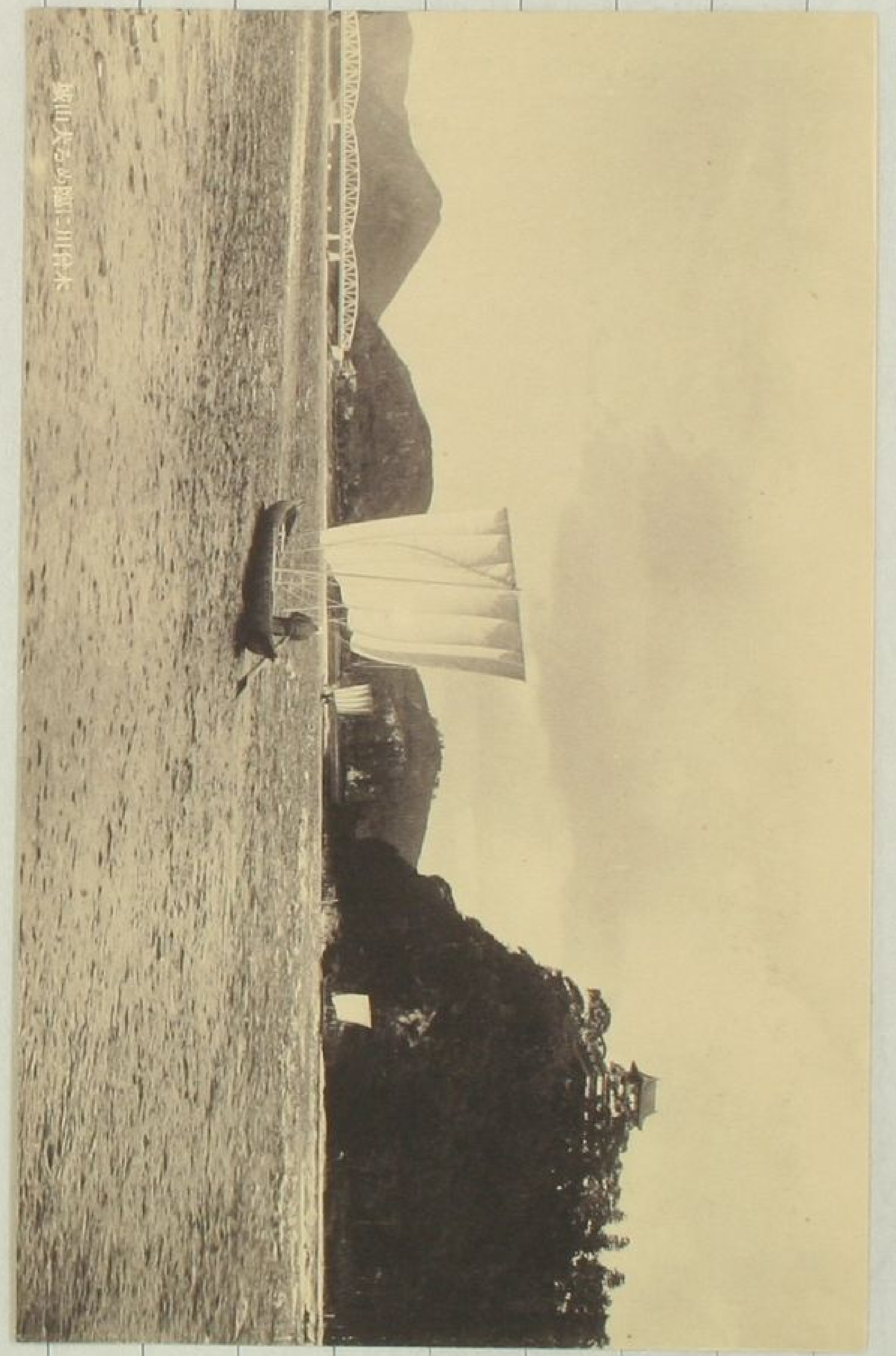
割烹の見舗なる酒舎に至り、痛飲大に因て洲今を索め
を補ふを得たり
十三日好晴なり、今朝北きを洒気あり、朝
食前和田の訪ふを受く、即ち庭前を共に出し
其各室を案内しもらふ、和田大なる結構の壮と
庭園の雅とに驚きて、麦酒を傾け清談に時を移
す、偶ゝ館主の伸喜を訪ひ来り、和田外を遠
し全救伴の詩を録す、午后和田と之に物象の全
こ就かんとし予和田を日時刻の[illegible]を雖ふ
能はずとなり夜十一時二十分発と決す、午后を
果ライン河を遊びてこる無窮を尽くるの餘光
あり、予が宿の意らしも夜り出ると寄せる

為め因らず、ライン河を日行の都合と寄せる此の
ラインの奇勝を前年探討したることあり、今回の
行を詳録する要なし、唯だ奇巌怪石の高に乗むる
の景と大山古城の風致とは二度見るも飽かさ
る思あることを記せば足る、例の如く汽車を上流
まで行き舟にて下り大山城下に達す、行程も
前回と異なる所なし、彩雲潤く繁穀の所め
を写きし物名、基督の山中推を予の旅館に
伴ひ、共に放談時を移し、遂に十一時の発汽
車にて投せしこれを名古屋三日に達し記となす
帰京後二日此記を作る

五月十五日



蓬仙ヶ関附近



木曾川より見たる犬山景

日野教東中文行堂に於て板碑拓本三十数枚を獲たり、又八品川の砲臺築造の時、土を御殿山に採りたりしに、土中より出たるもの多くて人骨も多く出でたるを、二事を録しける大伴某、碑と人骨を併せて品川の法禅寺と称しけるに瘞

碑に刻しある年号は、嘉永、応永、貞治、貞和寳徳、延文等にて南北朝時代のもの多し、此の拓本公にも尚ほ数あるやうに聞く、法禅寺には遺墳碑あり、と云ふ、碑文左の如し

安政元年甲寅歳幕府命築礮臺於品海先是、日昌言君乃幹其事、取土於御殿山以築焉、穿之数得古墳及遺骨

若干而出閲其歳月之記諸四五百年前之物也
嗚呼古之名将豪族[illegible]孫卜兆域於此未遷滄
嗟哉地変而淪没也陵谷之変豈可不感
愴哉先考患其散逸以混土塊為憂数豈
拾収之使役夫謹蔵於呂驛法禅寺之後山
後数年碑甚亦為魔誤而此墳以巍然而存
余亦有感深感因追記焉

明治二年己巳六月

駿州産人 大竹呂誠撰并書

下田吉成録

板を得て此の遺墳を一語らんことを録す墳誌啟也
日出土品を録することも余の初めて知る所也

板碑の年號目録左の如し

文保三年四月
元徳二年十月
暦応五年七月
康永二年八月
貞和五年八月
延文五年十月
六年二月、十月 三枚
康安二年二月
貞治三年 四年二月十日 七年月日
応安四年五六月、五月十日 六年十二月
永和二年
応永七年 十三年四月 十八年二月

廿一年　八月廿六日

廿二年

廿五年　十二月十九日

寶徳四年　八月十一日

享徳元年七月廿一日　二年八月十四日

文明十二年

以上

○今日散策中庫本一切経の内二十二経一冊を購ふ是は水戸光圀卿寄進経にて二ヶ所に左の如き印あるは珍らし、久昌寺は水戸の寺か未詳ならず、印文は隷書にて朱肉に捺しあり大きさは、竪二寸二三分幅一寸八分許なり

久昌寺経蔵
開山檀那
源光圀置

後日水戸の人に聞けば久昌寺は光圀が母堂の爲めに建立したる寺にて今も尚存在すと云ふ

荅蹟録上巻　津阪東陽

田ヲ守ル蜀人ヲカヾシト呼ブハ鹿驚(シカオドカシ)ノ中ニ言略シタルナリ俗語テ案山子ト書ス世多ク其由ヲ詳ニセズ案山ハ案(ツクエ)ノ様ナル山ト云フコト子ハ俗語ノ助字ニ就ルヲ鹿驚ノ稱トスルハ北條足利ガ不文ノ世ニハ好テ五山禅徒ノ稱呼ヲ用エレバ不文字家ヲ謬リタル誤ナルベシ、傳灯袁程齊禅師傳ニ僧問孤廻々峭巍々時如何　師曰孤廻々峭巍々　僧曰不会　師曰面前案山子也不会トアリコレハ城郭室宇ヲ創営スルニ地理ノ吉凶ヲ択ブニ遠山ノ環拱スル境ヲ吉トス　ソレニ主山　輔山　案山ト云フコトアリ　北ノ方ニ当リテ卬一秀タルヲ主山トス　主左右ニ連リテ主山ヲ輔クル勢アルヲ輔山トス　主山ノ前ニ離レタル小山アリテ案ヲ供タル様ナルヲ案山トス　彼方ノ俗ハ拘忌甚シク殊ニ地ヲトスルコヲ重ンズ　故ニケ様ノ名目アリ　因テ伽藍ヲ建立スルニモ必ズ此地形ヲ貴ブ　サレハ後堂後院方丈ヨリシテ望メハ案山子面前ニ対スルナリ　此方ノ禅家コレヲ知ラズ　子ノ字ヲ傀儡子ナドノ子トシ面前トアルニ泥テ贍揣シテ門前ノ山畑ナドニ立タル人形ノ鳥オドシノコトヽセシヨリ遂ニ此誤ヲ世ニ傳タルナリ

莫ニ菜山子モ不分ナリ明人陳元贇ガ投化セシニ或人良
則子ヲ問ヒケレバ跖上ニ挿シタル髻ヲ示シテ此物ノ俗称
ナリト答ヘケルモ妄ト同日ノ談ナリ又雲泉語彙ニモ赤山寺
菜山纸トアリ又菜山寓主山雨トアリ晴直千ニ幸後ノ鈷
山ヲ指テ賦セルナリ カガシノ漢名ハ閑物ニ鷹俑アレドモ
コレハ鷹ニ肖タル鳥オドシナリ人形ノ物ニハ非ズ唐人李蔵
用カ詩ニ嚇鷹翳戴笠 驅犢篠充鞭トアルハ正シク藁
人ノ鳥オドシヲ云ヘリ 鶴亭樂府ニ草仿傑 又説郛ニ
戴タル秋浪向カ権子ニ題目假人ト書シテ正シク此物ヲ

咏ルヽ人有魚池 苦群鶴窺啄食之 久之時號以篛戴　右東草披
笠持竿植之池中 以懾之 群鶴初回翔不敢即下 巳
漸審視下啄 久之時飛止笠上 恬不為驚 人有見者竊
去芻人自披蓑戴笠而立池中 鶴仍下啄 乃止如故
人随舉手執其足 鶴不能脱 奮翼声假々 人曰 先故
假人今亦假耶トアリ 俗ニ池シテ一笑ニ供スルニテモ能詠
者流ハ固ヨリ言フニ足ラズ 某先生秋興ノ詩ニ 林園晨
中 飢鶉啄紅柿 瑠風雨多 但鋸寒山子ト作ル
リ菜山翁シテハ大変ナリ 唐人ニ見セバ驚怪スベシ 就路

詠物百首ニモ案山子アリ改メテ草坊票ト題スヘキナリ
学氏雑字話編ニハ地理ノ部ニ載タレドモ従謬テカヾシト
訳セリカヾシト云ヘル和名ハ古書古歌ニ見エズサレド古
ヨリ称ハル称ナルベシ 山田曽保津ト云フコトハ古事記ニ山
田曽富騰トイヘル神アリ 古今六帖ニ曽保津ノ歌三
首アリ一首ハ裾ニ袖ヲソホツニヨセテ詠タリ余二集ニソ
ウツトアルハ誤ナリ 續古今集ニ載タル家隆卿ノ歌ニ
山田守ル曽保津ノ身コソ哀レナレ秋ハテヌレハトフ人モナ
シトアルハ借題自ラ身ノ老タルコトヲ曽保津ニ寄セテ詠

タルノミ 此ノ歌ニ因テ俗説古賓ノ身ヲ杜撰シ是ヲ北
ル名目ナリトスルハ弁スルニ足ラサル附会ナリ蓋シ此編山田
ニ設クルコト多ケレバ鹿驚カシト云フコトナルベシソレヲ中
略シテカヾシト呼ヘハ引板ヲヒタト云フニ同シカル雑話ノ
古歌ニ論レタルハ恨ムヘシ 謡会仏国禅師ノ歌ニ 心アリテ
守トナレド小山田ニイタヅラナラヌカヾシナリケリ 大ベシト云フコ
ト歌詞ニ見エタルハコレヲ始メトス
升清中古歌ニハカヽシ、は嚇しより何もかゝるり
嵩北ノ作カヽシは古ボロ帰たまどに火をつけて田畠

の所ニ有之其奥氣ニて戯を以而なせりかーシ候
　　ナお　明らし

右諸先生方ハ約束之通り迄分陳共次第ニ
麻疹ニて大分取紛れ延引候間
宜しく奉願上候乱筆御判読下さ度候
　　　　三村清三郎
本嶋太織様
　　学兄　梨本十ち七日
　　　　案下

○田中光顕伯から西山宗因の飛鳥川を複製した
本を寄せられた。此の書は西山宗因が自筆の紀行で寛永
九年六月、肥後の藩主加藤清正の子である忠広が、
所領を没収され、出羽の庄内酒井忠勝の許に預け
られた為め、家中のものは皆主を失ひ禄に離れたが
宗因は当時八代の城代加藤右馬允正方に仕へて
居たが、この変動で八代を引払ひ、主人の正方に従つて
京へ上り更に武蔵へ赴き、京都へ引返して此旅の
間のことを書き記したものが、宗因の此書として尤も稀有
のものとされてゐる。巻末に幽斎野子とあるが、これが
宗因の落款である。全体宗因の筆蹟はこれらと正
確に合つて居るのかどうかは、由つて従来の臆測とも正

することが出来る大切の資料である。田中伯の蔵せる原本
は和歌一首を記した池邊義象に与へられたことが
あるが、同人死後伯の許へ復帰し、今は伯も亡き後の
青山文庫に寄贈されてあるさうだ。今は原本を
そのまゝ複製し粘葉綴とし別に活字本と東北
大学教授小宮豊隆の考証とを合本したものが出来
装釘になされて添附されてゐる、珍重すべきものであ
る。先頃名古屋に行つた折真福寺の國寶（国書）を見
る為め書庫を一覧したが、其書庫改造の企てのあ
ることを聞いたが、果して全部建築の費額が
事、遠藤柳作氏が市の評議員を頼んでゐたその
寄せ集めた寺籍に就て見ると、現在國寶に指定され

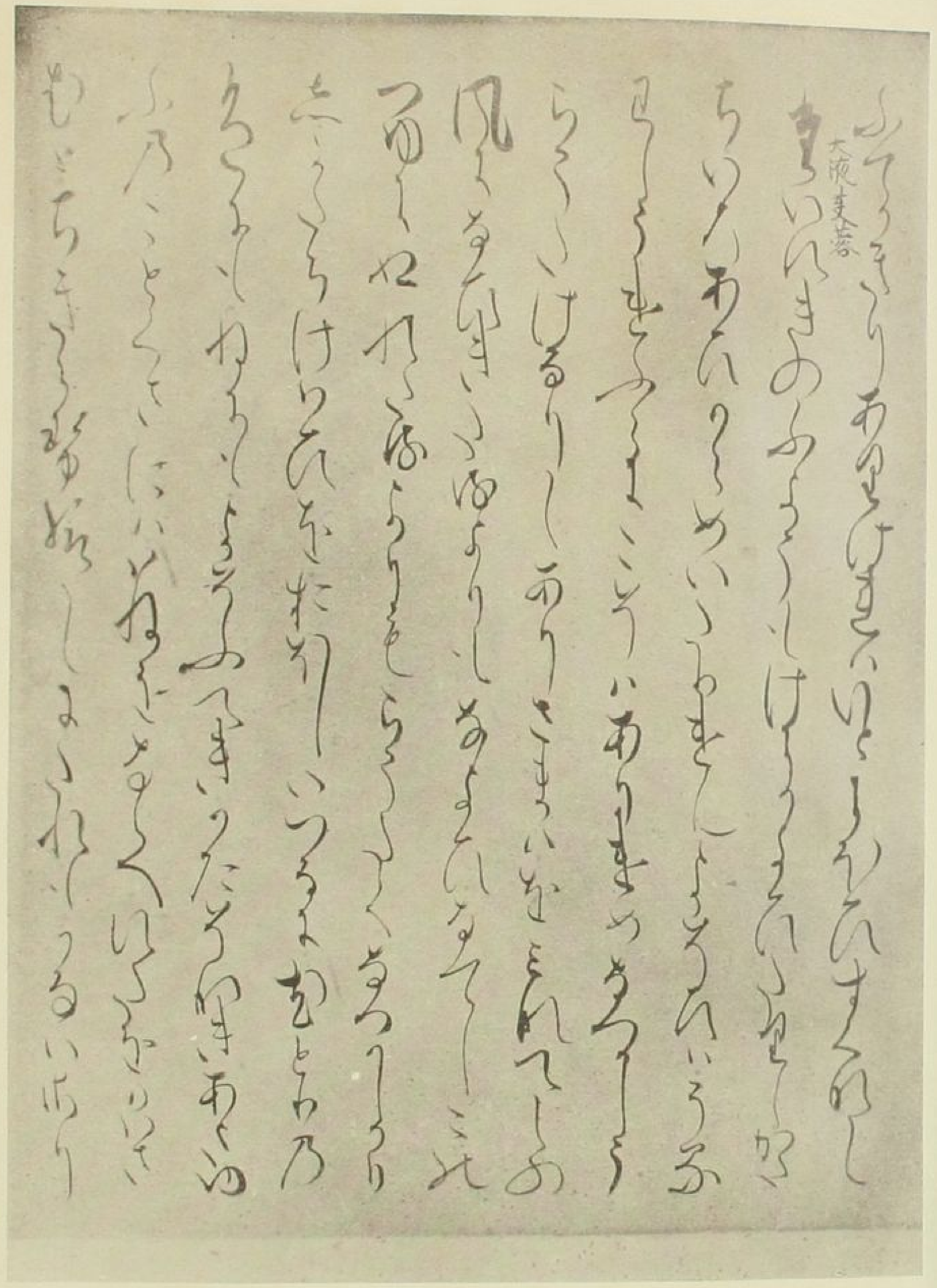
ともなるもの寺籍と他のものを併せれば既に二十九點に達してお
る。尚調査を進めるなら、猶多く國寶たるべきものが猶現は
れることであらうから、終には百點にも上るであらうと云はれてゐる。
蔵書の總数は一万五千と云はれてゐるが、此等の書を納め
てある經藏は百二十年前の文政四年に始めて全部の目
録を作り、又其の書数は二千十三冊に及んで居ると云ふ、
此の寺寶を作つたものは尾張の藩祖徳川義直で、元
和年中の文庫の屋根を葺き換へたとき、新たに
木箱を作つたと傳へられてゐる。又害もあり火災もあ
つたのは不思議で其の屋を免かれたものである。現在の書
庫は明治時代の餘弱のものであるが、一朝火災があれば烏有に
帰することを思はされ、それが（何とかならぬものか）建築は鐵筋コン

シリーズとして一八体七七、此費用四萬円（木台）ニ展観
又一八体三三で此費五千円、旅費を合せ五萬円を
寄附と募る計画である
○現在存じて居る人形玩具の名人と云へば先づ大保莊
四郎と居るが彼の如きも特別である。自分は小笛の
蒐集で、此人の縮模した玩具をこんなに集めたのが百
點を達して居るが、此者より面接の機会を得ず過
ぎたが二三日前西澤笛畝の紹介で訪ねて来たので初
め面接した。此人は昨年還暦で本年人形製作
家同人が組織して居る白澤會で此人の還暦を祝する
会があるのを告げに来た。自分も白澤會の賛成人として
まうてくれまとの依頼があり、亦還暦の祝の印刷物
に一文を寄せてくれとの頼もあつたので承諾したが、此の白澤
会の職人形、デパート人形、押絵等々色々の人形師が
六人で組織して居ると云ふ事は何れも皆其専門
の腕を有つて居るので、勤めまれば自分の本領であるから
くまで手を出す癖があると常々云つて居たが、自分はそれの
よろしからぬと戒めた。本玩具の製作は日本が世界
一で、今後世界を目的として懸命に励めば大い
に奮闘を要することであると告げた。○此人は近元と云ふ
て鼓を手にする裸人形を得意としたが、佳作である。
○此頃小山枯壽と会したが、いよいよ還暦後が出来た。自
分の還暦時代より今日のやうに盛会の文様もある事
に托して還暦人に酒を振る舞ふこともあつたが、

人を合して一人残らず、酒を飲み廻はるのも大儀のことであつては、飲み廻はりを一人でも漏らさば不公平の怨訴を受けるから、是れは注意を要するが、思案酒のひどい酒をつゞけさまに数十杯飲まさるゝのは酒ずきの自分も閉口したと語つた話、小山の若山は自分は遠慮運動で甚だしく茶で腸胃を害したと云ふて語るを聞くに、名古屋は今でも抹茶が流行して、較々目覚しい家々は大抵茶室があつて、若し都市の待遇をなすには其の茶室におもてなしすることが恒となつてゐる、選挙運動で或る家を訪ひ、茶室に請ぜらるれば其家の主人は自分に同情があつたと見てよからうから、主人が茶室に伴はるゝが、茶の法式が分つて時間が潰れるので困るけれども、有効なる一人を味方に引き入れるには近道のものとなるから、時間潰しに辛抱が出来るが、抹茶を勧められて終に飲んでみるのには到底堪まらぬ。三四軒同じやうな待遇を受けるのには元気が萎えてどうすることもならぬ、これが為めに胃病を得たこともある、然るにある茶の心得のある者は、自分に注意して茶席に入つても必ずしも茶を喫するに及ばぬ、茶の代りに湯を望むことも茶席の法にあると申されたれからは湯を乞ふて済ますことにきまつたと語つたが、ちやうど茶の流行の盛なる自分の郷里のことがあると思はれた。

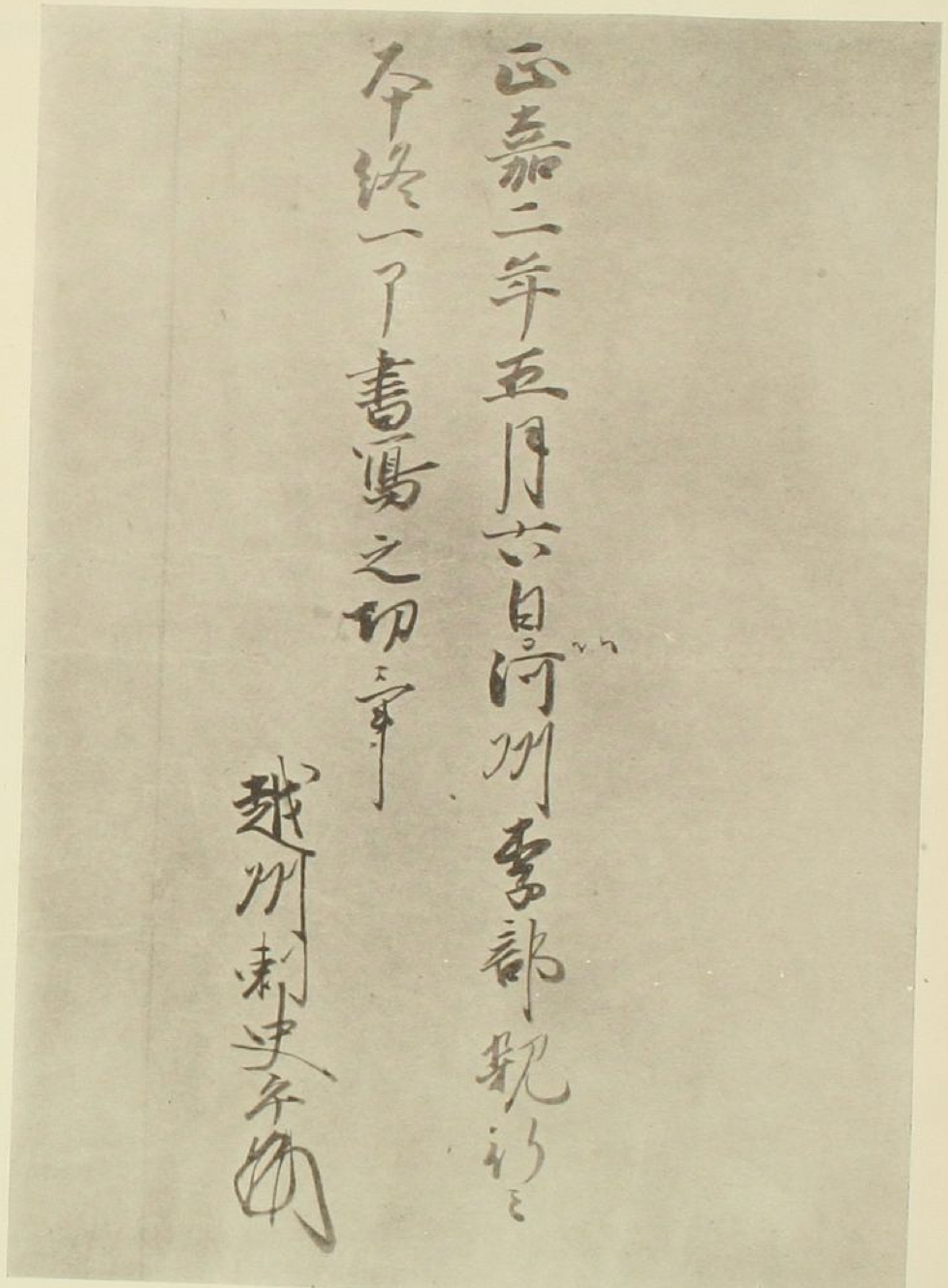
○伊豆の下田の了仙寺の住職が生殖器の研究と称して生殖に関する猥具を五百點から室の七集めて並べてあるのを見せてゐる。此程自分の會社名簿に印刷同業者が下田に遠足を試みた折、臨時的會員となつて一讀した其標を覗くと、其のコレクシヨンは多く各方面で随分類を捜めやうとのがあると思はれ、數で多からず風俗上見せてよくぬとしたものが三る點もあつて、其れは錠が卸されて一見を得るのであるが、餘程確根のものがあることが惠係さんと語つた。いくら生殖器の研究でも春畫や陰具帯物のやうな或る範圍を踰へたものを寺の見勢物とするなどは行き過ぎてゐる。多分これも賽錢取りの一方便として案出されたものであらう。

○山陽の遺墨の鑑定をとふものが月に或田とかく來たが、一昨横巾六尺の四二巻を持參し、此人物あり。最古も識語も頼玄緒の筆で成つてゐる。此人は頼家の血族であるのに、此人の審定したものは往々誤鑑のものがあつても、書畫家の信用の全く地に墜ちてゐる。自分もさんざ畫家書を見たがどうかなくんと抜いて見るとあまり正しいものはないのであつた。書兒童の習字の手本に書いたものらしく、小学範辞が全部大字で書かれ、首部の尭章剥製のあれり、墨で汚かれてゐるのは手本の實体を缺い



源氏物語河内本（桐壺巻）正嘉二年寫　德川義親侯藏

してゐる。全体教家には古人の神髄に偏する小字の悪癖が刻板に成つてゐて、又今も教家に在つてもゐることなくる、山陽もそれに倣ふと同じものを書いてゐるが、書体は決して父に倣つたものでなく、山陽独特の毫致の氣が漲つてゐる。いつ頃か京都で教へ瀾をうたふれが、三樹の手本として山陽が日本の國史しを大字で書いたものを見たことがあるが、それは其数である。但しそれは廣峰から出たと持主の話しである。



源氏物語河内本　(夢浮橋巻末奥書)　正嘉二年寫　徳川義親侯藏

尾州徳川家藏源氏物語河内本

正嘉二年寫

河内守源親行は諸本の校勘に畢生の心血を注いだ。就中、源氏物語は其の父光行の時代からの繼續事業として世を終るまで校勘の手をやめなかつた。彼の取扱つた源氏物語は何部あつたか知れないが、明かに知られるものだけでも二十餘種はある。從つて當時この家は源氏物語本文研究の棟梁と目されて居た。かくして校勘せられた光行・親行の源氏物語を河内守の因緣に據つて、河内本と稱する。然し、かく校勘が畢生の事業であつたが故に、河内本と言つても、唯一種に限らない。同じ河内本中にも又多少の異同はある。尾州家本は其の早い頃の河内本であるかも知れない。

尾州本は、菊判を横に二つ並べた程の極めて大型なもので、十餘人の能筆の寄合ひ書き、時代も來暦も明確な五十四帖完本中、唯一の古いものである。加ふるに古筆としての價値も亦高く、何れにせよ、實に貴重なるものである。

尚、實隆公記明應四年十月四日の記事に見える十卷缺本を足利義教の時に補寫したと言ふ河内本は、尾州本と同じ様なものらしいが、また別箇のものたる事は明かである。

寫眞其の一　　桐壺卷の一部

桐壺の卷の一部、「をみなへしの風に云々」の一句は、青表紙本に無い。これは河内本の一特色である。この卷の書者は、後京極良經卿と「極」にあるが、其れでは時代も叶はず、又良經筆の北野緣起の書風とも違つて居る。故に「極」は信ずる事が出來ないけれども、かゝる書風は一般に爲家筆の如く傳へられてゐるもので、鎌倉期の好尙と氣品とを充分に現してゐる。又、全卷に施されてゐる朱筆の句讀點にも頗る注意す可きものがある。

寫眞其の二　　夢の浮橋卷末奥書

夢の浮橋卷の奥書に言ふ正嘉二年（一九二八）は、後深草帝の御代で、今日より六百七十六年前に當る。北條時宗が十七歲で、未だ執權になる二年前である。越州刺史は越後守平（北條）貞時で、金澤文庫創始者と言はれてゐる人である事は言ふまで無い。（山岸德平）

源氏五十四帖の完き古寫本現る

昭和五年名古屋の舊藩邸（百三十餘萬圓）と代々傳はる家寶の美術品ほとんど全部とを名古屋市に寄附、自身は專攻する生物學研究に沒頭してゐた德川義親侯の手許に現存古寫本中完本としては恐らく唯一最古のものだらうと折紙付の源氏物語古寫本五十四でふが發見され國文學界の注目をひいてゐる。元來源氏物語にはこれまで定本と稱すべきものがなく、現在の流布本は藤原定家の校本たる靑表紙本と、源光行の河內本との二種に限り、學界では河內本が恐らくもつとも原本に近いものではないかと珍重されてゐた、然るにこの河內本には完本なく大阪の平瀨三七雄氏の所藏する平瀨本が部分的であるが河內本として最古のものと今まで珍重されてゐた、義親侯の書庫中に最近發見されたものは河內本の系統に屬し、六百七十餘年の歲月を經過した珍本と認められたのでここに從來の流布本は全く權威を失ひ、源氏物語は今後この新發見本による讀み直しを迫られるわけである、かれて學術研究に理解の深い義親侯は早速これを寫眞版に複製、學界に貢献する計畫を立てたが何分大册であるので十五日午後二時からその一部を目白町四ノ四一の尾張德川黎明會の文庫に陳列、關係專門家の一覽に供することになつた、右につき佐々木信綱氏は語る

私は源氏物語專門ではないので甚だせん越と思ひますが、何しろ大したもので完本ではあり私共も改めて源氏物語を認識しなほさなくてはなるまいと思つてます、またわざ〳〵複寫して下さる御計畫もあるさか、まことに學界のため慶賀にたへません、十五日は私ももう一度伺つて拜見出來るのを樂しみにして居ります（昭和八、四、一五　東朝）

〇退（?）日あ同善次郎一方ニ見れ古銅印の面ニ「己酉首
丸」と刻した印があつた。其ニ三村竹清があつて、こん
ハ伊勢オビト麿と讀むのだと云ふた。此印の主ハ伊
勢國度会郡大神宮氏神主荒木田首麿と
三代實録陽成天皇元慶三年五月廿六日の條
ニある首麿の用ひし印と傳へられてゐると語つ
た。尚安田の話ハ、昔の藝事の弟子のすなほく（?）
傳へられたといふ一つの证拠ニ太鼓の譜を貼
つた本が自分の蔵架中ニあるといふた。譜を
すくといふハ今のが譜を貼るといふ意味で、今日
で云へバ、ノートへ太鼓の譜即ち打ち方を記つた
ル逮（?）見して、豫め小さい紙を譜の目ニ切つておいた

打ち方の譜を書いてある。師匠が大鼓を舞台で
打つのを、ヂット聴きながら、太鼓の道の順序
れこの譜の紙切を貼りつけて、ノートとしておくと
いふ方法である。昔の藝ハかうして師匠の舞台の
實際をノートしたものらしい。又或る藝の口傳
抱きすると、一見口傳の當だけを、抜かして何も書
いてゐない。やうに見える本があるが、其の實口傳秘
傳も書いてある。唯空白の如く見えるが、ここを光
線ニすかして見ると、チャンと見えるといふ書き
方もある。これも太鼓の譜であるが、このすかし溶
いて見えるのハ朱ニ胡粉を溶かして秘傳のところ
だけ書いてある。一寸見ると空白ニ見えた。逸志

本會制定術語原案

五山版の定義　原案

五山版とは、五山并に禪宗關係者によつて、鎌倉室町間に刊行せられたる書籍をいふ。

附言

鎌倉室町間の刊本にして、吾人が五山版と稱する範圍に入らざるもの下の如し。

高野板（根來板を含む）　叡山板

奈良刊經　淨土教板

正平板論語　阿佐井野板

山口板（大内板）附明應板論語

伊知地所刊本

古活字本の定義　原案

慶長・寛永間に作られたる活字を以つて印行せられたる書籍を古活字本と云ふ。

活字本の定義　原案

正保より明治初年に至る間に作られたる舊式の活字の印本を活字本（又は活字版）と稱す。現行の活字版は前者と區別する爲に、之を活版本（又は活版、唐本に所謂鉛印本）と云ふ。

附記

一字版、植字版、聚珍版、排字本、排印本等の稱呼は之を避くること。

木板、活字版以外の特殊印本中、重要なる印本の稱呼の制定　原案

石版本（唐本に所謂石印本）

銅版本

謄寫版本（唐本に所謂油印本）

玻璃版本（コロタイプ）

タイプライター

再製本の稱呼　定義

飜刻本

再製せる刊本を總稱して飜刻本といふ。

影印本

科學的方法を以て覆製したる書籍を特に影印本と云ふ。

角がこすれると書いてあるといふ位迄である、珍らしい藝術として扱つてあると謂つた。

○書物に關する術語は、さまゞあつて、昔しから思ひゝに稱呼し、人の個人的に用ゐられてゐるが、實は定義も定まらず、其範圍と云ふも其の範圍が漠としてゐるので、頗る紛らはしく、科學的に一定する必要があるので、書史學會に於て一二回會議を開いて、討論の末大體を定めたが、これを決定するまでには尚研究を要するが、其の案は左の如くである。

榛原製

覆刻本

原刊本の原型に摸して再製せる刊本は特に覆刻本と云ふ。

摸刻本

原寫本を摸して刻したる刊本を云ふ。

覆製本

影印本・覆刻本・摸刻本を總稱して覆製本（複製本）と云ふ。

附記一

特に活字本に就いて飜印本の稱呼は用ひずとも可なるべし。

附記二

仿刻本の文字は仿宋本等と混ずる恐あれば之を用ひず。仿宋本とは、宋刊本の書體に摸して刻したる、覆刻本ならざる本を稱したることあり、例へば、清刊本憺園文集（徐乾學）の如し。又覆刻本に於て、影宋本、影元本を用うるは、吾人の所謂影印本と混じ易きを以て、之をも避くべきなり。（長澤）

尾州德川家源氏物語河內本公刊の企

最近、新聞紙上等にも報道せられた如く、尾州德川家の源氏物語河內本（本誌卷頭口繪參照）が、愈々義親侯に據つて公刊せられる事になつたのは、學界にとつて眞に慶賀す可き事である。過日、公刊の準備の完了を機會に之を展觀して世の識者に初めて公開せられた。尾州家本源氏物語河內本に就いては本誌の卷頭にも解說と共に寫眞をも掲げ得た事であるから、附言する必要もないが、該書は數年前より山岸德平氏が研究上貴重なものである事を認められ、其の學界を益するもの多大なる事を提唱し、義親侯自ら進んで其の公刊を企てられ、爾來着々と周到なる準備を整へられて、この程漸く公刊の運びを見んとするに至つたものである。

五十四帖全卷、かゝる大部の國書が、七條式金屬版を以て覆製せられる如きは、實に我が學界未曾有の慶事である。原本が極めて大型である爲、多少型を縮めた外、原型の儘を傳へて出版せられるのであるが、この他に、な

書齋めぐり（その一）

書齋に於ける市嶋春城氏

玄關の襖を開けると直ぐ市嶋氏の書齋である。居間兼書齋兼應接室。お茶も自ら入れて出し、女中の手を煩はすことがない。この一室三兼が先生の主義であり、簡略主義を高唱？される所以である。鬪筆をかくには參考書（？）も要らないと說明される。次の間には地方玩具がギッしりと並んでゐる。（八・五・一五午前撮影）

ら

芝居

英四　澄子

ミミヅクの大廣間

夜鳥が集つてダンスをし・ふと一羽の夜鳥がおどとめて、主客席の方を見

フクロさんが居ないぢや。

當だ、どうしたんだらう興奮して、それをおさへて冷靜な態を裝ふてゐるフクロが居なくなつたの客が何となく不快さうヅクの方を見てゐるのにいた彼——ミ、ヅク）

あゝ　あれはあゝ言つんですよ、實に社交的にですな、この僕が居なけべても行けないくせに生

意氣な事をするから、今夜はこらしてやらうと思つたのですが

（二三羽の鳥共コソコソと）

よくまああんなことが言へたもんだね。

實に藝術家でもあゝなつては尊敬の價値がないぢやないか……

他の鳥（あひづちをうつて）うむ、實さいだね。併しあゝ言つたのが彼の人生觀なんだらう人をよくも理解しないで己れから人を推して、人の弱點をついてそれを己れの享樂として行くといふ樣な實にケチな男だね。フクロ君との場合はあはれにもそれはフクロ君の弱點を突いてゐる事にはなつてゐなかつたんだがね。

他の鳥　斷然僕はこゝにゐるのが嫌になつた、僕あ歸るよ。苟も紳士淑女の集りに於てかやうな事をしてフクロ君を辱めるなんて全く言語、同斷だ僕あ……

他の鳥　まあそんなに奮慨し給ふな。

第二景　フクロの部屋

（フクロふらりとはいつて來る）

フクロの妹　おかへりない、おや兄さん、なんだか羽の色が蒼黒くなつてゐるわ、どこかお加減でも惡いんぢやない？

フクロ　いや、何でもない。

妹　そんならいゝけど、でもいつもの樣ぢやなくつてよ、いつもの樣に、馬鹿騷をしないだけでも全く變ね（間）

今夜のミミヅクさんの夜會は面白かつて？　あなたが主客だつたんでせう、どんなだつたの、聞かして下さらない、例の夢の樣な物語り語調で

フクロ　おや、おや、こゝにも俺を侮る奴が居るわい。あゝ話すとも、愉快だつたよ實にね。あんな愉快な事には、まあこれからあんまり出會したくないもんだ、友達もあゝなりやない方がまだいゝ、イテフの葉つぱとでも踊る方がなんぼよい、靑空の匂ひを嗅ぎながら、あの大モミの木のステップンで瞑想でもしてゐた方がよつぽどいゝよ。彼は詩人だ、僕はあはれなお伽噺語りさ、けれどもだ、本當の藝術家ならだね、あの靑空のやうな、靑空の樣な心をもつてゐなけりやならないんだと僕は思ふんだ。尤も僕達は悲しいかなあんまりあの蒼空を見る事は出來ないんだがね、だからなほ僕は、あこがれてゐるんだ。僕の友達は、あの靑空は子供の樣に無邪氣だといつた。さうなんだ、實さいあゝいふ心でゐなきあならないんだ、推測や憶測で人を傷けるもんぢやないんだ。默つて語らずして相共に通じたいと思つてゐる友達同志が、友達を疑つちやこれでお終ひなんだ。今迄一人の、一人しかない本當の友達と思つて我慢して來たけれども、いつくら僕が木念仁でもなぶりものにされちや、それだけ相手を輕蔑しなきやならないのは今まで親友と思つて來ただけ殘念な事だ。僕は主客だつたが實は僕をたぶらかす計畫だつたらしいね、わけはあるさ、けれどこれですつかり清算したことになるから淸々したよ……（しばらく間あり）

妹　兄さん、兄さん、兄さんたら兄さんはよく寢言をいふのね、私あなたが本當に仰るのかと思つたら寢ていらつしやるのね。

——幕——

（かさこそと枯葉の音かすかに聞ゆ）

愉快な

高瀬舟に就て

文藝の時間

學生B　「詰り一口に言へば喜助は足る事を知る人間で、庄兵衛は

說とは思ひません。其事は終と結びつけて考へたらどうですか。ど

く分つた。まあ其を把握すれば此小說はいゝわけですね。心が變化

○早稲田村の一名物大隈老侯も刀自を喪ふので早く十二三日を逝く。女性として大隈老侯の神髄を傳くれのはあの人であつた。早稲田は此人を失つて寂寞を感ずる。益善二回此人を訪ふことが例で、いつも面晤に愉快を覚へたが、今年も又逝去の年中行事となつた。あの人ほど人に厚く終始早大を念とした人は無かつた。臨終迄も早大の遺言書中五万円を贈與することを遺言されたといふが、之が早大を念とされし現はれである。殊に女子大学の通報に該話を添へんで極めて大略を語つたが、右の切換で　まんがある。

榛原製

日本女性の龜鑑
大隈熊子刀自の御生涯
春城・市島謙吉氏は語る

大隈熊子刀自は、本校生みの親の一人として御盡し下さつた故評議員大隈重信侯の愛孃でいらつしやる關係上、間接に本校のため御盡し下さつた事も多大でありますが、夙に賢婦の聞え高くいらつしやるので、私ども女性へのよき訓へと思ひ、老侯時代から侯爵家に關係の深い早稲田大學名譽理事市島謙吉氏に特に請うて、このお話をして戴きました。お寫眞を是非戴きたかつたのですが、刀自は御寫眞がお嫌ひで殆ど絶無との事、殘念ながら拜借出來ませんでした。因みに刀自の告別式は廿一日午前八時半から大隈會館で盛大に行はれました。

滅多にない女性

私共は随分と永い關係にあるので、熊子刀自が大隈さんの邸に殘つてをられる事を秘かに氣強く感じ、さながら老侯が存命せられる如く、あそこ（大隈邸）を大切な場所と心得てゐたのであります。と云ふのは、あそこには父老侯を祭つた祠堂があつて、刀自が今日迄あそこにをられたのもそのためだつたからであります。そして私共早稲田村の者にとつては、あの方（刀自）が生きてをられると云ふ事だけで、早稲田村の一名物と考へ誇りともしてをつたのであります。それは敢へて刀自が英傑の血統を受けられたからばかりではなく、事實私達の知る限りでは、あれ程の女性といふものは滅多にないと迄に感じ入つてをるからであります。

校庭の一隅から

昔から豪い女性と云ふと、宮家から將軍家へ降嫁された和宮さんを擧げますが、刀自は境遇こそ違へ、これと匹敵する程に立派な女性であつたと思ひます。早稲田には何萬と云ふ學生がをりますが、刀自が女性であられるから滅多に訪ねる事もないが、宛然として刀自が在られる事を相傳へて、秘かに早稲田の誇りとすると同時に、世間でも多少とも刀自を知る者は非常な崇拜をしてをつたのであります。

處で御本人に、第一に老侯の血を受けて非常に聰明な方であつた上、文學には殊に通曉されその他何事にも通じられぬはなく、筆蹟なども中々美事に、歌も詠まれた。とり分け暇があるために中々よく讀書をされ、それも驚くばかり多方面に及び、時々は私共さへ驚かされる程であります。例へば「玉葉」など云ふ義經時分の事が書かれた甚だ讀みにくい物まで讀まれてゐる。當時の書は、朝廷の儀式など解らぬ事が多く、專門家でないと中々手にせぬ程のものであるが、刀自はそれらに就いて時々私共に質問を發せられ、大いに閉口したものでありました。その半面今日の時世などに就ても實に立派な考を持たれ、私共御尤もと敬服御同感に堪へぬやうなお話も屢々あります。一體に辯舌頗る爽やかに、云つて見れば能辯と申上げる他はないが、流石に品格のあるお言葉であつて、女性らしさを毫も失はず、如何にも物柔かであるが何處か凛然として冒すべからざるものがあり、その底に強さがほのめくのであります。私などは昔からの御懇意に任せて、つい勝手な口を利き勝ちであつたが、偶々刀自が他の方と應待してをられるのを拜見して實に此の感が深いのであります。——曾て松方老公とお話してをられるのを偶然傍に居つて拜聽した事があつた。それは綾子刀自が御亡くなりになつたときに松方公が御見舞ひに御出でになつた時の事であつて、私はその御應待ぶりを見て成る程と思つたのでありました。辯舌は飽く迄も爽かに、淀む處なく話されるのであるが、如何にも肺肝から言葉が出るのであります。それに自分を衒ふと云ふやうな事は微塵も云はれず、萬事を養子である信常侯夫妻に持つてゆかれます。例へば松方公が「御母様が御亡くなりでお淋しうございませう」と云はれゝば「信常夫婦が萬事よくしてくれますので……」と云ふ風に、一寸他人には眞似られぬ趣きがある事をつくづくと感じたのでありまして、短い時間であつたが松方公も非常に感ぜられた御樣子でありました。

鍛へに鍛へた美徳

刀自はまた、自分が豪いと云ふやうに云はれる事を非常にお嫌ひになり、なるたけ自分を匿す事に汲々として、如何にも謙遜丁寧にしかも何事も知つてをられたのであつて、此の美德には全く敬服致します。邸には、無論男もをり召使ひもをりますが、刀自は側近く仕へる若い女に對しても呼び捨てにしたり、荒々しく用を命じたりされる事は絶對にないので如何にも淑かに、相手に「樣」こそ附けられぬが、略々それの如くに執事や家婢をもお取扱ひになるその御丁寧さには實に恐れ入る他はありません。

併し、考へて見ると刀自は随分御不幸な方であるので、この方面の事は深く申上げられませんが、表向き現れてゐる事實のみで申上げても、お幼い時に母親に別れられ、重信侯の母上三井子さんに育てられたとの事であります。そして九歳まで佐賀にをられ、此の年に始めてお祖母さんと一緒に東京に來られました。實は、母上存命でありましたが、故あつて大隈家から離別の身であります。或る時には熊子さんと會ふ機會もあつたさうでありますが、熊子さんは決して忍んで會ふやうな事はされなかつた——と云ふ風に、刀自はまた萬事非常に折目を正してをられました。のち、盛岡の南部家から英麿氏を養子に迎へられたのが熊子さんの十七歳の時でありまして、この御夫婦仲は極めてよく和合してをられたのでありますが、約廿二、三年程も御一緒でありました。しかも御夫婦の情愛などには少しも關係なき事柄から英麿さんと離縁になり、それ以來家居して今日に至つてゐるのであつて、最初は母上と別れ、後には夫に別れた御境遇でありました。それらの事を多少とも知る自分らは何だか涙が流れるやうな心持ちが致しましたが、刀自にあつては、斯樣な不幸な處で生長され、追々老境に向はれたその間の永い苦勞が、元來の聰明さに加はる一種の鍛錬ともなり、鍛へに鍛へられたと云ふ感じであります。

老侯在世中も、侯は政治的に多忙を極め、爆彈で片足を失はれた程だが、熊子刀自の家居しての勤めは御兩親にあらゆる孝を盡す事以外にはなく、御兩親が朝起きられると晩寢まれる迄の間に跪坐され、客の應接から、萬事萬端熊子さんが何くれとなく用を便ぜられたものであります。老侯が亡くなられて後、一年ほどで母綾子刀自が亡くなられましたが、その病床に於ける看護など實に至れり盡せりで、他所から來た手紙など全て熊子さんが讀んで聽かせられるのは勿論ですが、驚いた事は、男子の筆蹟などは中々讀めぬやうなものが多いのを、熊子さんはつゝかけ讀んで少しもよどみなく、まごつくなど云ふ事は全然ありません。病氣に限らず親に孝行をするなど云ふ事は世間普通の事かも知れませんが熊子さん程に屆いた孝養を盡した人は他に例がなからうと思ひます。

父老侯の光り

話は違ふが、刀自が夫君と別れられたのち、大分難病に罹られた事がありました。私は高田君（早苗氏）と二人で老侯をお尋ねしたところ、あの位快活な明るい侯がすつかり憂愁に閉されてをられるのには實に驚きました。平常は坐す間もなく談論風發盡きる事を知らぬ侯が、此の時ばかりは坐つてから歸る迄遂に一言も口を利かれぬ、流石に私共も座に堪へず早々御見舞を申して引退つた事がありますが、御親子の情さこそと思ひます。この時は靑山さん（醫博）も老侯も余程心配された樣子でありますが、手を上げた程に絶望的の場合で、如何なる心配事があつても俗人には曾て知られぬ程の侯にしては實に珍しい事に屬します。幸ひ熊子さんの病氣は平癒されたが、この事は大隈さんの老後にとつても非常に仕合せな事であつたと思ひます。病後、刀自は髪を切つてしまはれました、詳しい理由は知りませんが、矢張り夫君へ貞節の一表示であつたやうに思はれます。

病中の御樣子

今度の御病氣はあながち今年に發したものではないので、御自身では去年あたりから終りの近づいた御自覺があつたらしく、思はれます。少しも世に衒ふ氣のない方であるため、誤つて豪いなどと云はれる事を大變に嫌はれ私なども目にかゝれば愉快なほど快活縱横にお話をされますが、新聞記者などには決して話されず、流石の記者連中も「少しも種にならない」と弱り拔いてしまふと云ふ風でありました。その上、終り近きを知られたゝめか、永く保存された日記や歌なども全部自ら捨てられた事は非常に惜しい事であります。長い經歷や貴重な材料などもその中には澤山あつたでありませうに、それらはとうの昔に滅んでしまつてゐるわけであります。

晩年は少しく耳が遠く、目も暗くなられた樣ですが事を便ずるに不自由な程ではなかつたと思ひます。たゞどこ迄も負けぬ氣象の强い人で、身體の辛い事など絶對に見せられません。それ故、病床に就かれて以來も醫者を始め近親の人々も非常に困つた由であります。毎朝必ず自ら湯殿で顔を洗ひ相當化粧もされて一時間位は掛られたさうであります。醫者が是非看護婦をと申しても、一體に自身の事で人を煩はす事が御嫌ひで女中にも余り用をさせぬ程の人ゆゑ始めは聞き入れられなかつたが、醫者の言なので兎に角容れられる事になりました。然し看護婦が夜寢ずに看る事を知つて刀自はこれがまた氣の毒で堪らない、殊に夜中便所にゆかれる時はいつも看護婦が随いてゆくのを一層氣の毒がつて御いでになつた。そしてとう〳〵女性の人の、殊に嫌がる「便器」を寢室に御入れさせになつたのだと云ふ事を聞いてをります。

刀自の斯うした心遣ひと云ふものは實に何から何まで行屆いてをつて、我々事々に敬服の他はなかつたのでありました。

癌で亡くなられたやうでありますが、腹膜を併發され、腹部に水が溜るので之をとつたが一向お樂にならぬ、そこで絶食の必要が起り二週間水も呑めない狀態が續いたが、このために却つて小康を得られた。併し大患であつて最早絶望の事が周圍にも解り御自身もさう思はれて出來れば老侯薨去の日と同じ日（五月十日）にと思はれたらしく、十日には大分お惡かつたさうでありましたが、矢張りさうもゆかず、一週間後の十七日午後十一時卅五分に御亡くなりになりました。が、御最後は苦痛も追々薄らぎ、如何にも安泰にお過ごしになつたらしく御見受け致しました。享年七十一歳でいらつしやいましたが、刀自は常々非常に若く御見えになり先づ六十になられたかならぬ位にしか御見えにならず、曾て「おばあさん」と云ふ感じを受けた事がありません。臨終近くは大分御衰弱がひどく御顔の骨も少し荒立つて見えましたが、御亡くなりの後は平常通りの御顔に返られ安泰な美しい感じに充たされてをつたと思ひます。

日本女性の規範

いま刀自を喪つた事は、獨り大隈家の不幸のみならず、苟くもあの方の存在を知る者である以上、惜しまぬ者はないでありませう。事實、私共の知る限りでは、從來の女性にして刀自程の人は先づ稀れと思はれるのであつて、「女性」に若し規範を求めるならば斯うした人を指すのであらうと思はれます。如何にも慈愛深く、人知れず他人に恩惠を施された事は實に數知れぬ程であります。しかもこれを人に知られぬやうに、と此事には大分骨を折られた樣であります。

が、私など伺つても、絶えず氣にしてをられたのは早稲田大學の事で、この事は御遺言の中にも含まれてをつたやう仄かに伺つてをります。

新設アパート

位置　市電逢坂下ト牛込見付トノ中間、省線飯田橋驛ヨリ八三丁
部屋數　十二戸、三疊ト六疊又ハ八疊ヨリナル二間續、外ニ水道瓦斯引込ノ設備アル個別臺所
家賃　十九圓乃至二十五圓
特長　通風採光ヨク閑靜明朗、周到ナル設備

牛込神樂町一丁目一番地　平樂莊　電話牛込二二〇五

○故某中村口書房を過ぎ柏如亭の稿本二冊を購
ふ、一は詩本草、一は如亭山人題跋也、共架中に名家
手稿本の更に加へ得るを喜こぶ、詩本草、刻本と
対比するに多少の異同あり、題跋は刻本あるなし、
題跋の目多くは書画に係し、これまた山人の逸事
を知ること少からず、詩本草に比すれば寧ろ珠とす
べし、山人は曾て余の郷国に遊び遺子の存するもの
少からず、予山人の文を愛し従て山人の詩書を購ふ、
家に蔵する二曲の屏風には芳原の詩を録す、内
遊の表装には花卉を描くもの浦上春琴也、山人并
に春琴歿後に瀬ふの日、其枝の三輪氏に寄して収
る所也、稿本を得たるを喜び他事に及ぶ事、昭

和八年五月廿八日記

○先に名古屋の天守閣を見た、天守閣或は天主閣とも云
ふは、デウスを祀りたるキリスト関係に依ることなりとも思ひ
此時西洋流博士に質しけるに、博士も此事に留意し研
究したる事ありしが、キリスト教と全然関係なしと云
へり、博士は遂に関係あると思惟し、もと天主の二字
を書きたるを耶蘇教禁令後忌んで天守の二字に
改めたりと語りけれど、これは誤りならん、将軍の城に
天守の二字を用ひ諸侯の城には天主の二字を用ひ
との説もあり、全体天守閣は要塞の如きものにて、難攻
不落を期し、城主は最後ここに籠城することも必要
の一なるに似たり、閣の内部を見るに、君臣の居るべき

所もおのづから異つて居り、久しく之に籠る為めで無いから多くの設備もあるやうである。内部は井の字になつてゐるとは其一例で風呂桶なども見えず、湯ふれんのみが灘の唯一の用をなさるるに似たり。尚ほ考ふべし

○支那本国に佚して日本に存するの図書は甚だ多い。曽つて大典和尚（云如）は佛典の佚んで無くして我に存するものを取調べ若干を支那に贈らんとしたことがあつて其文を抄録したことを記臆してゐる。余いつぞや稲葉君山が内閣文庫の図書中支那に缺くるものを取調べて容易ならんことがある。種々な数を覚くまいが、百位はあつたらうと思ふ。支那では朝廷の代る毎に前朝の図書を忌んで破毀し、又は流布を禁ずることもあつて、書物の災難は数々としてあるから、之佚するのも多いはずだ。服部宇之吉は支那の佚書の目録を作らんと、長澤規矩也・神田喜一郎二君に嘱し、其の目録は三年を費して漸やく成り、此の長澤君が一本寄せられた。百頁に餘る印刷物であるが、約一千位の佚書が収めてあるとザツト考へられる。實は此目録を作ることの容易でない面倒な仕事で、無いと思つてゐるものがボツボツ出てくることもあるので、断定が出来ないらしい。此の書目の内には随分稀らしいものもあるかも知れない。未だ精しくして読んでゐることがあるもあらうが、兎に角此種の目録の印刷に附さ

○過般文藝春秋に於いて随筆的に犬養木堂
星亨、板垣伯、田口鼎軒の四人を書いたのが受
けた、実業の日本でも同しやうなものを書いてと
頼まれた、此の雜誌ハ実業的なものである政界の
人物でないが、反芻しるいが自分ハ政界の人物
を離れておつて居た、僅かに渋沢子、中野武営
古河市兵衛、安田善次郎、田口卯吉の四人
を随筆的に書き、肖像写影を觀して
投稿し、先方でハ私のそのよる実業界の人
ハ甲乙丙丁いろいろあるではないかと云ふのが我
輩の無い人のことを月並に書くことは欲しるい
いい銘々係すべきを書く、の誰のを書くが望みで

れたのはこれが始めてで、芸界の幸と謂ふべきである（五
月三十日記）
○余ハ下谷文行堂を過ぎ淡島椿岳の畫ける羅漢
圖像一帖を購ふ、素描にて葉、殆ど軽妙喜ぶべし
紙数八十紙に及ぶ、或ハ椿岳日課に畫する所か
帖尾に椿岳の署名と印あり、亦最後に梵雲
の識語あり、梵雲ハ蓋し子の寒月也
先考吉人頭陀椿岳佛理を敬し常に畫
禪三昧に耽り阿羅漢の尊影を彩畫
に留めて遺識する多年今ハ只其遺
墨を空裡に夢の如く思ふ而已
庚極月　澤渓　梵雲　寒月

榛原製

ハ讀者も興味が多く自分も興を覺へないから、稿を續けることを御免蒙つた。

[illegible]

○服部時計店の樓上で外國のガラス器の陳列を見た。こんどの世界のガラスの精良品はベルギーが第一と心得て居たが、此の陳列中で特に目を惹いたのは、チエツコの製品であつた。チエツコなどは粗野の國とのみ思つて居たが、全く自分の認識が足りなかつたので、此國の精製品の豪華さに一驚を喫した。百點もならんだ大數だが、どれもこれも金や五彩で壯な飾をされて目を眩するばかりで、ある貴族的のものばかりで、こんなものが

用ゐらるゝかと感じる。チエツコはいつか該部時計
店の主人が語つたことを思ひ出すが、スウエツルの精
良の時計は其の材料をうまく組み上げる技術
を有する國はチエツコであると云ふ。それが、若しさま
ざまな工藝的技術があれば、斯る豪華な硝
子器を製作し得る筈だと思はれる。併しつくづく思
はれ硝子器の長所は透明清白の處にある。チエツ
コの如く金銀或は彩色に飾り凄しそれはグロテスクになる
り徒に装飾するの傾きがある。矢張白耳義の方があつ
さりしたのが望ましい。あんな風な豪華壯麗
飾びた、僅かにガラスの本領が壯麗飾の間にほのめく
位では、硝子器の性質は變して仕舞ふやうに

思はれるが、併し外國の趣味は日本と異なりて瀟洒
にあらず、アクドクきけんがらぬとあれば、チエツコ
の製造品も外人の者も喜ぶ所であらうと思は
れる。

○大震災後いろいろ改まつたが、ある中にも最も痛
く感ずるのは道路の改善されたことで、これは確かに
一革命である。日本の首府も長い間道路の眞
解を得なかつた。道路と云へば泥濘の深いもの、
汚穢のもの。道路は塵物の棄場所、旅行服装
しても許さるゝ所だと考へたのは江戸時代は勿論
明治になつても其以後までも斯く考へ、因習の久
しく道路と云へば、屋内の廊下でも、物を棄て、

も差支ないやうに思ふを外国の施設に傚して廊下にかわを棄て・エクゾジック珍謎もある。道路は交通の大機関で、廣く且つ平坦なることを得ぬ各種の車を馳せるが為平滑で無いといかぬ。雨雪があつても直ちに取除いて工風が無くてはいかぬ。清潔で衛生的で無くてはならぬ、これが道路なくとも都会地の道路の真解であつても、木道石道アスファルト道さましあんと、全く昔しの面目を一新して、アスファルト道は鏡の如く一塵も留めないやうに清潔とされた。交通数理のため種々の工風があつて、横断人道を標示するなどは道路に真鍮の鋲釘を打つたり、安全地帯を設けたり、小公園を添へたり、街樹を植ゑたり、

橋梁を改良したりして、道路は最も芸術品となつて来た。之を泥濘深く足駄でなければ歩かれなかつた時に比較すると、寧ろ大革命で吾等は今昔の感に堪へざることがある。

○日本は環海の国で地形が細長いから大抵の所が海に近かい、そして国中到る所に大小の河川が甚だ多いので、海魚と川魚とが自然常食となつてゐる。魚族は豊富である上に其味は世界一で、これが天恵として世界に誇り得ることであるが、どこの国でも魚類はあるが日本の如くうまくない。別して河魚などは食はれたものでないのである。西洋かぶれの人は、邦人が魚を生で食ふのを野蛮だなどといふが、生で食はれるものでこそ

こゝのよい味のあるものを添へて煮たり焼いたりする
それ及びぬた若しくは刺身やあらひや生きづくりなど
云ふものは日本の特色で魚がうまく無くては出来ない
料理である。勿論日本にも魚類を勤しむ種々の割
烹の法もあるが、概ね原形を存して軽く味を
つける、兎角材料の持味を保たんとするからだ、西
洋でも支那でも、魚の料理は獣肉のそれ程多く喜
ばれず、メチャメチャに煮たりこねたりして食用とするに足らぬ、畢
竟まづいからである。世界の人は実は魚に親しみ
がうすく愛着もうすく、又其味もまづいのだから畫家
までも魚類を其の素材に求めることが稀れである。
只だ静物として描くことはあるが其の外部の動作
などを描くことは殆んどない。之れに反して日本の画家が
多く画材を魚に求めるのは、愛着と親しみがあるから
であつて、日本のやうに自然を素直に味ふものは魚に執
着があるのは偶然でない。見ても楽しみ味つても又楽しい、
それは外国人の知らざる楽である。外人は容易に我
魚類の味を解しないから、之れを日本の天恵だと
理解する日はまだ遠いことであらう。
○支那の四庫全書を全部集めた所を見たいとの念
を起して前年北京に遊んだ時、甚だしく面倒をして
或る官府に四庫かんであつたのを見ても貰つたことが
あつたが、宮殿が莫迦に大きい為めであつたか、其の
積み重ねられた画は幾列もならんで天井にも届かんとする

それと高く積み上げてあつたが、右のみ大量とも思はなかつた。全体函数は六千七百五十二、冊数にして三万六千冊と云はれてゐる。一部の書物としては大変なものに相違ないが、冊数から考へると余り大量とも云へないのである。函と云ふのは十冊づゝ一函に納めてあるのだから、皆同形同じ大きさで左まで大きなものではない。併しこれを普通の倉庫に納めたら定めし壮観であらう。因に四庫全書は経史子集の四数を総称するのであつて、もと七部を作り其内の四部が宮中に納めてあるのだ。北京の文淵閣に一部、熱河の文津閣に一部、奉天の文溯閣に一部、他の三部は南京の文宗閣に一部、鎮江の文匯閣に一部、杭州の文瀾閣に一部置かれてあるのだ。四類の文字が函に刻されてゐるが、それは異つた色で刻字が填められてゐる。則ち経は緑、史は赤、子は青、集は鼠色で色で識別が出来るやうになつてゐる。

○満洲人は何でも裸になつて寝ることを云ふ質問が出た。満洲は寒国であるから人は奇怪に思ふのも無理のないことだ、自分も子供の時矢張りさう習慣で寝てきたが今は其の習慣を失つてゐる。何故かと質問が起きると自分は実の答はし兼ねる。満洲人の説明では裸で寝具にもぐり込む方が却つて暖かいと云ふ。それが果して実際であらうか。満洲では折角着てゐる衣裳を抜き去り、其の衣裳に包つて寝具に入るの

でなることを忘れてはならぬ。緞帳の男女は交接の時
には先ず裸体となる。これは交接の為めと云ふよりも
裸体で寝るから、裸体で交接するのかも知れない。交
接の場合には少なくとも裸体である方がよいかも知れ
ない。緞帳生の職業婦人などは若い年輩にはどう
か知らんが、今でも裸体で客に侍するから客は直ちに
その御開帳を仰ぐと云ふ話である。男子とても同じ理
境を持するものは微妙に直くに覚えるといふが、
何から起つた習慣であらうか、或る人の話しに全裸
で寝ることが好まるも来で、衣類を纏ふては到底
眠られぬとまでいふのもある。一考を要する問題で
ある。

○今は欧羅巴のプレー、グラウンドと親しみある言葉
で呼ばれてゐるあのアルプスは十八世紀頃までは一向賞
玩されず、寧ろ嫌悪されたと云ふを聴くのは案外
である。どこでも詩人は山を愛し其の情懐を詩で
唄ふものであるのに、欧羅巴では詩人までも嫌つて、
寧ろ平原の方が遥かによいと云ふたと聴く
のも奇妙である。偶々戸川秋骨の随筆を見る
に、アルプス文学の第一人者と云はるゝステイヴンの
著書を引き左の如く記してゐる
ステイヴンの著ヨオロツパの遊歩場はアルプス
のことを記したもので、遊歩場とは則ちアルプスの
ことを指したものであるが、この書の劈頭にもある、

舊派新派といふ二章に於て山岳に對する新旧の思想の變遷を記して居る。旧派といふのは十八世紀初頭の思想で、技巧に重きを置いた十八世紀の初めの思想は、山岳を恐怖し若くは敵視した當時の思想がゴシックの建築を醜悪であるとしたと同様に、アルプスをも醜悪であるとしたのを例を挙げて説いて居る。私共はアデスン等がアルプスのローマンテックの光景を嫌つて、平原の風景を好んだことを知つて居るが、當時はアルプスの山嶽に悪龍（ドラゴン）が飛躍して居るやうに考へて居たのである。兎に角十八世紀の前半に於ては、藝術を以つて自然に對抗させ、後者を以て前者を劣れりとなしたまでであつた。中世の僧さんが馬上アルプスの道を行くに、其の自然と親せんとするのを恐れて、目を伏せて行つたと云ふ記事を見ても、中世の思想が自然を悪魔視したことを察し得るが、十八世紀初頭の考も、先づそんなものであつたらしい。

ステーヴン氏に依ると、新旧の思想の境は、シヤートオブリヤンに在るとして居る。シヤートオブリヤンは素より旧派で、アルプスを敵視して居たが、其れは一方はアルプスの崇拝者が新人であるが故で殊更敵視すべき言句を強調したのであるといふ。新人とは誰かといふに、其れは則ち、すべてのものに

事は珍らしさを入れれば、ジャン、ジャック、ルッソオその
人である。ルッソーが革新者であつて、而もアルプスの
崇拝者であつたが故に、シャトオブリヤンは特に
アルプスを悪魔視したのであるといふ。ルッソオは革
新者、或は革命家であつて唯物論者であつた
が、同時にアルプスの渇仰者で、而も新派第一の
人であつたといふ。新思想をアルプスの山岳崇拝との
関係も面白いが、山岳崇拝といふ事がルッソオ
を第一として新人に依つて感得されたのも
面白い事ではあるまいか。この新人の山岳崇拝
が其結果する所今日の山岳征服となつたのであ
るから、これは更に一層と興味ある事である。

それではいつ頃から、アルプスが人々の憧憬の的となつたかの
といふと、それはスティーヴン氏の言によればアルプス参詣
といふものは一八六〇年から数へて約百年前位のことである。
その時分からやうやく、アルプスがヨオロッパのプ
レー、グラウンドとなつて、旅客がそこに集まり始
めたのであるといふ。そして其の年は七年戦争の
翌年である。それより先き一七四一年には、既にイギリ
スの旅行家が登山してゐるが、この一七六〇年にはゼネ
ヴァの学者ソオシュールといふ人が初めてシャム
ニーに行つたのを始めとして、この山岳の門戸を開いたのであ
るとする。其の翌年、ソオシュールが、モン・ブランの征

偉くの通路者又は對して賞を懸けたのと、其の成就するまでの二十五年間が、又於人未集の第一期と云はれてゐるのださうである。

自分の樂[illegible]るのは[illegible]

進化の絶大の此等山岳自ら對しいろくの時代のいろくの民族がいろくの觀念を思つたことは言ふまでもない。人間の力を全く超脱してどうすることも出来ない山岳に對し畏怖の念があつたことは想像に難くない。其の中にどんな神秘が潜めてあるか、西欧人が悪魔の潜伏所と考へたのも不思議はないが、斯く考へた結果として之れを嫌ひ之れを悪んだと云ふのは吾等の賞する樂みとする所で、東洋に於ては山岳に對し情思の觀念は無いつたやうに思ふ。支那の泰山などには歴代の天子は必ず一たびは登攀して禮拜を遂げねばならなかつた。泰山を人格化して封禅を行ひ、泰山も人事に於て山と山とが結婚し或る子が生れたりするやうに信じられていろくの典禮が行はれた。斯くまでに山岳に宗教を揮ふた所は他にあるまい。日本に於ても山岳を早くから宗教し、其の険難崎嶇の道を拓いて祠殿を営み、之を拝する為めに登山したのであるが、山其自体をも神として拝んだ。日本は早くから山岳に親しむ慣習があり何百千何萬の日本神社中にも山があつて一般民衆に山岳趣味のあるのは、西洋に優つてゐるやうである。どこでも不可思議のことあれば宗教がつき纏ふが、日本では佛教が

山岳に絡みつき、これが為めに崎嶇の難道が絶巓
まで拓けた。ある宗派の僧は此の難業に耐ゆることを
心膽を錬るの修業とした。神秘の境にあること
無いことを示して法を説くの方便としたこともあるが、
斷慾の場として清淨の境として僧徒が山岳に居
住したことも、經濟上將た交通
上の功績は勿論僧侶に帰せざるを得ない。日本
人は由來自然を喜ぶ性があり、富嶽の美は古るく
から誰れも觀賞されたが、山岳趣味をいやが上に
鼓吹したのは僧侶であることを忘れてはならぬ。
剛健の氣風が養はれて今の所謂山岳の征服
が試みられたのも亦僧侶の提撕に依るのである。あ

らゆる詩人が早くから山岳を記載することも西洋とは
全く異つてゐる。山岳と人間の交渉史は日本に於ても
頗る早くから創まつて居る。近世に至りて盛んに征
服などを云ふて騒ぐのは吾等から見れば頗る遅蒔
のやうに感ぜらるゝ。

六月五日記

尚ほ附記を要するは日本の神社は多く平地に設け
られてゐるが、寺院は高燥にせよ低濕にせよ皆高
山に置かれてある。これは確かに神道家の無氣力
を現すものであつて、剛健敢爲の氣象は寧ろ
深く佛徒に敵しない。神社の大概は山林麓に立つて
奥の院は山頂にあるのが多いが、是れは神道家
のつくつたのであらう、修驗者が兩部を主張した

関係から、神道と妥協して佛教を擴める手段として神社を抱き込んだのであるから、氣力を論ずると何んと云ふても浮屠氏〔抹消〕が優勢である。

○ことしのやうな旱天つゞきで困りぬいた数月、潤雨がなく、池は全く底をあらはしてゐる、是が為め損害も少なくない。池魚は皆な死して仕舞つたらしい。夏時池面に美観を呈した睡蓮も河骨も皆枯死した。亦[illegible]梅雨期に入らんとするも更らに雨の来らん氣配もない。唯此旱魃を免かれんとするのは自分の酒腸でこんなに注ぐあれば欠乏を告げぬのはせめてもの事だ。何れ旱魃の反動で暑の雨で仕末に困るであらう。暑雨が来るであらうか、酒腸ばかりは旱魃がないから反動もない筈、暑飲は尤も慎しまねばならぬ。

六万五千圓の粽を作る新潟

本縣に於いては端午の節句は團子の節句ともいふ位で殊に新潟市では笹團子と粽とは質置いても子供の爲めや遠い親族知己に送るといふ習慣になつて居るが新潟會議所の村上庶務課長の話によれば

今年も不景氣の中に案外減つて居ない様だ、勞働者は景氣の頃は商賣人に注文して作らしたが此頃は自分で造る樣になつた、鐵道や郵便で送り出すのもなかなか大したものでそれこれを斟酌して新潟市の二萬五千三百五十五戸の一戸當を團子を一升三合粽一升として笹團子に消費する米五百八十二石一升六合五勺出來上りの數は一升につき五十五と計算して三百二十萬七千四百七ケ、粽は二百五十三石五斗升出來上り粽百一萬四千二百ケで此費用を計算して見ると合計六万四千九百八十七圓三十五錢一戸當りが二圓五十六錢一人當りは四十六錢となつて居る此内譯を示せば

	石	圓
米（糯米を含む）	八〇六、七一五	二〇、五九八、四三
換賃		二、二三三、六六
笹又七島		六、四二七、四九
草		一、一六六、三三
小豆	四〇八、三一五	九、七九七、一六
これに用する砂糖	一六、三三八〃六〇	一九、五九四、三三
キナコ	五〇石七〇	一、二六七、七五
同砂糖	三、一六九〃六二〇	三、八〇三、二四

尚粽のキナコは粽一升につき二合はいるといふから砂糖代を加へると粽に用ふるキナコ丈でも五千圓以上になる譯だと而して一人當り團子と粽を合せて七合と見て全縣二百萬とすれば一萬四千石二十圓と見て米だけで二十八萬圓といふ巨額に上ると

○此頃は田里から志きりに粽を贈り来る、偶に田里の新[illegible]を見るゝ、粽を貰ふ[illegible]慣習が生きてゐることは[illegible]今日尚ほ依然として持續されてあるを見る。

○香ハ遠くして益々清しと云ふが、いくら名香でも鼻先
きでブスブス燻るのを嗅ぐと快感を覚へるもの。鐘の
聲なりとも近くでガンガンと耳をつんざく様では忌なもの
だが、遠くで聞く夜のは趣がある。ことに雨を度つ
て来る鐘聲などは風韻がある。鶏犬の聲なりとも
近くで聞くと騒々しいが、遠くで聞くと自然の趣
がある。あまり多くの場合に隔つ霧の間では風致が多
い。障子を隔てゝ階下の聲を聞き情を動かさ
るゝものは果してあやまれば溺れると云ふが、目のあた
り見るよりは愛らしい人を想はせます。露骨のことは撤
して饒舌が多い。いくら快感を覚へることのでも露
骨のものは失刹那に興を感ずると同時に

渋へ出ちるのが常である。茶人は湯加減を診察す
るに苦心する、酒客は酒の燗をやかましい。熱度が高
いからと云ふて良いでよいのではない。茶も適し酒に
適する熱度に「程」がある。或る茶人は啐啄と名を
呼んだ。啐啄は卵の中の雛が發育して自から
卵を破ることを云ふので、丈の機が熟したことを
湯候に譬へたのである。此般の加減程合は微妙
に属する。燈火なども行燈、燭燈、ランプ、瓦斯燈
の種過があつて、今の電氣照明の時代に達してゐるが
電氣燭光は如實に不愉快を現出するものである
○けれども、コレとても明るいばかりがよいとも云へぬ。
陰うれ光度が強いと目を害する惧がある

のみか、脳すら刺激を與へて、人が落つかない。人を落つかせる照明は暗の中を取つた方が無論よからう。昨今照明の術も漸や進んで、照明を加減する工夫が出来、その結果室がいろいろとあるが、人を落つかせるやうな照明は、その暗いのがよろしいのだ。寝室の照明は勿論の事だが、談話室なども餘りステラく照明されるのはシンミリ談話が出来ない。家を拵へるよりも道具の數が無い方がよいから、随つて其の設備がさまざま工夫されてゐる。暖爐の火氣も亦同じことであつて、あんまり暖いのが最上であるが、其の加減が頗るむつかしく。大達一架(?)めてある暖房の如きは皆な濁り重苦しい熱(?)するので、不

愉快であるのみならず、室外へ出て、外氣に觸(?)すると温度の不平均から風邪を罹ることが往々あるので、自分などは寒中暖房のある家へはなるべく(?)て其(?)行かぬことにしてゐる。よく工夫された暖爐はどんなものかと云ふと、窓内(?)に其の設備が隠されてあつて、どことなく暖氣がフワリと通ずるのである（上乗れの志かし(?)）。これを普通(?)の家で無いと出来ないことで、照明に比すれば暖房は(?)解釋の域にあると云ふ(?)は猶ほ得心ならぬ。

の先頃九州電氣鐵道會社から人を寄越して画集に全部著作(?)山陽から多くの記事を捨(?)られうるとの事で、一年間の謝金を前年中に置

と云つたら、どんな画集が出るのかと九州電鐵から九州
の風景を描いた頼み立派でも撰つたらうと、そんな
記事は多く無い筈だと思つてゐたら、今日同会
社から巨冊の画集を寄せて来たので之を開い
て見ると、九州電鐵の元重役杉本渡軒翁が所
蔵の都合で今社に譲つたもの義務を今般売立
附することとなつたと、現社長太田黒重五郎の
序言があり、日本画売立目録に依れば約
ぬとあつて、玩賞の出来るやう特別に心つかひとある
が、出る会の入つた画集で、書画に就ての委しい
解説が添へてある。之のコレクシヨンは可なり頼
山陽に偏して其の数は如何にも多く、名品も少から

ずあつて、其の解説もなか／＼よく、余の随筆山陽か
ら記事を抜出してあるのがあり、初めて同社が謝金を
寄せた訳が理解せられた。此の売立は本月二十三日よ
り二十五日の下見で大阪市淡路町大阪美術倶
楽部で行ふ由である。近来稀れの大売立で
ある。

六月十三日記

○先般文化協会で大阪の無尽協会の殿の
伴淡社長が本を会して庶民金融と就き、其
く意見を述べ、其の筆記が印刷されて、巻頭
に余の聞く今の話としての自説を聊か述べ、其の
切抜の本巻の末に収めて置いたが、自分は久しく
日本の習慣となつて居る無尽講頼母子講が

最後に營業無盡の特徴に就いて若干申上げますが、屢〻申し上げました様に無盡は庶民金融機關として多くの特性を有して居ります、その最も著しい點を是れから申上げて見たいと存じます。

先づ第一にその制度が古來から庶民の間に行はれた金融制度なるため、よく國民になじめると共に、よく諒解され易い事であります。

第二には極めて民衆的な金融機關である事であります。即ち一度無盡に加入してその會員となつた以上、必ず資金の融通を受け得る可能性を有し、しかも其れが無盡に於いては會員の權利となり、他の金融機關に於ける借金と異にして何等不名譽を感ずる事なく、寧ろ借りる事が一つの權利となる點であります。

第三には庶民金融機關としての必須條件である所の、即ち金融が長期である事であります。從つて第四としてその返濟方法が長期間に於ける月賦濟し崩しなること、同時に第五として長期濟し崩しなる故、その金利が非常に安い事であります。元來無盡には所謂利息なるものがありません。會社は會員相互間の有無相通ずる事に依つて一定の手數料を取つて居るのでありますが、それが長期間なる故非常に安くなるのであります。

第六には貸付卽ち給付には多く無擔保の信用給付が行はれる事であります。

第七には無盡會社は法律上、その營業區域が限定されてありますから、自然地方的金融機關となつてその地方で集めた金は直ちにその地方民に融資して、資金が他に集中するといふ事が起りません。

第八には無盡の構成上から他の金融機關の如く取り付け騷ぎなど〻いふ事が起らないのであります。

以上の諸點は無盡の本質より來たる特長であると共に、又庶民金融機關として勝れたる所以であると信じます。

庶民金融に就て述べてあると思ふ。最近四五十年金融機関も大いに發展し、なかなか思ひもよらぬ程の金融は富者にこそ及びたれ、貧者には及んでゐない。元來金を借りる事となると、其の人に信が必要で、やれ擔保が要る、やれ保證人が要るとかつて、事實の担保となつてゐる。貧者の金融ほど無擔保無保證人で而も長期で利子の低くてはならぬ。然し居ることの無盡[illegible]ある。而して無盡協會の嚴間関経雄が無盡の特徴を列舉したものをここに収めておく

榛原製

○茅ヶ崎の原善三郎の別荘に招ばれたのは二三日前
の事である。原は早大商科の首席で卒業し、沼田
紳士の長女を妻としてゐる。実業界の成功者であ
る。三千坪許の松林を背景として洋館が建築さ
れ、主人は和風西洋趣味があるので、建築もおもしろく
出来てゐる。庭園は日本式の作で、巨石が風致を
なし池には清水が湛へてある。此處は私と欠点を
感ずる所だが三十尺を掘つて潤澤の金を
得たと云ふがこんな此の別荘のそれぞれ何おりこ仕
合であるのだ。いろいろ書画をを見た中に作
實の三十六歌仙の内の壬生忠岑の切が甚だ
よろこんでゐた。これは佐竹家の重寶であつたの

が往年華族の間に愛されたことは言ふまでもない。
壬生切のかねてより原に帰した。其の来由を原自
らが語つたの、自分は買ふべく決心したが、これを表装
するに適当の裂を得るまでは、確かな品を極めるを七年
かかつた。其間楮紙を経て雪舟の横幅が出たのを見たにハ
メレバ才人が下司よりのだ八千円を投じて此幅
を購ひ、雪舟を売り放ち、遂に其ハメニノから友
に買ふ同伯来が碌と成立したと云ふてゐた。其の幅
を表装されたのを見ると、ぬるさまを立派な時代ある
緞子で紫印金のが上下にあるので、此八年に
似げなく高い趣味があり、表装切を得るに八千
円を投じ雪舟の画を犠牲にしたも惜まない

といふ物する大膽さがあると感じた。
○早大の五十年紀念に学報は学苑物故諸家録を
掲載し始めたのは昨年の秋で、九ヶ月連続し、八十餘
家を採した。まづ採すべき物故者は少なくなったが
近頃殁した人などは自分に交りも少なく、却って自分らよ
く其人の閲歴や逸事を知って居る同窓や同僚
がいくらもあるから。是等の人に譲ることにした。こゝ
まで九回目で筆を擱くことにした。矢張り同じ選びに
いろいろの人の援助を求め百五十人位は網羅すべし
と学報の擔任者に相談に及んだ。自分の採した人
々は兼早今の人が全然知らないものが少なくないか
ら、自分の役目は済んだやうなものだ。九ヶ月の連載は
可なり骨が折れ、漸やく肩頭の荷を卸した気味
がする
六月十四日記
○今日の散策中に文行堂に立寄り二三の書を購ふ
芸者懐中節用集　一冊
これ芸者二年書林誌とある書林本
に惜らくは上巻を缺く。古来此書
は活字なるか否やに疑ありし先輩
多く鑑して活字本となすとするも
予も同論也。近此某書店の目録に
於き代價を換算するに五円四十銭とあ
り、而して活字本となす。其價の高
きは活字本と鑑したるが故か。余は平

榛原製

五円を投じて零本を得、蓋し標本[illegible]
となさんとする耳

一 在邦朝鮮鐘 写本一冊
古き朝鮮より来りたる鐘十ヶ所
此写本の記する所を全載するもの三十ヶ所
ありて、其内四寶と云ふべきもの二十
四を数ふ、年表に就て案ずるに[illegible]
古きは天寶四年（我天平十七年）太
和七年（天長十年）天復四年（延喜四年）
顕徳三年（天暦十年）等あり、多くは
寺社に存するもの、華族の家に存する
もの七若干あり、朝鮮文禄の役

榛原製

に戦利品として持来りたるもの我国にこの
あり、特に在邦朝鮮伝来の鐘を
調べたるものにて他に無れば極めて金石
部門に置くべきものなり、

一 頼山陽西遊詩 巨冊一
これは以後十八年東陽堂が写真石版
に附したるもの也、今頗る稀なるもの也、巻首
に三條公の題字あり、巻尾に重野博士
并に頼支峰の長跋あり、原本は河南
氏所蔵なるも山陽九州にありての日録
の類に擬す長短五十数首の詩を
大小さまざまに書して河南に遣つたる

ことに京ハ詩ハ概ね初稿より詩鈔迄
稿の詩とハ移しく相違あり、山陽が
如何に推敲時没頭家なりしことを
証するの唯一の好材料也、成稿にも
なき詩の経路を知るも好資料となる
東吾支峰等共に之れを云ふ。

一

他に一通の文書を接ふ
それは安永七年七月とある黄檗山宝
蔵院一切経印房より石州西楽寺
に与へたる一切経の請取書也其文左の
如し

槧

榛原製

一 蔵経七百拾巻弐拾六函
　代銀六百七十六匁二分五厘
　拾五匁　箱料代
　拾匁　同飛脚代
　六匁　箱持大坂迄運賃
合銀七百七匁二分五厘
右請銀即時収領仍証焉
　安永七年戊戌七月二十日
　　黄檗山宝蔵院
　　　一切経印房 [印]
　石州
　　西楽寺　収
右御注文蔵経大坂江の手形通渡屋長太夫方迄

見卿より今晩差出し下さい此上
七月三日　一切経印房
西楽寺
此文書は板本一冊添あり
全蔵漸請一字千巻千字文朱點
と白表書あり
当時の印刷費を知るの一資料ともな
るべし
六月十四日記
○早大の事務所は之まで恩賜館にあつたが実は
従つてそんなを事務所を兼ねての不便もあり又狭

隘であつたが今度始めて事務所の建築が出来
た。総坪数千六百で二層のコンクリート白塗りで、上
階二層には講堂があり、大なる講堂は四百人を容
るに足る。ある前田中総長の室内で一説を
経ぬが総長室記事室会計室各課事務室
共にゆつたりと出来た。第一光線がよく取れて
会室共に明るく、装飾の工風が斬新で、殊に多
くの費用をかけず、築の利いた美観を呈してゐ
るのは全く技師の働きである。坪百十四円位すると
言ふてゐへと云へるが、経済的によく出来た。文科の
講堂が出来て間もなく、此の大建築を見るすると
つれのは三日刮目の感がある。同事務も進と狭隘

を告けるのが、書庫と研究室とを併せ収容する坪の増設を現在の建築の上に架する趣向で、図を示されたが、此の増築を待て同窓館も完成となる譯である。自分は此れ登校することが少ないが、事務所の増設のみか、今武道館の建築と取りかかつてゐるのを一覧した。これは運動部の為めの建築で、コンクリート三層で、第一階が柔道二階が撃剣三階が弓道で、各階二百畳の広さである。家の中で弓をひく事の出来るとは珍天然の設備と云ひ得るであらう。夜間に野球戦を行ふ為め大燭光を備くる計画も成つてこれも着々運びつゝあり、又テレヴヰジョンの研究室とを新たに増設するのであるが、これも初めて見る所であつた。僅かに七八ヶ月登校を廃してゐると、以上の如き発展を見る、此等も早大の盛運である。

六月十五日記

○家の散策中、関雪江の反故一束を獲られ、中に二三役立つものもある。明治六年二月の日付ある東京府庁へ出した家塾開業の願書がある三通ある内一通に新しく通達を備へると府庁の達しがある。当校の位置は下谷仲御徒町四丁目廿五番地即ち本人の自宅、本人の履歴は天保五年正月生れ祖父関忠蔵并父金蔵に学び、同八年十一月より元今は小浜加賀屋弘毅に従学、弘化三年迄十三ヶ年間

叢邉修業と有り 此の校も叢書邉を予くとやる 岩根
と見くなる。一通の短書ハ雪江養母千代の署名也
女子ニ教ゆるは婦人教訓を要しなるか。雪江ハ当時
文部権中録たりしことも一通の短書の序書を見へ
たり。尚は其書一通あり 雪江の祖父忠苑か行書
数篇を淵校の為献上に及ひたることの宜告
たり其文如左

関忠苑

其許多年致丹精今般盈餘為し折と
数篇献上仕候 殊勝之趣と付
書物其御用ニ備
褒賞として目録被下置事

六ッ目

とあり。行書数篇を献したることも此等書に依つて知め
もおり得たる。尚雪江の詩稿一冊あり 三橋一絶と
署す。交々雌黄加へあれとも叢書とも知り難し。此外
雪江が殿下を書したるものを貼りつけたる一冊あり。
文部省宛の届書短書数の反故川の裏白を
用ひて貼りつけあり。其の反故中ニ濱ヶ崎新
文部省十一等出仕被命 右ハ寄宿所四月の出仕
を免せられたるニ依り向ふの出立帰国成候
の旅費頂り度しとの短書あり 壬申十月とありて
濱ヶ崎の印あり 墨書あり 東京ヶる廿三日と記し
あるハ殊也。尚は殿下の指の内より鶴卵 三金包、乾

決若、牛肉開業ニ便宜のペーパや引札などある中ニ
鶴山春の著はし比英和對話ハ柳山和尚校閲と
あつて鵜山氏花明であることなどが珠である。他ハ手
柄やうの雑書也
○今和ニ有堂の前原精輔国語字典（辞）の稿本を数く来
小清印刷会社ニ印刷を請ひけしところ（ママ）一冊を展
べて見るニ無紙辞彼を変ヘ青きして貼付しある等
まりいをの未歴を閲するニ幕末的倫館ニ於て編纂
しはこのものる五十冊あり、品川彌次郎生前ニ之
を家宝ニ与で、他年之れを刊行して我が子が基
前ニ供せよと、今その遺命を全ふせんとすることを云ふ
約五千頁の辞書。すなはち誤多し。此辞典の編纂

果して時ニなる遇へき果やまれ検すべき遺あるまじ（六
月十七日記）
○今ぞ東京美術俱楽部ニ於て某氏の雪舟蔵品が
近く大阪ニ於て売立ニ附すべき書画葉ニ其の目
の陳列を見る。これを選新展の展品ニして其の目
録の説ニ逸品を經ているなり。此列品中蕪村鑑
の幅の如き古画の逸品ならざるも、多くハ山陽竹田蕪
ニ其時代のもの多く、扨而四條家もあり、華山木米
ぞもあつて、山陽の逸品も多けれども竹田の精画ハ
十数點の多きにて及び東京ニ於て容易ニ得ざる
もの、みなり、竹田研究ニハ得がたき好機と特ニ時写
を寄して熟覧し、ゆるゆる例の復痕一葉帖もあり華山

の手山蔦なども有り木米の落道の晴墨もあり、一畳一帯
目程なのものザラにあり、○道具を掲げる図譜と定
まりたる仁清の壺を始め稀なる物品多く、中にても
竹田の遺印金剛の陣列しあるを見たり、これらの
眼福を得たるは既往に全く無きことなり、秋まで有り
又もなく第二回の展覧を本年としたるが、今次の出品のみ
ならず五代までは三るまで番田に上るなるべしと云ふもの多
り真と其前の展覧会と云ふて一寸也　六月十七

○山陽の偽物揃ふ、陰氏書簡一巻を見たるまで
この人ありて、取りあへず文をあまた写しておく

六月廿日

今日もまた今に出し、十八の夜
吃々赤き顔と酒を飲とする
明日も送るの情に

四日三夜大風甚雨屋尾皆飛、茂生昆陽
三韓時は不遇之と夜く僕僚居上漏下
漏琴無皆失住跡、庭独泣染国中樹木
皆倒化似、桑生心離倒耳
桑生恐者其離来柱蔓争高飛
翠堆叶庭被風吹倒了、扇に向心皆
墓一幸

大阪の畑田ぬし中見舞の書
先使静扇物編として来し甚暑見舞ニ一四

二分とし換へる大坂も左様にぞ何本か知るべく
下されたし
○紙屋にて家業として居ります酒小樽何本か
紙くずを換へて来たと御座候
、煩はし候へ至急御取り寄せ下され度 玉緑實
入用なく要とおもきを覚し是も常飲し酒
也
右二件早々御答待存じ候 口復煩人へ通じ
時節柄御自愛専一
八月九日 襄
世張梁契

○案山子に趣味を感じても案山子の輪郭を描き得られ
り殻紙に案山子の西國を書いたり、特図達から
三枚案山子を図にして貰つたりして、狂言の素堂
人を訪んだり、津坂東陽の擬山子改の寄書を詩
にしたが、瓜堂人の狂言を聞きもしなかつたといふ
ひ、和田萬吉と喧しれ、和田を謡曲の趣味が分あ
つて観世流をお習ひに習ひもする、画もお習ひにならんかつた
るのが、親友の間柄でもあるから、遠近の画と共に
家の為もよいと思つて、伝記して状況を作
出来るのを喜んで待つてゐる。
○自分が随筆、杉山陽を前年若いうちに先生何分
が十年時代から知つてゐる手柄は細大ともに網羅

しかし其後も山陽の逸事や傳の補遺となるべきもの
は書き留めて繪入しておいたが少なからずあ
る。近年泡叢の刊行を見るに至つてから、雑録への
み書き留めてある山陽関係の材料を悉く纏めて
今が春秋会から出さんとする事の泡叢中に収め
てはと気がつき。就て其の項目を調べて見ると材
料とするに足らないものもあるけれども、すべてをたま
列挙する

一 竹田百詩鈔評

○これは山陽が竹田の詩集及び山陽の紀事
であるがけは詩評より自家の私事にも
然るも言及し、さえ又他の山陽の書

好奇心をそゝることが多い

一 俳句集序

書名は一寸思ひ出せんが俳句集に山陽の
漢文序は頗る珍らしい、例と依り奇抜
なことを言ひ俳諧を罵倒してゐる（逸）
文として見入るべきものである

一 檀山人石譜序

小石檀山の石譜の序への文鈔にある
が本書のは讀んでも見ないが、流石に名文
であるから文鈔に漏れたと斯れないとも見る
べきか

一 栗山に与ふる漢文尺牘

山陽の青年時代栗山は逸々應酬して其名を許ふたことがある、山陽は栗山の其の死後一書を裁して謝したのが此の漢文讀むべく大いに敬意を表してある、稚氣は免かれないが、少年の山陽を見る一材料とするに足る

一 篠崎小竹宛書簡
これは徹頭徹尾酒の事に關する消息で山陽の酒史を編するには唯一の材料也、吾等のしらざることがいろ／＼ある中に翁と云ふ酒の伊丹物であること近衛家が酒を賞せられたことなど皆面白いである

一 韻府宛漢文短簡
短文ながら終始才氣を見る、小品文の上乗也

一 平曲宇治川合戰
ある人の嘱に應じ平曲を平仮名交りで書きたる一巻今大倉男の手に在り其の跋文收むへし

一 山陽と良寛
山陽と良寛とを比較するは不倫の如くであるもおのづから其間一脈相通ずるものあり、市田代亮介の為めに其の相似たる所を摘録條書き與へてある

ことあり

一 山陽西遊詩帖
内海十八年東陽堂の宮本八石両氏の附
しなるものにて今此帖を知るものなし
重野成斎の長跋山陽の為めに備ふべ
し

一 篭齢新山陽帖
篭齢ハ月琴を弾ずるの人山陽の書き
損じたるものを集め刻して一帖となす此
帖多く人の知らざるものにて中に採る
べきもの二三あり

一 山陽が書しゝ竹田の俚謡
これハ扇面にして裏に竹田の罌粟図
の俚謡を書す漢文の跋語あり曾
つて田中青山翁の所蔵なりしもの今余の
手に帰す

一 十二月帖
山陽四国に於いて日人の需めに応し作
れる東屋の十二月の季節文を書きしを
石刻本なり今之れを知るものなし其の
存在と題跋を録すべし

一 当時既に此の刊行されし双軒庵集図の内
から取るべきもの若干あり。自分の夢と
帰したる春水が東山を大坂の傍らに近へし

對句の律詩が多い、此詩も集中にないから、序
で採録すべきだし、頼三樹の手稿が花弁
中にあるのも拙劣ところであらう。又山陽
の面目に自分が辯護した筆跡も或は後
立つであらう。

二月廿一日記

○此頃購ひ得た俳諧書二冊 美佐吉と署題あり
文政八年の出版で、作家の兼題 其像に刻して
るが其書の特色であるが、さて何故署名を残さず
と名つけたのかと、雪丸軒 茶静が書きとる
序文を見るに及んで、美佐吉の題名の故よしが読
めた。而かも題名の思ひつきが如何にもおもしろい、今

左に序の全文を掲げおく

今年の夏のころほひ、伊豆の熱海に浴せむと
枕ひきけるまゝ、玉くしげ箱根路を旅行
ば村山の梢の花ならぬ花筏里沖のを眺れ
波のよる見えて、旅の心も打ひそまん折
から、白き鳥のいくつもなく高く飛びは
ひ、ちりおろく荒波のかしらをつゝきては
又のぼる、何の心ありてかくするやと詠め居
たるに、汐木拾ふ地の者もいかんおもふ人ぞ
鷗の鳥の名とさか 珍らしきか、あれはあめこ
とくまるか常ならぬことのあるといふなり、えしめて

こころつきなさてハ美さこの鷹すや、さらハかれ
かつけ学鮓とよぶよくらひしるやあるとい
ひまれハ、いかなるあの魚ハ今のやうにしもあ
らざる道をつらみらい、まれ異のえさまざま藻
谷のたれ流しおくをおさめてハ浦人のと
出てむてたやすきり、されとうの鳥ハさんともいへ
らぞ日くま魚をとるもの、なくえふれども、人は
のみとめておのれハ其味をしらぬ也亭主呼ら
ひしかやくれ人のなくみの及ふべくもあらず
まくれを覚しると会ふつけをつらくおも
ひもくるま身らくすく比まで好む書一とな
く秋ともてきて、空れかけり地もとくし己、佩句

榛原製

をまうけおく、えぬひとも自らくさるな其味を
しらず、なまく彼浦人の鮓見出しなこ
とくこ三の居士ハ拾ひえしをかくらし甘し
とさハまえなんハいよく酢しも昔しと
諸名家の風味ハまうつゆも諷詞をもひ
其心を得るにまかせて吟ハ、我と味ひおは
ゆるよしもあらんと一ツの業ハなくもへ
しを風雅のもてあそびに口切待るも何ぞ
二笑盃のさこう吟をも見えしめくめし
雪永軒　蒸静
目分も何かの句を喩とミさむ」を仕つて
見むやと思ひてここに蒸静の文をあるしおく

○京都便利堂から複製本法華経単字一冊（京
都来、此書粘葉三十五葉の副録とじにて其
尾に保延二年三月源実俊圖とあり、年代と識
者の名まであり、保延と云へば今から八百年前の筆蹟
に属す、崇徳天皇の御宇なり。筆者も尊卑分脈
に名の出ある人にて、右馬権頭春宮亮従四位下
敦光朝臣の嫡孫に当る人なり。此者は誰人の著を
写したるや分明せざれども、筆者は著者にあらざるこ
との明かなり、一切経音義をとり共に四種字上巻
者とさるべきものなり。本書の巻首には吉田神社の
司中臣隆路朝臣の蔵書印を捺す、原本の紀
紙には錦所秘本とあり、山田以文が一旦所持せし

こと知る。今は京都市中京区姉小路通大宮西
入矢野長治郎の手に蔵されてゐる。
○本書に於ける此法華経の注家珍蔵の善本は書陵部本の外
の渋紙で賑はれてゐる。上方山勤の善本は四月中
大阪府立図書館創立三十周年紀念として
陳列されたが、其の書風の見えたが、実物を見ても
居らぬが、京都には名刹が多いから貴重善本を
蔵して居る。○又提要かいは、外典よりのものの法家
の珍蔵にあるものに善本が少からずある。偶々
便利堂が近藤氏在の善本目録を寄せて来たの
を見ると、年代の注記はないが、近藤の善本の
見出を知ることが出来る。法華の多くは皆知人で

ある日今左の参考目録を眺めて居ると
口天空方壺の巨幅を齎し来るものあり、相屋に
掛けて見られ、岸壁に五彩の菊を描ける粉を
極め、一枚ものに無くて白菊(殊に)大きく、落ちたる
り翡翠の落くに飛ぶ。予方壺の小畫を多く
見たが未だ此の如き花を見ず、方壺画一時大いに鳴る。
我画の文部に游びたるもの多く、粗豪の筆
致を得意とし、方壺の精に似す、方壺の一時
名を轟かしたるも宜なり、此幅菊池惺堂の藏
花とす、一時これ同じ時代の今は八十歳
に達す、殊に惺堂家什と為ん歟
六月二十三日

榛原製

目次

一	大乘法苑林章	法隆寺藏
二	法華攝釋	東大寺圖書館藏
三	往生要集	日下無倫氏藏
四	梵網經	久原文庫藏
五	選擇本願念佛集	法然院藏
六	四分律含注戒本䟽行宗記	東大寺圖書館藏
七	弘法大師上請來經等目錄	高野山親王院藏
八	寒山詩	杉浦丘園氏藏
九	大方廣佛花嚴經隨䟽演義鈔	東大寺圖書館藏
一〇	佛說大乘不思議神通境界經	曾野作太郎氏藏
一一	詩法源流	內藤虎次郎氏藏
一二	禪林類聚	高木義一氏藏
一三	大般若波羅蜜多經	內藤虎次郎氏藏
一四	同	同
一五	大學	懷德堂紀念會藏
一六	大樂金剛不空眞實三摩耶經	水原堯榮氏藏
一七	同	同
一八	韻鏡	吉澤義則氏藏
一九	八十一難經	谷村一太郎氏藏
二〇	尚書	高木義一氏藏
二一	佛日燄慧明極禪師建長禪寺語錄	建仁寺兩足院藏
二二	石門洪覺範天厨禁臠	建仁寺兩足院藏
二三	大宋僧史略	松本文三郎氏藏
二四	雅頌正音	內藤虎次郎氏藏
二五	大原談義聞書抄	龍谷大學圖書館藏
二六	蓮如上人御文章	大谷大學圖書館藏
二七	史記	谷村一太郎氏藏
二八	玉川先生詩集	內藤虎次郎氏藏
二九	歐陽文忠公集	伊藤孝彦氏藏
三〇	備全總効方	武田杏雨書屋藏
三一	雲峯悅禪師語錄	谷村一太郎氏藏
三二	義楚六帖	東福寺藏
三三	同 題箋幷識語 後陽成天皇宸筆	同
三四	經史證類大觀本草	武田杏雨書屋藏
三五	楚辭	長尾雨山氏藏
三六	大統曆	禿氏祐祥氏藏
三七	大般若波羅蜜多經	守屋孝藏氏藏
三八	首楞嚴經	小川睦之輔氏藏

あるが今左の書目録を収めて置く
◎天金方面の巨匠を齎し来るまであらう、相望ま

◎春城から余の随筆を出版せんとする計画があつて自
分も其の執筆を探して、ザット目録を作つて見たが、
まじめな物は一紙も作るのはなかつた。早稲田の文
や本州や其他文芸春秋などから頼まれて書く
があまりに多いので、未だ随筆に着手する●暇
がない。来月になつて休養するならば、着
手しようか、方々から頼まれて書くことも実は随
筆に入れ得べきものがいくらもあるから、力めて右
その需求を入れて執筆しようとする。先づ文芸春
秋に頼まれて、大衆の本質、杉坂何、星雲子、明日
英世の四八指を考へたのがあるのに受けたという

三九	金剛頂一切如來眞攝大乘現證大教王經	高山寺藏
四〇	悉曇字記	吉澤義則氏藏
四一	大唐大慈恩寺三藏法師傳	内藤虎次郎氏藏
四二	大唐西域記	石山寺藏
四三	大唐大慈恩寺三藏法師傳	松本文三郎氏藏
四四	國寶 白氏文集	上野精一氏藏
四五	古今和歌集注	京都帝國大學藏
四六	高野大師御廣傳	東大寺圖書館藏
四七	龜山殿御逆修願文集	東大寺圖書館藏
四八	佛眼品	久原文庫藏
四九	釋氏往來	猪熊信男氏藏
五〇	正徹歌集	守屋孝藏氏藏
五一	東大寺戒壇院公用神名帳	鈴鹿三七氏藏
五二	萬葉和歌集	京都帝國大學藏
五三	文選	上野精一氏藏
五四	大唐西域記	松本文三郎氏藏
五五	今昔物語	鈴鹿三七氏藏
五六	朝野群載	猪熊信男氏藏
五七	一行一筆般若心經・阿彌陀經	一心寺藏
五八	古文孝經	上野精一氏藏
五九	伊勢物語	守屋孝藏氏藏
六〇	月影物語	官幣大社 住吉神社藏
六一	謠本	水落庄兵衞氏藏
六二	配所殘筆 山鹿素行稿本	山鹿誠之助氏藏
六三	文會筆錄 山崎闇齋稿本	出雲路通次郎氏藏
六四	倭字正濫通妨抄 僧契沖稿本	官幣中社 北野神社藏
六五	國寶 三國志	武居巧氏藏
六六	大乘本生心地觀經	石山寺藏
六七	國寶 春秋經傳集解	藤井善助氏藏
六八	國寶 王勃集	上野精一氏藏
六九	國寶 王勃集	富岡益太郎氏藏
七〇	世說新語	小川睦之輔氏藏
七一	不空三藏表制集	石山寺藏
七二	漢楊雄傳	武居巧氏藏
七三	梵網經	高貴寺藏

と実業之日本社から、あんに似た人物評をと頼まれ、群像片影と題し、澁澤男、中野武營、古河市兵衛、安田善次郎、田口卯吉、津田仙、佐久間貞一の七人を僅三日ばかりで書いてやつたが、実は財界の人物には餘り興味をもつて居らず、興味のない人物はどうしても書く氣になるものでないから、もう二人位書いたら切り上げる積りだが、其二人は五代友厚と朝吹英二とである。五代とは一回の面識もないが大隈家に材料があるから書いてくれいと思つてゐる。朝吹とは交りもあるので書きたい氣がする。其人の自傳や經歴を書くのでなく、どこかに讀者を惹きつける筆と材料が無ければならんのだから、誰れを書け

と注文されたが、それは應ぜられぬ、書くまでには餘程思構を立てるに面倒であるのみならず隨筆の材料もあると思つて、つとめて書いてゐる。六月廿三日

○吾等同樣の書法家の雅德の何か寄稿せよといはれることもあるので、さて何を書くべきかやと案じて見ると、最近十四五年來生活されて居るの圖書の内容を見ることが出來るかあるまいけれ

以下
４丁
白紙

榛原製

六月の國醇會例會

市島春城翁の嗤笑秘品展並に解説

珍らしくも春城翁の珍藏品と翁の諧謔交りの解説に、其の丹精と蒐集の豊富さに驚嘆を禁じ得なかった。一夕梅雨しめやかな廿八日妻恋坂の國醇堂倶楽部に開展された。来會者は高村光雲翁を始め笹川臨風、高須梅渓、山本耕花、鹿島龍藏、篠田鑛造、河野桐谷、斎藤昌三、鷲塚清次郎の諸氏。市島翁の蒐味の『イーンチキ』と言はれる物そのものの珍奇と得易からざる物のみに一座感嘆せずには居られなかった。

(一)渡辺華山借主立原杏所証人の百五十両の漢文證の証書、(二)藤田東湖岳父の拾両借入証文(三)關石江殿下の『鳩山和夫校閲鳩山春子著英和對話』ゲラ刷其の他(四)能狂言見立の絵暦(五)珍奇な拓本の數々水産會参考用鰐の拓本水戸烈公筆大砲銘の拓本(六)山中笑翁の洋書表紙の拓本(七)天明八年大火災に飛んで来た小書籍(八)長崎在支那人の小遣帳並に和文翻譯書(九)吉原之浦尾衛門所(派遊)当座日記(十)沼地楼痴代筆の吉原地田はん魯文宛取清文(十一)蜀山人の判取帳の写(十二)福島大將の從卒書林黒猿の大將單騎遠征の満洲原稿(十三)坪内逍遙翁裁判所証人喚問の鑑定書辯書原稿、於ける浜作所にて二帰飲の漫画其他(十四)西南戦争の電報集(十五)寺崎廣業筆の絵手紙(市島翁宛)(十六)尾崎紅葉の手紙並に紅葉級読書袋を用紙の継句(市島翁宛)(十七)永機写の其角十七中の絵(十八)竹田の遺炬燵(十九)本間百星の免状(廿)无敵六花仙秘画(廿一)千葉の諸家往復文書の一巻(廿二)徳川時代各諸藩の慶刑入墨の肉筆絵本、其の他總數三十餘点

終つて宴に移りて市島翁陶然座談の花を咲き高村光雲翁も昔ばな斗酒猶辞せずで岡倉美術校長と立ち飲みに引を取らず、日本橋の老舗木屋の先代が名うての酒豪であったのと紅葉館で飲競べに勝ったと聞き『ソレは頼母しい』と云ふ市島翁『之れが嗤笑品の解説を一杯飲んでからやらせると又別種の説明が出来たもの』と幹事連が皆下戸揃ひだからと云われて斎藤幹事大恐縮、笹川博士山本耕花画伯が展列品を仔細に観賞、九時過ぎ惜しくも解散

昭和八年七月四日

國醇會幹事

明治九年九月六日水曜日
仮名読新聞 第百五十八号（雑報）

○吉原芸妓お半（当時深川住宅勤め）とい
ふ利好者は陰の座敷を勤めるのに妙を得て
手当は娼妓も及はぬ腕前百円以上の月給先生
を看込ンだら髭の中から眼鏡がチヨこボり顕はれ
と兵児さんでも薬鑵天窓の欲張老爺でも呼付
ては離れぬ風情サアと思へば口直しに都下で一ばん
ちう若い芸人や阪東一つ（デモあつが）の女形（秀）れて
艶い（トモカのぬ）俳優を入揚げ客から（取つてつぎ）込
むゆゑ籠釣瓶で水を汲むが如く一文でも溜らぬ懐
嚢悪銭身に附かぬ売れつ穴を又振巡して引手茶
屋の庫へおれがつこ一件が兼て得意の大福長者へ
露顕れると彼の先生大ひに激否ましくして夫から
はお半を呼ばず折節深川の遊興にも彼への面
当に他の芸妓を大勢呼ンで是見よがしの全盛

遊び其上お半の不品行を日々新聞の雑報へ
でも掲載とかいふ風説を聞いてお半も是には
大きに困り如何(どう)がなしてもう一度親しく逢って佳く
胡麻誤し嬶前の勝立を瘉して日外(いつぞや)頼んで置
いた帯代でもせしめてやらうと其謀計を考へる中
以前深い中で居た官員揚りの客人にあふての
加幸ひと途中ながら相談すると夫はかうしする
かといふの教示を聞いて又の笑佐の大福長者どのが

柳橋の船宿に遊ンで居るのを聞くが否哉車で
飛んで鉄面皮で嬶前へ出ると何しに来たといふ顔
で一向に取合はぬを立女はお謝に来たんですと隠し
持ってる剃刀で大象も繋ぐ可き丈なる黒髪を
ブツツリ切て投出しと客十に先非後の気色あるは
れとなば女にのろき長者の性質心底着へると締
気色合思り其夜は其家に泊り山一性戀もなく
いつある夢や結ぶ人と先中直りが相濟むと

御年の達者が此挙に乗じ兼て約束の帯代金
百円をねだり出し別れて帰る其翌日此金を旅
用に彼の茶屋男と手に手をとり何処ともなく
ハテ恐ろしい化猫だネヤアと深川の綺紫屋七女造
どのからを寄文です

福地が芳原の妓おなの為めに書いた正誤三消文
八自分の日和だあすあさって後名伝書文の書いたとし
彩文の泥子へどんなよのかむらぬらくれ際藤
田鐘道から其の写しを寄せて来たからござる
お女も笑ひ又も供する

の此坊間の書肆を漁つて二三の写本を得た、其
中に竹枕為題が天明六年書写并校合の落
款のある古今夷曲集二冊があつた、国為輯ま
森羅亭萬象と云ふ翁の為る狂歌師
であるから、此の写本のあるのは偶然で面白いが
よく綺麗に精写してあるのが嬉しいと思ふて
二十両を投じて購めた。猶ほ支那写本も得たこ
との光緒が九二年ーロシヤと南路今界を定める
支那の官人の紀行で、中俄南立共立碑情二十四
号及指山為界の地名十号とあつて、多くの絵
図が収めてある。此の旅程の総計は七萬參千
四百七十一里とあり、一年以上の日子を費して

榛原製

みる。満洲問題に関係があつて参考とな
るから購ひ入れた。外に政府の修史始末此数のその
家譜もあつた。之は幕府の人岩崎忠正が新著録の
依写本として完成した新の昔話の家譜のと異る本
があるので購入した。大日本史編纂の歴史を知る
の一助とならん。何れも忠正案とある名を塗抹し
て他の名を改めた所がある。

○中央公論から早稲田の田南時代と題する進境
談を寄せよとの嘱あり、此稿を書きて寄せた
漸やく成つた。此の進境はいつもやや書いたことがある
が、その旧稿が見当らないので、ざつと方向を
書直して書いてみたが、紙数が足らないので、

充分すけるへ。大体ハ其の間の獨立を獲得し其のき
田圃時代政府の壓迫に抵抗し其奮鬪し得たのは
あることゝ主力を置いて書いて見れ
○素園石譜の判取れ加勢傳當家の姿の署名が
あるけれどもその人ハ一切知られてをれが、三村竹
清ハ其人の書幅を有して居ると云ひ、其實しを
寄せて来た此人ハ眞宗の布教師として上海
に在りて我邦へ漸派の印を傳へれ祖であること
が知られ、田山大達来る名職成るとも此人の詩吹び
漸派に入つたのだと云ふことである。此等さま石譜
には家書び名か書かれてゐるが漸派の風である、
書も画も此人の心であらう、尚は竹清と今すする

○日垂曲を贊せんとす。
○秋の稲を刈り取つた後稲株の中より纖細の稲
が生ずるのを農夫ハ刈り取つて牛馬の食に供する
自分幼少の時農村にみて、志むくこれを見れが、
さて此の纖細の植木を何んと云ふかを忘れれの
で人にきいてても知るものが無いが、ヤツトひつじ
と云ふことが分つた。志かし何如斯る名があるか未
た詳かでない
○竹杖為輕の自筆本を得たことは前に於しれが其係ハ

編者竹杖爲輕は『蜀山人判取帳』の裏書に「森島萬藏稱竹杖爲輕初號天竺老人號萬象亭」とあり、同書筆者小傳（三村竹淸氏編）に「森島甫齋といふ、式亭三馬の書入に改甫粲とあるを見たり、名は中良、字は虞卿、號桂林、文化五年戊辰十二月四日歿、享年五十五、芝二本榎上行寺に葬る」とみゆ。この人平賀源内の門人にして、戲文に長ず。本書の序文と前書はその[redacted]。また書畫家の署名に「勝尾春政」とせるは、勝川春章、北尾重政の二字づゝを採りて、命せしものにて、洒落氣たつぷりの狀を滿喫すべし。

榛原製

○今度出版された名著標本集の内に御入部伽羅女
末巻の挿絵が出てゐる、六人の女が全裸体で歌かる
たをとつてゐるのを、側らに又一人とも幇間類の男三人
が見て居る、浴室での脱ぎ衣裳が見へてゐる、初めてかん
夕を取り来てこれをあからさま衣裳を着する事を許す極
りとある。エロテツクの極興なマンナことまで工夫しれ
か、自分のいつもや裸体画を書き種々窮しれが此
図は思ひ寄らなかつたこれ。
○此頃度々穀堂木(桂木)が山陽の書幅を持つて来て目亭
の審定を請ひに来る、其の話しの内に、此の頃あちこち
の贋書がちよいちよい山陽の幅の真蹟とされぬので
随分ある。その贋書の贋作がチラホラ行はれて
ゐる、現に此頃見えたのも正しく贋物であつたと語つ
たが再審ありのことである。

一二三　近購の圖書に就て

書物展望七月號

市嶋春城

書物展望社から書物の隨筆を寄せよと求められたが、趣味家の淸鑑に供するやうな材料の持ち合せがない。差當り近購の書物に就て聊か贅言を附する位の事に過ぎないが。勿論稀覯珍奇と云ふほどの書は一點もない。

髹飾錄　二卷

自分は前年『髹飾錄』と題する寫本二册を獲て今も架中に藏してゐる。此書は明の黄成の著述で、支那の堆朱堆黑の製作を委しく說いたもので、工藝上頗る重要のものであるが、版本は曾つて寓目したことが無い。併し多分叢書の内に存するであらうと考へたから調べる事もせず打過たが、頃日圖らずも版本を得た。それは明代の版式に倣つて、近頃支那で刻したもので、卷尾の識語に據り、此書が支那に傳らず日本に傳はる本に據つて刻されたことを知つた。日本に於ける此書の傳來に就ては左の如く云ふてゐる。

日本享和年間、當我國乾嘉之際、木村孔恭氏蒹葭堂藏鈔本一部、嗣是展轉傳鈔而原鈔本入昌平坂學問所、及淺草文庫、最後乃歸帝室博物館共現在帝國圖書館、及美術學校所藏鈔本皆自蒹葭堂本鈔出書也。云々。

とあつて大村西厓と圖り、明本の舊に復して版刻せる人は合肥の闞鐸で、刊年は中華民國十五年八月である。此刊行に依り吾等は初めて版本を手にすることを得たが、多く輸入されてゐる本とも思へないから紹介かた〴〵こゝに擧げておく。

檟森齋石譜　一帖

檟森齋は小泉檟山人の事で下野の人、香魚を畫するを以て

日本で出版された名著標本集の内に御入部伽羅の末巻の挿絵が出てゐる、六人の遊女が全裸体で歌かる

名あり。畫法洋風を加味して寫實眞を亂る。此人頗る奇石を愛し、全國の名石を探ること久しく、奇石ありと聞けば、千里を遠しとせず必らず訪ふて畫す。此帖收むる所百名の多きに及び、一々其名と產地を註す、帖の首尾に多く名家の題跋を收む、乃ち帖には龜田鵬齋、村瀨栲亭、立原翠軒、賴山陽の文あり、跋に、武元登々庵、篠崎小竹、小宮山昌秀等の文あり、序跋の文をも併せて全部拓本なれども、拓法尋常にあらず、諸家の序跋亦皆其拓法を稱す。蓋し其の拓、檀山獨創の工風に出たものである。鵬齋の序に云く、

（前略）其巧全非梨棗之所彫、亦非金石之所鏤也、森齋雖素工于圖畫、似別有一手段焉、其法先以膠泥爲板、而窰燒之、然後和澄泥、以描寫其板、再燒之、成而榻之、是其所以不失其眞而奇偉蔚蒼存古色也。

山陽は更らに稱揚して云く、

石之有譜舊矣、檀山人之譜石獨得石之天焉、山人好畫、畫最喜狀石、行海內覩奇偉醜怪者輙摸之、其摹之也、以土代紙、以泥畫之、而窰之、而榻之、儼如榻金石陽文者、而石之貌神幷其紋理皴皺莫不皆肖。云々。

當時此拓法を奇としたるは法家の一齊に稱揚する所にても知らる。卒然帖を開いて見れば、瓦版でもあるかと思はるゝが、諦視すれば然らず、瓦版は瓦を鑄りたる凹板なるが、これは土を以つて畫して窰に燒いたものであるから凸版である。山陽は序中に云く、石も亦泥の凝形したるものである、之れを凝形せしむるものは陰陽の陶冶に依るのだ。然らば則ち山人の爲す所は小造化である。多くの石譜は皆筆墨を以つて成つてゐるが、山人のは天を以つて天を摹してゐる。そこに筆墨の石譜と大なる逕庭があると云ふてゐるが、檀山が石の神をあらはすに苦心したこと丈は確かである。自分はかつて檀山が同じ拓法で自畫を撫したものを二枚得たことがある。或人は之れを見て漆喰（シックヒ）版と云ふたが、此譜を得て始めて製版の大要を知ることを得た、日本の石譜で支那の素園石譜に比し、遜色のないものは恐らく此の譜であらう。

素園石譜　四卷

素園石譜は支那でも有名なものであるが日本には版本が甚だ少ない。好事家は寫本を藏して滿足してゐるが、大村靑厓が前年覆刻を試みたので爾來版本が流布してゐる。然るに日本に異本の素園石譜が刻されてゐる。自分は偶々之れを獲て藏してゐるが、何故か殆んど流布して居らぬ。自分が之れを異本と云ふ所以は石の書き方も附帶の文も靑厓本は楷書で書

かれてあるが、これは行書に書いてあり、石の形貌も彼れに在つては素人畫の如く拙いものであるが、これは各石甚趣致があつて描寫が巧みである。或は支那に二本あつて、日本に覆刻したものは佳本を採つたものであるまいか。但だ此本がいつ誰に出版されたのか。それ等に就ては何も記す所がない。唯だ僅かに二卷の目錄の背面の餘白に、

雲間林有麟仁甫輯
新安胡琪二梅重續
古美朱煌靑藜篆隸
加州僧蒙心泉校訂

とある。僧蒙心泉と云ふ人の未だ詳かでないが、加賀で曾つて版刻したことがあつたのであるまいかと推測するまでゝある。此四行の文字の書き方と此書の內容の行書がよく似て居ることから考へると、或は日本の好寫本を底本として刻したのであつて、支那版の覆刻では無からうかの疑も生ずるが、書畫共に頗る優れたものである。或は版が何等かの事情で滅びて本が流布しなかつたのではあるまいかと、これも推測に過ないが、兎に角大村靑厓が覆刻前早く日本に版本のあることを爰に記して博雅の人の敎を待つ。

板碑拓本　三十餘枚

頃日手に入つた拓本三十數枚は石に緣があるから、筆の序に聊か御披露に及ぶ。此の板碑は安政元年幕府が品川の砲臺を築造した時、土を御殿山に採つたことは、誰も熟知のことであるが、其際圖らず人骨に混じて多くの板碑が出土した。工事を督した幕吏大竹昌言は、其の散逸を慮つて出土の物を全部品川の法禪寺の後ろの山に移したことは、昌言の子昌藏が明治二年になつて、その發掘の次第を刻した碑を立てた、其の記文に據つて知ることが出來るが、此板碑の拓本に就て其の年代を考ふるに多くは南北朝時代のものである。卽ち文保、元德、曆應、康永、貞和、延文、康安、貞治、應安、永和、應永、寶德、享德、文明等の年號が刻されてゐる。自分の得た拓本は全部でないから、他にまだいろ〳〵の年號があるかも知れないが、概ね南北朝時代のものと思はれる。御殿山は海に面する地形であるから、海嘯やら地震やらでいろいろの變遷があつたことは想像に難くない。機を得て法禪寺を訪ひ其の板碑を一覽したいと思つてゐる、其の發掘の次第を記した碑文は左の如くである。

安政元年甲寅舊幕府命築礮臺於品海、先考昌言君乃幹其事、

名あり。畫法洋風を加味して寫實眞を亂る。此人頗る奇石を

が、諦視すれば然らず、瓦版は瓦を鑄りたる凹板なるが、こ

取土於御殿山以營焉、穿之數仭古墳反遺骨若干、而出閼其歳月之記、皆四五百年前之物也、嗚呼古之名將豪族、卜兆域於此者、遭海、嘯或地震而淪歿也、陵谷之變、豈可不感愴哉、先考患其散逸、以泥土塊爲製數筐拾收之、

使役夫韓藏於品驛法禪寺之後山、後數年礮臺亦爲靈設、而此墳巍然而存、余亦有所深感、因追記焉

明治二年己巳六月

駿州侯人　大竹昌藏撰并書

○　湯朝竹山人

愛書趣味典籍文獻の雜誌は永續せぬといふ。玆に本展望あり。卷一卷向上進展の實を示し書物の月刊が必ずしも永續困難ならざるを現實に知らしむ。讀書人の一話題出版界の一奇蹟といふべし。思ふに少雨と柯青の兩君が多年斯道に苦勞し素人にわからぬ秘訣に職由すべし。本誌の記事で老生の興味とするは最近の號では森銑三兄の魚蕉先生春遊記考および菅竹浦兄の奇書春籍拆甲考なり。兩篇の如きは本誌の使命の最高位にあり。而も興趣と研鑚と兼ぬ。筆勞を多とす。更に展望社が魯庵翁及吉野博士の[illegible]の上梓を謝す。その内容その装幀はその著者を追慕する者には世評以上の氣呵に擊たる。

○　木村毅

大體「書物展望」は今のままでよろしい。只、毎年一回、多くても二回、單行本としても價値をもつ程の擴大特別號を出して貰ひたい。さしあたり明治文豪特輯號のやうなものをだし「森鷗外」森潤三郎氏・「内田魯庵」内田巖氏などは毎號の寄書家だから動かぬ所として「默阿彌」河竹繁俊氏、「漱石」夏目純一氏（或は松岡譲氏）と云ふ風に家藏の文獻を豐富に引用したものを今秋位出して貰ひたい。

若い研究家が古新聞と古雜誌の切[illegible]た研究も惡くないが展望社は展望社らしくやつては如何だらう。なほ各大學の明治文學に關する卒業論文の中優秀なものを紹介するも一案だ。

○　津田青楓

現に出版されつゝある雜誌及書籍の装幀、表紙圖案等に就いて批評を毎號やられては如何です。

○　新居格

「書物展望」は紙質もよく、内容もよく、氣品高く、雅致と香氣のあるよき雜誌ですが、何この上とも海外文壇の書物雜誌の展望がもつとあつてもいいのではないでせうか。

それも海外の[illegible]書の話乃至消息紹介孰れも望ましく存じます。先は右御答へ迄に。

○　平田禿木

今の儘で結構と思ひます。もつと廣く賣らうといふなら、それぞれの專門家に囑して權威ある新刊の批評とか海外新著の紹介などを掲げるも一策でせうが、生じ手をつけるより自然にやつていかれる方が却て妙ではないでせうか。

○　柳田泉

兎に角、こゝまで來たのはエライです。然し、これからが又大變だと思ふ。益々お仲をよくして展望社大成の實を擧げられん事を。[illegible]

つまり又坪内演劇博物館と同大學の役員
会があつたので其席上陳列品を一覧した。秋
季に演劇の史的展覧会を催すこと準備的に
我南に陳列してあつたものを一応通覧した。原始
時代は何事も材料が乏しい。漢時代の石壁に
舞踊の彫刻のあるのが、最も古るいものとして出し
てあつた。南洋から将来の伎楽の仮面、田楽の
絵巻物写し、それは興味を感じたのへ、事実
田の中で鼓を打ちササラを鳴らし舞をしてゐる
人物が画かれてゐるが、必ずしも田楽の名のあるの
も無理ではないと思はれた。當時十字架を並べ
られ損へ木製の竹馬やうなものが摸造され

てゐた。それは十（じふじ）この字は両足を托し、△印の
棒につかまつて竹馬の如く身体を持ち上げて八下
の裏先で地を衝くものだといふ説明を与へた。コ
ナ所から舞楽が生れ進んだことを思ふと隨分
レファインされ且つ複雑化されたものがある。およ
そ演劇史の蒐集研究に関するものは偉いもの
旅してゐる侭通りで微するが少く、児童の
ものは大概写真陳列されてゐた。雅楽の面などを
始め有名な物の二銭の衣裳も出てゐた。能楽の衣
は大昔は今の服と備つたが、完全な者のまいし騒
る程地がある。近来俳優や劇数味の人から此
の館に進んで寄附することが行はれ出したことも

云ふも喜ばしいことだが、勘弥の遺品や曽我廼家十郎の遺物、津田正次郎の遺物なども可なり多く寄贈されてゐて中々に頗る面白い紀念品もある。こんな日本唯一の演劇博物館の備けもあるが、斯る寄贈は能く完形を保つが、実に俳優の紀念品の置き所としての最も適当のもので、且此處へ寄附すれば、故人が長く伝へることも出来るので、双方の便宜と云ふことが出来るのである。舞臺の模型や廻り舞台の模型などハ可なり大きなもので普通の家では保存に困るやうなものだが、此の館では誠によく寄贈を歓迎するのである。人形芝居の人形の内には浅数の人形で立

から轉載したものだが二基あつたが、こんな大さのを較べると大形のもので、あすこの特徴もあるやうに見受けられ。裏面に嘉永の年號と刻した、守田座の木版の大看板もどこからかの寄附で廊下に立てかけてあつた。嘉永の頃とも思はれるが、年號ハ多今此座の創始の時を記したものであらうか、十分の一に縮模した照堂と其の枚金も多く陳列されてゐたし、俳優の化粧の顔料も一国式揃へてあつたがおもしろいものである。紙面で作られた仮面や白縮緬で押絵とした菊五郎、大像の数面なども寫目して目を驚ろかせた、熱心なる暁なる研究家を見たら一層興を感ずるであらう。

六月廿九日

一昨夜四谷席上にて高村光雲翁と談を交
へしに翁は耳が遠いが八十と云ふまだ矍
鑠としてゐる。翁が当代第一の仏師であるのみならず
最も鎌倉時代に対して徳川時代の作翁などの
名人がたの比であると思ふ。翁は近年殊に上手になる

自分より歴代も時々はあ
りませんかと云ふとありませんから油断のなりません。
よくあることは自分（日）で作つた像を原型として
多く鋳造しますが、これは自分の承認を与へられ
ませんから。其の鋳造品を購買を経つて入れ
自分の最者もと頼んでくる㊐の者もありますが
自分は断つて書きませんとさうすると此翁朝から
夜分九時まで工場で制作に没頭するのが例

であるのに、毎日多人の訪問客があつて妨げら
れるのでいつも席が温かくなりません。気を散
らさないための用心と云ふてゐた。翁は今酒を一杯位
飲みます。止めてゐるがもとはなかなかの豪酒で岡
倉天心と徹夜で飲んだこともあつた。二三十
年前までは専家のお指手が出来たと云ふ㊐
も一笑した　　六月廿九日記
○先頃美術クラブで贈呈した杉本翁所蔵の
書画骨董は其の後方々で売立に附された
二百七八十萬円に売却された。翁としては三
萬円と鑑定されたのに其の許可が得られてあ
つたとは云ひ、此の不景気時代書画骨董

双軒庵の賣立

二百萬圓を突破

マイクで開札報告

【大阪發】双軒庵松本枩藏氏の什寶大入札は廿六日夕刻から廿七日朝にかけ徹宵行はれた、廿三日から三日間の下見も一萬九千人を數へ、開札の結果は從來各札元席へ觸れ歩いたものだがスピードと正確を期するためこの入札からマイクを据ゑ札元席へ一齊に聞える裝置を施したことは新らしい入札風景だ、廿七日午前九時半までの主なる賣立ては

「函書仁清色繪藤花文様帝」千八萬九千圓△竹田「又復一樂」畫册十一萬圓△東山御物「牧溪拾得」二萬一千九百圓△乾山八橋繪賓六萬九千三百十圓△吳春旭醴劇松三萬三千九百十圓△竹田「歳寒三友双鶴」七萬八千九百九十圓△竹田「松渓瀑泉」一萬三千九百八十九圓△山陽「日本樂府」第一首一萬八百圓△華山千山萬水五萬一千九百八十圓△秋閣畫册一萬七千三百圓△山陽「月ヶ瀬眞景」扇子一萬二千九百六十圓△碪青磁袴腰香爐五萬三千九百圓△古赤繪共蓋香爐二萬三千九百圓△飛青磁瓶子花入五萬三千圓△碪青磁勤木香爐二萬三千百九十八圓△木米兎道朝暾七萬三千圓△梅逸瀑泉脩竹一萬六千百圓△牛江春山閑居四萬三千九百九十圓△藝阿彌「瀟山水」十六萬九千八百圓△竹田「松巒古寺」九萬三千圓△景文「中芙蓉峰」三幅對四萬三千九百十圓△景文「紅蓮白蓮」一萬六千圓△大雅堂「楓橋夜泊」一萬一千六百圓△竹田「風栖公子」一萬三百圓△岸駒「柳翠」一萬八千九百九十圓△雪舟「晴雪齊圖」三萬三千九百圓△傳周「丹子雲中釋迦」三萬九千八百圓△一鳳「佛法鳥」二萬三千七百圓

午後零時卅分開札を終了したが東京側の強氣によつて豫想高二百萬圓を突破すること七十萬圓余、點數二百五十余點に達し昭和四年五月藤田家の賣立以來の大入札であつた

だけの大事はやや不況時を忘れしめるらしく、実に凄い売上である。此の事は切ぬきを貼りつけたが、此のラジオの報告で大変に過ぎ[illegible]ぬが更に詳報を知りたいものである。

する左の書面が到来した。之れを捲つて見流るること、先師紫塢先生殁されて既に五十年となり、栗花と逢ひての折、中庵を焼き燼として、黙々坐して居られし栗村先生は殁後五十九年、其時職務にありし竹塢先生の子息も生物は殁後既に四十三年となりしとを知りぬ。三昭同窓会員の黄ばめるの中なるつとめも既に三十三名の多きに及んでゐるは何れも吾等の交りあるものも十名に無くをまる。吾等の何んたる幸ぞ今尚命を保つてみる。此の転牒を見て轉た感慨に堪へぬものがある

六月末日記

双軒庵の賣立
二百萬圓を突破
マイクで開札報告

【大阪發】双軒庵松本奎藏氏の什寶大入札は廿六日夕刻から廿七日朝にかけ徹宵行はれた、廿三日から三日間の下見も一萬九千人を數へ、開札の結果は從來各札元席へ觸れ歩いたものだがスピードと正確を期するためこの入札からマイクを据ゑ札元席へ一齊に聞える裝置を施したことは新らしい入札風景だ、廿七日午前九時半までの主なる賣立では「國寶仁清色繪藤花文茶壺」十八萬九千圓△竹田「双復一樂」壹册十一萬圓△東山御物「牧溪拾得」二萬一千九百圓△乾山八橋繪賞「風栖公子」一萬三百圓△岸駒「柳翠」一萬八千九百九十圓△雪舟「晴雪齊圖」三萬三千九百圓△傳周「丹子雲中釋迦」三萬九千八百圓△一圜「佛法鳥」二萬三千七百圓

午後零時卅分開札を終了したが東京側の強氣によつて豫想高二百萬圓を突破すること七十萬圓余、點數二百五十余點に達し昭和四年五月藤田家の賣立以來の大入札であつた

東京市參與會は廿八日午後二時より開會、落合高級助役が同日午前九時東京驛著著任し、これによつて助役全部が出揃ふので市長、助役の俸給を決定するが、市長は二萬圓、第一、二兩助役は一萬五千圓、第三助役は一萬圓に決定する模様である

だけの記事はや不況時を無視してゐるらしく、實に凄い景氣上げである。此頃は切ぬきを貼り込んだのはラジオの報告で大要に過ぎぬが更に詳報を書き入れたいと思ふ

○新發田より左の書面が到来した。之れに據つて見ると歳月流るゝ如く、先師佛鳩先生歿されて既に五十年となる。葉化と遊びの折、中庵を焼き爐邊に默々と坐して居られた栗村先生は歿後廿九年、其頃腕白であつた井鳩先生の子息主物は歿後既に四十三年となることを知つた。三回同窓會員の黄泉の客となつたものも既に三十三名の多きに及んでゐる。此中で吾等の交りあるものも十名に垂んとする。吾等の何人か幸ひ今尚餘命を保つてゐる。此の錄牒を見て轉た感慨に堪へないものがある

六月末日記

肥田野先生碑石外柵修理並
法要追悼會開催趣意書

恩師肥田野先生ノ學德ヲ表彰スベク當時及門ノ士協議シ碑文ヲ選定シ本郡築地村ノ村端ニ屹立セシハ既ニ各位ノ熟知セラルヽ所ナリ爾來星霜ヲ經ルノ久シキ功業ハ不朽ニ傳フベシト雖モ碑石ハ當時設計ノ不完全ナル爲メカ今ヤ傾斜シタルノミナラズ外柵ノ如キハ既ニ腐朽シテ其瘡跡ヲ止メサルニ至レリ一朝大風雪ノ災ニ遭遇セバ顚倒ノ不幸ヲ見復タ收拾スベカラサルノ悲運ニ陷ランハ甚ダ遺憾ニ堪ヘサル所ナリ之ヲ以テ兼テ御依賴致シ置キタル如ク左記設計書ニ基キ修理ヲ施シ度候尙此機ニ於テ竹塢先生ノ五十年祭(繰上ゲ)ヲ擧行シ同時ニ築村先生(五十九年)金州先生(四十三年)ノ英靈ヲ祭リ度候又回顧スレバ三野同窓會創立以來同窓諸士ニシテ幽明ヲ隔ツルモノ左記氏名ノ通リニ付聊カ諸氏ノ爲メ追善供養ヲ營ミ以テ精靈慰安ノ情ヲ表ハシ度其經費約左記ノ通ニリ有之候幸ニ御贊同ヲ得バ本年七月九日(御命日ヲ標準トシタル日曜休日)新發田町廣澤山寶光寺ニ於テ執行致度貴意得候

敬具

黃泉ノ友

渡邊惟勤　丹呉達三　佐藤彦藏
河內保次郎　西村正松　內山格次
長谷川昌敬　桑山卯三郎　佐藤嘉之
下孝之助　皆川邦二郎　井伊小平太
國井伴之丞　谷川俊三　昆田文次郎
船山翠　白勢和一郎　井上幸次郎
肥田野才之丞　佐分利重憲　速水柳平
肥田野嘉吉　肥田野祥　近藤辰一郎
寺尾逸爾　高賀銑三郎　片桐辰次郎
長島晴耕　宮野昇平　野尻信夫
奧村末吉　原玄朴　國井和三郎

以上參拾參君

榛原製

庶民金融研究講演會

控室に於ける講演者諸氏並本會會長理事長

向つて左より 大久保大藏省銀行局長・井川銀行檢査官・市島本會理事長
關全國無盡集會所顧問・本會會長大隈侯爵・黒田大藏次官

開會の辭

文明協會理事長　市島謙吉

開會に先立ちまして一寸御挨拶旁々一言致します。今日は豫て御案内を致して居る譯であります。文明協會は時々時局に付ての會を開いて居るのでありますが、今日は特殊の會を開く譯であります。會員方の外に多數諸方面の人々がお出でになつて居ること故、協會の成立ちを話したいのでありますが、短時間には申上げ兼ねます。要するに大隈侯爵を會長にしまして可成り長く成立つて居る會であります。例會は毎月開いて居るのでありますが、時々色々な問題を持出しまして、斯く社會的に進出して特殊の會を開くといふやうなことも致すのであります。今日は卽ちその會でありますが、實は目下の極めて大切な問題でもありますので、獨り文明協會ばかりでなく、大藏省を初めと致しまして貯蓄銀行、無盡業者、信用組合業界の方々、その他實業聯合會の御後援を得まして、この會を催した譯であります。今日研究を致さうといふ主題は、庶民金融といふことでありまして、大藏次官を初めとしまして大藏省のその衝に當つて居られる方々並に無盡の業務に久しく關係して居られる方或は保險業に關係して居られる方といふやうな夫々の專門の人々にお出でを戴きまして、御講演を願ふ次第であります。夜に入りまして極めて短時間にこの諸家から十分に御講演を願ふことは恐らく難しからうと思ひますが、成可く御靜

聽を願ひたいと思ひます。尙ほ申上げて置きますが、この問題は全國に及ぶ問題でありまして、農村都市共にその研究をすることは時間の上に於て許されないことでありますので、今日は先づ以て都會地に於る庶民金融といふことを主と致しまして、追々と農村に迄も及ぼすといふ譯でありますから、或は二回三回とこの會を續けて催すことにならうかと思つて居ります。一體私共はさういふことに付ては門外漢で素人でありますが、しかしながら是は誰にも大いに關係のあることであります。貧乏人には最も關係がある。自分のやうな貧乏人は最も痛切に感ずる譯でありますが、扨て誰が考へましても困ることはこの庶民金融の制度が日本に於ては未だ十分でないことであります。十分でないのみならず、殊に依ると昔より却て退歩して居るかの如くにも思はれるのであります。無論銀行は非常に發達して居ります。その他の金融機關も非常に發達は致して居りますが、それは唯だ大きくなつて居るといふことでありまして、決して下層の是非資金を待つといふ方面には及んで居らぬやうに思はれるのであります。段々銀行その他の金融機關が大きくなればなる程、却て資金を待つもの方ゝに薄くなるやうな傾向がある。今日は丁度保險會社の會場を借りて居るのでありまして保險會社の惡口を言ふのは如何はしい譯でありますが、保險會社は段々大きくなつて居りますのに、然し保險を要するものは閑却されて居るやうな觀があり餘り保險に這入りたくないといふやうな方面を無闇に强制して保險に入れるといふ狀態である。庶民には保險は及んで居らぬ。西洋の話を聞いて見ますと、裏店邊りへ募集員が鐘を振つて這入り込むと、人人が集まつて來て募集に應ずると謂ひます。如何にも簡略に募集が出來るものと見えます。斯くなつてこそ初めて保險は大切であるやうに思ふのでありますが、日本に於てはそこ迄行つて居らぬ。何でも大

袈裟に摑んで來れば會社の爲めなる、又募集員の利益になる、かういふ譯でありますから、煩瑣なものには手を着けない。だから保險と言ひましたところで、敢て保險を待たぬやうな金持が始終付けて居るといふ狀態である。是は會場が偶々保險會社でありますからさういふことを一寸申す譯でありますが、どうも凡てさういふ呼吸であるかの如くに思はれる。勸業銀行は何か勸業の爲なら金を貸す譯でありませうけれども、しかし勸業家が金を借りることは事實に於て頗る困難である。今日は久し振りに後程お話になります無盡のことに廣く御關係のある關さんがお出でになつて居りますが、この無盡は久しい以前から日本に於る金融機關である。質屋と共に實に大切なものでありまして、是とても段々發展をして來るらしいのでありますが、その區域が擴がつて來ると面倒なことになつて、愈々金を受取る時には確實なる保證人を要する。その確實なる保證人をといふことが非常な難關である。かういふやうなことが凡てに通じてあつて、折角良い金融機關もそれで以てすつかり人を參らしてしまふといふことが病であるかの如くに思ふのでありまして、今の大切な困難時局に當りまして、殊に都市の商工業或は農村經濟などに付きましてどうしても資本を拵へなければ如何に何と言つてもこの窮難が拔けられないといふ時に當つて、之をどうにかしなければならぬといふことは現下に迫る問題であるが如くに考へる譯でありまして、そのことに付て專門の方々にお出でを煩しましたことは、獨り吾々の會の幸ではありません。全く是は現下の大切な問題でありまして、この短時間に於きまして幾何でもその說を聽くことを得まする ことは、御同然非常に仕合せと思ふ次第であります。大切な時間でありますから、この位のことに留めまして、是より開會を致します。」(完)

榛原製

玩具の久保佐四郎氏を憶ふ

玩具制作の第一人者として知られる久保佐四郎氏で、此頃氏の来訪を得て初めて面晤を得たが、氏の作品を通じて氏を知つたのは数年前からである。自分は十年間努力して豆本を蒐集したことがあるが、それを他人に譲つて聊か寂寥を感じ、豆本の研究集を繰り返すことを止めて、玩具の蒐集を思ひ立つたが、三都を始め各地の玩具は餘りに数が多く、目先を変へて集めることが容易でないのみならず、玩具も嵩張つて手狭な家に置き所の無いのに困つた。尚は不満足に感じたのは、各地の玩具が追々旧態を変じて固有の地方色を失つてゐるので、忌や気がさして、縮模の標本を集めることゝ

方針を変へてそうあると勢ひ佑四郎氏並に其の門流の作品を縮めるのやむを得ぬ、佑四郎氏一流の縮模の小品玩具の數十點に及び大抵郡部若者によつて手を入つてゐる。自分は之等の蒐集に就て感じたことは、如何にも玩具の意匠の多種多般であることと、其の縮模が精妙で、あんな微品をよくも原意を失はずにやつてやつたと無言感服させられ、其の作品を縮める毎に佑四郎氏の靈腕を思ひやつたことは既に久しいことだ。

日本は美術を以つて世界に誇る國だけあつて玩具に於ても世界を制覇を唱へてゐる。世界の玩具史を讀んで見ても、日本は種々の點に於て優越してゐることを感ずる。其意匠の豊富複雜であることは勿論、其の製作の巧緻に至

つては列座世界各國の及ぶ所で無い。由来日本人には先天的指頭に靈活の働きがあつて、敢て機械を藉らず、手工を專らとする所に特色があるが、此點は世界の人が嘗つてともし能はざる所である。玩具藝術は日本の一名物で、佑四郎氏の如き名工が昭和の時代に存在してゐるのは此上ない仕合で、是非とも此の藝術を保護し助長し世界の市場に横行せしめねばならぬ。一時日本は何事も欧米に心酔の餘り、自敬の念を棄て、玩具の如きも欧風のものを喜んだので、我国固有の玩具製作も非運に陥いれたが、今は世界に於て漸次日本玩具の優越を認めつゝあることは事実である。製作者は決して失望すべきではない。唯此世界の市場に持出すには彼等の嗜好に投ずる多少の工風が要ると思ふ。何れにしても時勢の変化に伴ふ一斟

No.

所が製作の上にあらねばならぬと思ふが、併し日本玩具の特徴は飽まで保存せねばならぬ。我が特徴を棄てゝ徒らに西洋の美を模倣することは愚の骨頂である。これ取りも直さず美を棄てゝ醜に就くものである。幸ひに佐四郎氏始め各種人形製作の名工が一団となつて白澤會が組織され、斯の道の発展を企図されつゝあるのは此上の無い仕合で、名工の存在また時に乗りて門流を作らねば此の藝術も萎靡不振とならんも測られない。名工は容易に世に出るものでは無い。吾等は佐四郎氏の如き名工の加餐自重を比冀に祈らねばならぬ。名工は往く所として可ならざるなき手腕を有するので、其の器用に任かせて、動もすると本領以外の事に手を延すことがあるが、吾等は断じて之れを不可とする。偶々佐四郎氏の還暦の賀會に臨み蕪言を録して祝辞に代へる。

久保佐四郎君還曆賀莚の檄

我等が久保佐四郎君、明治五年壬申の秋に生れて、大正昭和の聖代を重ね、去年還曆の齡に達せり。此を以て我等同志相謀り、來る六月十一日、其齡に通へる日をトして爲に賀莚を張らんとす。君や生粹の江戸兒と生れ、少時より數奇に弄ばれ乍ら、玉は轉ぶに隨つて光を增し現に人形界の第一人者たり。我等君の妙技に依つて常に童心を培はれ居る者、君が還童の嘉節に際して將さに一太白を擧げて、共に大いに若返へらんとす。即ち茲に檄を飛ばして、扁く同好の諸賢を促すと云爾。

昭和八年五月

巖谷小波

日 昭和八年六月十一日（日曜日）

時 午前十一時

會場 緑風莊 下谷眞島町根津八重垣町電停傍

會費 金八圓 當日會場受付ニテ頂戴仕候

申込所 白澤會事務所

發起人（イロハ順）

巖谷小波　池野哲仙　西澤笛畝
堀口磯吉　鳥居清忠　小川勘助
岡本玉水　神田信藏　川尻清潭
吉田永光　名川春山　有坂與太郎
笹川臨風　齋藤錦郊　廣瀬菊雄
平田郷陽　杉山松次郎

贊助人（イロハ順）

市島謙吉　板谷波山　池松久太郎
伊東深水　伊藤やま子　伊藤壽
池田富造　服部普白　花柳章太郎
花柳壽美　西村雅之　西村庄
堀内鶴雄　堀越三舛　豊泉益三
富田温一郎　外狩素心庵　太田德久
太田照藏　鏑木清方　香取秀眞
金井紫雲　川崎巨泉　金田櫂之助
金林眞太郎　横山正三　吉村樹
吉野喜代二　武井武雄　田澤良夫
津田安兵衛　塚野せつ子　長井金舛
村岡應東　梅澤隆眞　梅原靜雄
梅岡源太郎　梅谷紫翠　久保田金僊
山中清兵衛　山田德兵衛　鎗田小一郎
前田家内　前田雀郎　聚古軒丸幸
小針金三郎　味澤貞二郎　足立新次郎
齋藤晴雄　澤橋五郎兵衛　岸本五兵衛
木村子之吉　木村旦水　結城素明
三井家内　三村誠二郎　篠田鑛造
關口源　鈴木眞澄

主催 久保佐四郎氏還曆祝賀會
白澤會

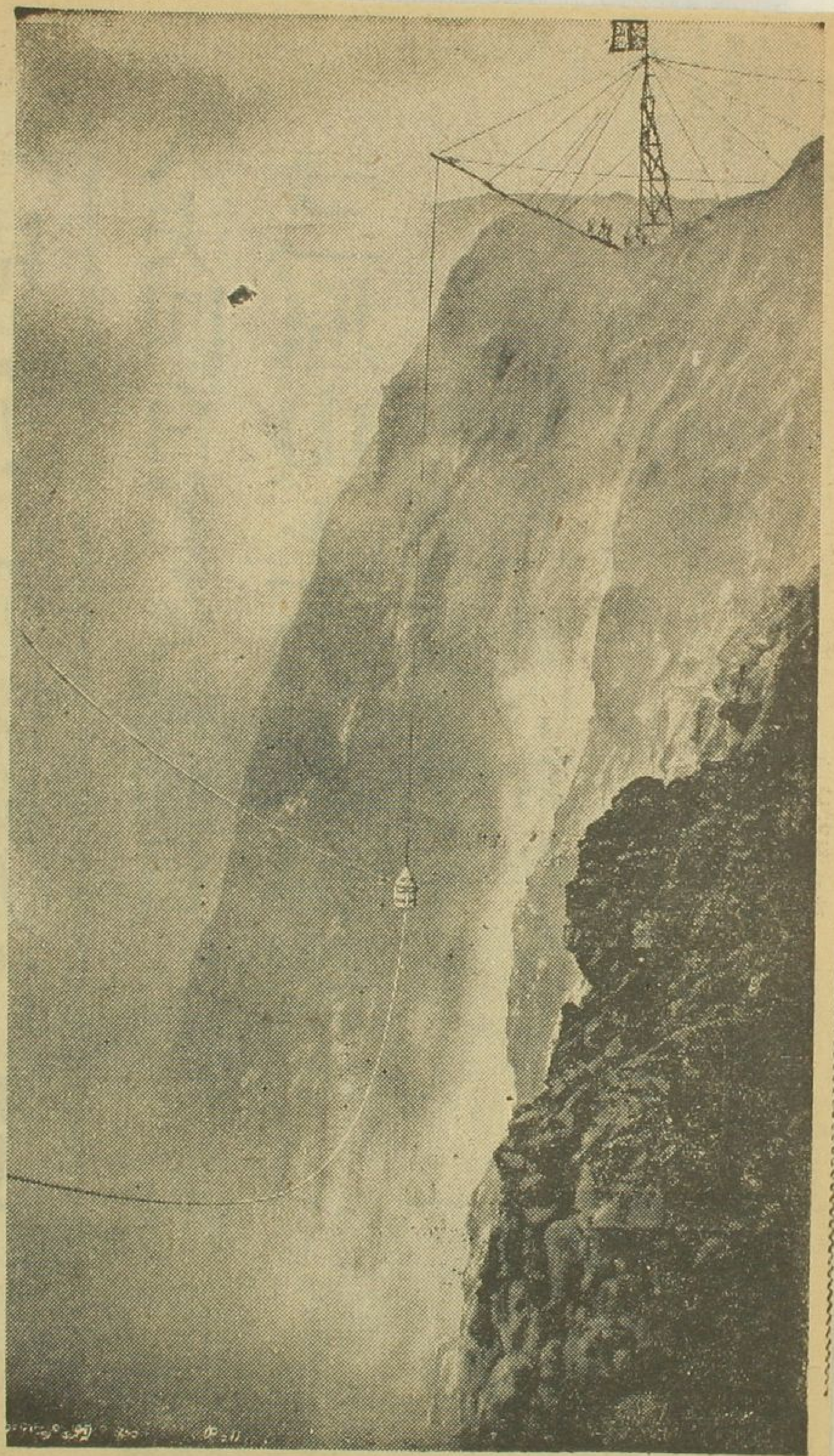
事務所 下谷上野櫻木町五四（平田方）
電話下谷九二番

No.

所が製作の上にあらねばならぬと思ふが、併し日本玩具
の特徴は飽まで保存せねばならぬ。我が特徴を棄てて
徒らに西洋の美を模倣することの愚は骨頂である。こ
人形でも直
傳四郎氏が
澤會が從
此上の無い仕
此の藝術
物は世に
自重を
き手腕を
欽以がの
を不可と
言を錄し

壮絶！この大冒険！

噴煙鳴動の噴火口上から大クレーンでゴンドラ（吊り箱）を下す試験、見よ大自然を征服する機械文明の威力！



榛原製

讀賣新聞

（朝刊）

讀賣新聞社

讀賣新聞の 三大特長

◇外國電報は日本一 ハースト新聞企業團と提携した全世界通信網による外國電報は眞に實に日本一であります

◇日曜夕刊 日曜には特輯八ページ夕刊を發行、一ページ大グラフ、漫畫ページ、演藝欄、特殊讀物ページは大好評を博してゐます

◇色刷り少年新聞 毎月二回發行する色刷り少年新聞は少年少女向きの讀物、繪畫を滿載して素晴らしい出來榮えです

讀賣新聞の世界的壯擧

決死の大冒險！ 三原山火口底降下

大自然の神秘を發く

東都新聞界に雄飛するわが讀賣新聞は常に新鮮多興なるニュースを滿載して報道使命の最尖端を行くと共に又絶えず國家的重大壯擧を遂行してよくその事業的使命を果してゐる。最近の一例を擧げるも米國ハースト新聞企業團と提携して全世界に張つた完全なるわが社の通信網は日々の本紙上を「本社特電」によつて賑はし、この秀でたる外電價値は今や世上注目の的となつてゐる。一方事業方面に於ては、曩に日本名寶展覽會を前後二旬に亘つて開催し、門外不出の秘寶を天下に公開し、續いて米國大リーグ選拔世界最強野球チームを招聘して野球の最高演技を全日本ファンに紹介した、而して現在はフランスより三大拳闘選手を迎へて「拳闘時代」の日本に大衝動を與へ、わが拳闘大衆の絶讃を博してゐる、一方これと同時に目下決行しつゝある大島三原山噴火口底降下の大探檢は世界史上未だ曾て試みられたることなき一大壯擧として世界的に目をそばだゝしめて居り、連日の本紙上を飾る探檢作業の報道は記事に寫眞にわが七十万全讀者から文字通りの熱狂的歡迎を受け本社及び大島の探檢隊本部にはこれら愛讀者からの激勵期待の投書が山積してゐる有樣である。火山國日本の科學的使命へと、三原山噴火口自殺根絶の道徳的使命と、この二大抱負の上に決行されつゝある火口底降下の大冒險が今後如何に進展するか、有史以來未だ人跡を絶つ火口内の幽玄なる神秘！、噴煙と鳴動の中に見る大自然の驚異！之を征服しゆくわが社探檢隊の決死的活躍！げに、そのすべてを知り得るはわが讀賣新聞愛讀者のみの持つ特權なのである!!

探檢隊の陣容

岩田探檢記者、眞柄探檢寫眞班始め 學界の諸權威參加

深さ千三百尺！「地獄の底」ならぬ火口底に降下する重大使命を帶びて先づ眞つさきに火口内の神秘と怪異界―そして火口底に累々と横はる自殺者の無殘な姿をも見屆けんとゴンドラに身を乘せ一本の綱に命を託して下つて行くのは本社社會部次長岩田得三君である續いてこの内部の現實を撮影する使命で下りてゆくのが本社寫眞課長眞柄秋德君であるが更にこの探檢を一層意義づけ、一層價値あらしめるものは左記の如くこの探檢隊に學界各方面の諸權威が參加してゐることでこれら專門家が探檢者によつて得た材料を基礎にそれぞれの學的立場から本紙上に發表する諸研究は世界最初の壯擧を飾る貴重な火山文獻として興味的にも學術的にも永久に輝くものとして期待されてゐる即ち探檢隊の全陣容は左の如くでこれに大島各村から選り拔かれた人夫四百名が動員された素晴らしい大掛りなものである

火口底探檢者

記者 本社社會部次長 岩田得三

寫眞班 本社寫眞課長 眞柄秋德

探檢隊學者團

◇物理 東大名譽教授理學博士 中村清二

◇化學 東大教授理學博士 柴田雄次

同 理學部教室理學士 望月喜三雄

◇地質 岩崎岩次

◇醫學 慶大教授醫學博士 川上漸

本社診療所長醫學博士 山田尙允

慶大助教授醫學士 加藤俊男

同醫學博士 有馬宗雄

東大助教授地震研究所員理學士 津屋弘逵

探檢隊本部員

隊長 社會部長 宮崎光男

特派記者 小山、湯澤兩社會部員、稻葉科學課主任

探檢隊作業員

◇工事擔任者鈴木信三郎氏以下ウインチ掛り、滑動機掛り、鳶、大工、電話工夫等十七名

◇日本航業會社員關屋耕四郎氏

飯島飛行機關士、文士中村正常氏

裏面を御覽下さい

壯絶！この大冒險！

噴煙鳴動の噴火口上から大クレーンでゴンドラ（吊り籠）を下す試驗、見よ大自然を征服する機械文明の威力！

見よ！この探檢大作業！

人夫四百名を總動員 三原山上の大偉觀

四ケ月に亙る苦心の準備 今や酬いられんとす

三原山噴火口底探檢の決死的大壯擧敢行をわが社が決意したのは去る二月中旬であつた、この世界的大冒險をいかにして決行するか、についてしばく協議を重ねた本社ではまづ岩田社會部次長を

大島に派遣して實地踏査せ

しめ古く明治四十年に現東大名譽教授理學博士中村清二氏が舊火口時代における舊三原山の噴火口を百五十メートル（四百九十五尺）降下した記錄のあることを知つた岩田次長は三月三日渡島踏査するとともに降下の可能なることを極力力說し、こゝに大壯擧敢行の決意は固められた、しかし舊噴火口時代の三原山とは異り今は噴動と噴煙に凄愴な火の息吹きを吐く三原山である、輕々しくこの大冒險を敢行して万一人命を捨てるやうな事があつては一大事である、ことに

濛々たる噴煙の中には人體に

に猛烈な害毒を與へる亞硫酸ガスの猛毒が含まれてゐるのだ、探檢は出來るかぎりの慎重な考査と研究を經て實行されなければならない、こゝにおいて岩田次長はまづ三月十二日東大名譽教授中村博士の尊い體驗と意見をきくべく當時靜養中の同博士と電話で會話をかはし、探檢可能の現的端緒をつかむことが出來た、つゞいて火山と地震に關する成書並びに資料の蒐集に着手した本社は同時に石川島造船所その他で降下用のクレーン及び搭乘函の設計、探檢用服裝等についても綿密な調査研究をつゞけその結果ますく

火口底降下の決意を强めて

愈よ四月八日、社長以下幹部列席の下に探檢に關する本格的な第一回準備會議を開く運びになつた、

この間上、火口底探檢の決死的大冒險を敢行する任を引きうけた岩田次長及び眞柄寫眞課長は死を賭してもこの大壯擧を遂行すべく決意して以來慎重に決行の準備をとゝのへ四月廿日には第二回の探檢準備會議を開いてこゝにいよく組織的探檢行程の第一步を踏出した宮地鐵工所へ製作方を依頼した降下用の鐵製函、ウインチ、クレーン等の設計は再三改訂を加へて愈よ製作に着手し眞柄寫眞課長は同廿七日を期して三原山火口の飛行機上撮影を行ふ等この世界的大冒險の一大記錄は日とともに白熱化して來た

準備漸くにして整つた本社

ではまづ五月二日を期して探檢者岩田社會部次長、眞柄寫眞課長をはじめ齋藤科學部主任及び測候診療所長山田府立博士らが大島三原山現場に赴いてクレーン工事用の基礎地質調査及び火口內溫度試驗、同じく動物試驗を大々的に決行した、この動物試驗はモルモツト六四、兎二四、鷄一四を各々一匹づつ木製の箱に入れて火口から一千尺餘のところまで吊り下げたもので其結果鷄は腰を拔かし、兎は兩眼の角膜潰瘍して呼吸困難をつげた、モルモツト一匹は遂に一日死亡した、以て如何に噴火口內に亞硫酸ガスの猛毒が充滿し降下することの如何に大危險の伴ふものなるかを知ることが出來た、しかし一行はこの危險に而して寧ろ

大壯擧敢行の決意を固くし

同五日歸京するや帝大地震研究所の應援を求めて實驗經過を報告し詳細檢討したのち第三回目の探檢準備會議を開いてこゝに愈よ降下決行の最後決定をみたのであつた、探檢準備調査は全く成つた、本社はこゝに五月九日付の朝刊紙上を以てこの神秘の自然界を征服する大壯擧を天下に公表しついで廿一日この歷史的壯途の第一步へ、眞崎社會部長を指揮とする探檢隊第一班小山社會部記者、藤本寫眞部員、工事擔任者鈴木氏以下大工電話工夫の一行廿餘名が大島へ向けて出發した、かくして大島元村三原館を探檢隊本部と定めた先發隊一行は翌日から元村、岡田、野增、差木地四ケ町村から人夫約二百名を動員して直に探檢決行の第一段的活動を開始し一万二千五百メートルに及ぶ

電話線の架設工事に着手し

一方クレーン運動機その他探檢用具の運搬にとりかゝつた、險阻な登山道は時として濃霧に襲はれるうへ各部品は可成りの重量があるため作業は困難を極めた、しかも廿一日は朝來から猛烈な濃霧が三原山一帶を包んでしまつたうへ、午後からは激しい暴風雨が襲來して山頂は濛々たる噴煙とゝもに一寸先も見えないほどに天候が惡化した、一行はこの惡天候にもめげず盛んに準備作業をつゞけたが十三時間ののち遂に暗黑と豪雨のため

この難工事を中止するの已むなきに至つた、しかしながら翌日大島元村へ到着した火口底探檢者岩田次長ら一行

第二班を迎へた探檢隊本部

では更に勇躍して這般工事を續行し、全島民の熱烈な支持と應援とえり拔きの精鋭人夫四百餘名を總動員しその血と汗の結晶によつてさしもの大難工事クレーン運動機の据付工事も廿五日午後に至つて全く完成した、この間大島島民では未曾有の大壯擧を控へて山頂へ殺到する群衆を整理するため青年團四十名を動員して火口壁一帶の大警戒にあたる等島はじまつて以來空前の賑はひを呈し全島こぞつてこの大壯擧の決行される日を今やおそしと待ち構へる熱心さである、かくて

愈よ最後の探檢部隊學者側

東大理學部化學教室理學士宗月三雄、同岩崎岩次、東大助教授地震研究所理學士津屋弘逵、慶大教授醫學博士山川浦、助教授醫學博士有馬宗雄、同助教授醫學士加藤俊男、日本酸素會社員福富四郎ほか數氏、本社側から火口底撮影の任にあたる眞柄寫眞課長、庄田事業部長、藤澤科學課主任、測候診療所長山田府立博士の一行が壯烈たる元氣にみちて廿五日渡島、こゝに全く探檢部隊の編成を終つて廿六日早朝宮崎社會部長以下の探檢隊全員は黎明起床、元村の吉谷神社境內に勢揃ひして一大壯擧の成功を祈願し登山午前十時ごろより重量試驗にとりかゝり動物、溫度兩試驗にうつゝたが天候險惡となつて、午前中は一時中止の已むなき狀態となり、午後一時ごろ

天候恢復をまつて引き續き

試驗を行つた、まづワイヤロープの先端に二百五十貫餘の岩塊を卷きつけて火口から八百尺餘降下する深度試驗を行つた後探檢者乘用のゴンドラによるクレーンの最後的加重試驗にかゝつた所意外にも火口から七百五十尺餘降下したところでゴンドラは突如障碍物に遭遇停止狀態に陷つた、驚いた一行が火口內を觀測調査するとこれは久しく鳴りを靜めてゐた火口が去る十一日の大爆發で火口壁を崩壞したものと判つた、この岩塊は去る四日の準備試驗の時には全然なかつたものでこれによつてみても火口內壁が常に變幻きはまりなき活動をつゞけてゐることを如實に知ることが出來た、こゝにおいて操作に大變革を加へる必要を感じた

一行は地盤龜裂の危險を冒

して東西二本合せて五千尺のロープの基點を西方三百五十尺の地點に移動せしめる難作業を遂行しこゝに最後的加重試驗を完了することが出來た

降下の諸設備

科學の粹を集む

「命の綱」昇降用クレーン

千二百尺の火口底まで探檢者が下つて行くのはたゞ綱一本を頼り、その『命の綱』を下げるクレーンは、この工事一切の請負者で橋梁建築工事に腕利きの譽として知られてゐる鈴木信三郎氏の圖面を基礎として石川島造船所技師土居稚男氏はじめ宮地鐵工所技師小林吉五郎、同大澤春吉氏らが苦心研究に研究を重ねて設計したものでこの構造は左の通りである

◇主柱長さ五十三尺、腕木七十六尺（これは百八十度回轉する）

◇總重量二トン半

◇動力はヤンマー十馬力ガソリン機關

◇一分間の最大上昇下降速力八十

探檢者が乘るゴンドラ

クレーンによつて下る探檢者は吊り函（ゴンドラ）に搭乘するがこの構造設備は左の如くで總重量百五十貫に上り現代化學の粹を集めたもの京橋若瀨商會の製作にかゝる

◇形狀　高さ十尺、內徑四尺、鐵骨木張りで火口壁一帶に沿ふ下降氣流の激しい風壓と落石を防ぐ爲上部を圓錐形にした圓型

◇構造　岩壁にふれた際の衝擊を避けるため四箇にスプリングを設け底部は二枚底、探檢者は上圓のスプリングで支へた床に腰かけ函底に開けたガラス窓から下方を、上方の開いてゐる部分から側方を、夫々自由に見られるやうに出來てゐる

◇設備　ゴンドラの內部には地上との連絡用電話、（この電線は特殊の强度を持つ軍用電線である）高度計、溫度計、磁石、最高最低溫度計を備へ探檢者は腰かけたまゝ全部の用が足りる

防毒マスクと壓搾酸素

ゴンドラの中にある探檢者は防毒マスクを身につけゴンドラ內に裝置した壓搾酸素を呼吸する、從つて火口內の亞硫酸ガスに何等災ひさるゝことなく作業が行へるのである

◇防毒マスク　日本化工株式會社技師齋藤信義及び板谷茂作兩氏苦心の作で外氣は絕對に入らず、眼硝子も曇らず、排氣瓣には特殊裝置が施してあつて目つ輕熟である

◇酸素管　日本酸素株式會社技師長長谷川辰兒氏及び同社東京支店長高木辰一氏らの研究實驗の結果、製作されたもので一本の重量廿貫、攝氏十度で百卅氣壓充塡し得られる、酸素と窒素を等量に配合して五、二〇〇立の容量を持つてゐるから一分間廿立呼吸するとして四時間の使用に耐へ得る

なほこの外に火口の探檢隊活躍の現狀と探檢隊本部との間は直通電話を特設し學者側の研究用科學設備、醫療設備等、等あらゆるものが間然するところなく整へられてゐる

火口へ降下用ゴンドラと本社探檢員 （右）眞柄寫眞課長 （左）岩田社會部次長

紅葉情話餘聞 二

若葉の佐渡をめぐりて (十)

草葉陽太郎

尾崎ちがひ

紅葉は新潟に五日間滯在し八日兩津に渡つたのである。佐渡略史には「明治三十二年七月八日小説家の巨擘尾崎紅葉來遊す」と記してある。兩津では野村旅館に投じた。名文といふよりは佐渡紹介に役立つた「煙霞療養」も最後が讀かなかつたのは遺憾であると佐渡の人からは大へん惜がられてゐるがその中に兩津の時雨松のことを次の如く書いてをる。(佐渡めぐりの第二回目にその一斷を書いた)

×

趣きの有るのは一株の老松が幾百年の翠濤を枝に交へて、税關署を其下に擁ひつゝ風に狂じ、波に嘯たれて立つのである。打眺め居るほどにおどろ〳〵しき四邊の風物は成程佐渡島根に否居ると想はしむ。署員の鏡原氏は此松が得意で己にその名を求むるのであつた。佐渡は謠曲の最も行はるゝ處であるから村雨の松など可からん。浪の飛沫に濡れぬ日とてあるまいと、其れを村雨に見立てたので「浦田の波のよる〳〵は、げに音近き蜑鮨の家、里離なる通路の月より外に友もなし」と謠ふには須磨よりも彼此許一層淒寥の感は深い、然れば月の夕此樹下に徘徊して千鳥を聽くの想思は如何なる者ならん、それは風流といふの乎、粹と謂ふの乎、例の俳句といふの乎、餅の皮と謂ふの乎、空想と謂ふの乎、穿鑿と謂ふの乎、何と謂つて可いのか知らぬが一夜は那樣目にも遭つて見たいといふ意を含んで……」とあり、最後に例によつて夏寒み蜑火焚くべき松陰やの一句を添へてある。税關署に鏡原といふ人がをつて幸々何百年を齡り閲げたその松を得意とし、紅葉にその命名を賴んだものらしい謠曲の須磨と海浪の飛沫を結びつけて村雨の松と名づけ、村雨の松が今日では時雨の松となつたのであらう。

×

野村旅館で野澤卯市氏と初めて會つた。野澤氏は今日でも大の紅葉禮讃者であるが、政治家と夭折せる文人には面白いエピソートがある。當時野澤氏は佐渡の徴兵參事員を勤め紅葉が初めて佐渡へ渡つた日は兩津の徴兵檢査場にをつた。すると野村旅館の女中が檢査場へ馳せつけて「只今尾崎行雄さんがお見えになりました」と野澤氏に傳へた。尾崎行雄が來るとすれば新潟なり東京方面なりから前もつて何等かの通知がある筈だのにと、不審に思つて「多分人違ひだらう」と女中にいつた程である。宿へ歸つて聞くと三十五六歳位に見えるが尾崎さんには間違ひないといふので、兎に角刺を通じて部屋へ通つた。ところが何ぞ白面の一書生が机に寄りかゝつて居るではないか。政治家の尾崎行雄と小説家の尾崎紅葉の違ひとわかつたので、野澤氏が辭して立ちかゝると紅葉は「實は新潟の阪口五峰君から、あなたへ紹介狀を貰つて來てある、何分宜しく賴みます」と言葉も丁寧に切り出した。

×

その紹介狀といふのは卷紙に、知人の小説家尾崎紅葉氏が佐渡へ一週間ばかりの豫定で保養に行くが見物の日程を作つてくれといつた意味を書いたもので、野澤氏はその手紙をいつか知ら紛失してしまつたのを殘念がつてをられるやうだ。大体の希望を聞いた上、一週間の日程を作つてその晩紅葉に渡し、一時間ばかりいろ〳〵話したが、初對面の感想は、佐渡の二三の人達がいつてゐると同樣、餘りいゝものではなかつたやうに聞いてゐる。緻密質な江戸つ兒の肌あひは、地方の人に餘りよい印象を與へないのは當然だ。目は鋭く光り、その上目玉はぎろりとして飛出てゐるやうな感じを與へ、身長は普通でも、身体は痩せてゐるといふ有樣で、新派の縞役者じみた姿に、第一印象の好からうはずがない。

×

けれどもものを喋り出すと觀察はたしかであり、奥行も相當深さうに見え、話題の豐富、輕妙さが文學的な雰囲氣に包まれてゐるところから、惡かつた第一印象もすつかり取戾し、かへつて敬服と親しみを覺えさせたらしい。紅葉に佐渡見物の日程を作つて渡した野澤氏は翌朝兩津を去つたが二三日經て相川の高田屋旅館で偶然にも又泊り合せたのである。(寫眞は入院中の紅葉と十六、當時の筆蹟)

(紅葉山人の「短か夜の夢ならさめた袖砧」はさめやの誤りにつき訂正す)

紅葉情話餘聞 三

若葉の佐渡をめぐりて (十一)

草葉陽太郎

御陵の名句

眞野御陵を參拜した紅葉は、その夜、新町の宿屋山本梅邸(淸右衛門ともいふ)方において

松風を頂く汗の額かな

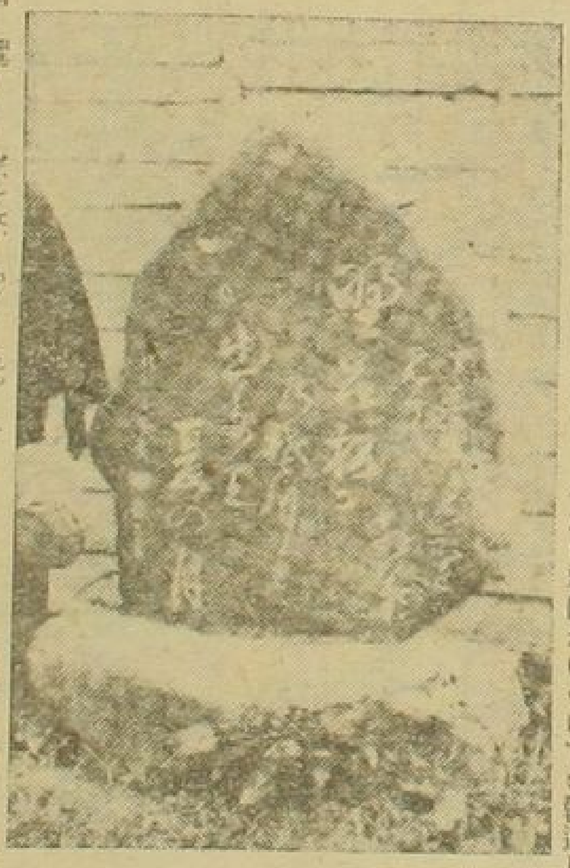
と詠んだ。之まで多くの人々によつて御陵を詠んだ歌や句は澤山發表されてゐるが、紅葉のこの句は群を拔き、名句として佐渡の人々には大いに賞讃されてゐる。遠からず御陵の近くには、この句を刻んだ紅葉句碑も建つことであらう。俳句の眞諦を解さぬ我々素人が考へても、夏に御陵を參拜する時の實感が現はれて、而も御陵の尊嚴さが「松風を頂く」の中に溢れ、苦心したであらうが、うまく詠んだものと感心せざるを得ない。江見水蔭氏も「紅葉佐渡の代表句」と放送されてゐたやうだ。

×

なほこの句につき水蔭氏は大正十五年一月號の雜誌「太陽」に佐渡の紀行文を載せてゐるがその中で「それは陵前の句でなく、其夜宿屋(山本淸右衛門)に野澤卯市と共に寢て居つて、突然「出來た〳〵」と叫びながら、飛起きて書いたのだといふ」と書いてをる。野々卯平とは、前回にも記した如く兩津の宿で落合ひ、五泉氏から紹介のあつた野澤卯市氏のことである。大正十四年に佐渡に遊んだ水蔭氏が眞野村の人々から聞き込んで書いたものであらう。昨年六月水蔭氏が再遊した時の「水蔭行脚集」の中には「紅葉の御陵の句は、中折二分の細物に書かれた。それを節古翁は、當時に於て、自宅に置くよりもと、眞野宮の社司牧山孟治氏に贈つた。それを牧山氏は表裝もせず、戸棚の隅に突込んで置いたのを、家財整理で先度賣立に出した、それが小島屋といふ料理屋の手に落ちて、今では同家の寶物の樣に成つて、わざ〳〵それを見るべく客來が多い處から、是も故人の遺德と、喜んでゐるさうだ」と書いて先年の野澤卯平には一言も觸れてをらぬ。

×

紅葉と兩津で別れた野澤卯市氏は相川の高田屋旅館で偶然にも紅葉と落あひ、滿足亭で別れの宴まで張つたのである。それから約二十日余りして赤泊の自宅にあつた野澤氏は、身体の具合が思かつた爲め、若林醫師に診察を乞ふべく眞野新町に出た。午後山本梅邸旅館で表座敷に行く廊下に又も紅葉と出合つたのである。奇遇を喜び乍ら野澤氏は紅葉を廣い表座敷に招じた。此日紅葉は小木を引揚げたのだ。其時紅葉は「眞野から矢ケ崎といふ男が僕の家に書生してゐた」と洩らしたので野澤氏は「矢ケ崎なら今は役場の書記をしてゐるから呼びませう」といつて役場に使すると矢ケ崎氏は喜び來り、三人でいろ〳〵話し合つた。今なら新聞がいくらでも報道してくれるので、紅葉の動靜も居ながらにして村役場の書記にも達するが、當時は隣合せて居つてもわからぬ位であつたであらう。



×

それから三人で御陵參拜に出かけたが、紅葉は胃腸病の故か、分とか氣が進まぬ樣子をしてゐたと、當時の模樣を野澤氏は詳細筆者に語られた。三人で宿へ戻るとあじ賣りが來たので矢ケ崎氏が買つて、部屋の中でそれを天ぷらに揚げたが紅葉は胃腸の惡いため一つも口にしなかつた。兩氏がすゝめると「惡の下には何事かある」と畏れ多いと乍ら御製の下の句をもじつて答へ矢ケ崎氏は「障子の櫻にて喰ひはてん」とは」と應酬して興じた。矢ケ崎氏は歸り、紅葉と野澤氏は床に入つたが、その日五里の道を歩いて來た野澤氏はすぐ眠つた。すると夜中に紅葉が枕許でガサ〳〵紙音を立てゝゐるのを夢うつゝに聞いた。

×

翌朝野澤氏は目を醒すと、紅葉の枕邊には硯箱と卷紙があつた。氏は紅葉、眠りを妨げぬやう、そつと脱けて海邊を歩き、一時間ばかりで歸ると紅葉は起きてゐた。そして「いろ〳〵苦心しましたがやつと出來上がりました」といつて示したのが、前記の名句で其場で紅葉みづから畫箋紙を斷ち、書いて野澤氏に贈つたのである。紅葉は三日か四日新町に滯在してゐたからその間に、乞はるゝまゝに御陵の句を書いて山本半藏氏にも與へたものであらう。野澤氏はその句を、ひき茶々碗と共に記念に保存し、巖谷小波氏が丁寧に箱書してをる。

×

茶碗はその翌年八月野澤氏が、牛込横寺町の紅葉邸を訪ねたときの記念品である。紅葉が句を書き室山が燒いたらいゝと燒きで、之とおなじやうな茶碗は兒玉龍太郎氏も現在一個所藏してゐる。矢ケ崎氏について水蔭氏は「紅葉の門人といふ事だが、自分には記憶なし。未亡人に問ひ合せたが知らずといふ。恐らく一ファンに過ぎなかつたのであらう。併し此矢ケ崎氏に招かれて新町に立寄つたらしい」と書いてゐるが紅葉の結婚前か或は交友關係の者か何れにしても關係のあつた人には違ひない(寫眞は眞野にある紅葉句碑。野居松がのそりと出たり夏の月)

△紅葉山人の句は「短夜の夢なさゝめな榻ぎぬた」が正確で「さめぞ」は誤りにつき改めて正誤す

紅葉情話餘聞 五

若葉の佐渡をめぐりて（七）

草葉陽太郎

藝妓『お糸』

料亭澱左屋（今では料理屋を止めて旅館になつてゐる）で紅葉は始めて藝妓お糸さんを知つたのである。觀光の人々を丁寧に扱へ、客の呼ぶまゝに、よくはべることを慣習としてゐる小木藝妓であるから、紅葉が最初の一目で見染め見染められたといつたやうな深刻なものぢやなかつた。かういつたからとて、小木藝妓に感心がないといふのでは毛頭ない。紅葉とお糸さんの最初のことは、お糸さんが一ばんよく知つてゐる筈であるが、お糸さんの口から、ありのまゝを聞かうとするだけ野暮であり又今のお糸さんにしたところで喋れるものではない。その妹中野たつさんがよく知つてゐる。

×

お糸さんの家號はおかん家といふのでその頃妹のたつさんと一諸に藝者をしてゐた。おかん家が藝者屋を廢業すると暫くぶら〳〵してゐたが、今では竹細工の業に嫁して、旅など商ひながら細々と暮してゐる。妹藝者から見た紅葉は、ヘラ〳〵の旅役者のやうな感じがして、それを姉藝者や朋輩藝者のおかんさんなどが、先生、先生で大騒ぎしてゐるのが、おかしかつたらしい。紅葉がおもんさんに浮氣した噂なども、妹藝者として嫉妬のために、邪魔するのが通例であるが、それらしい氣は少しも起きなかつた。おかん家が廢業すると、お糸さんは暫く、帆前船の船長業の世話になつてゐたが、のち日蔭の淵で有名な阿佛房の先々住職日運師の假の妻となり大正十年日運師が八十三歳の高齡で遷化するまで寺に留まり、約束通り死水を取つて下山したのである。元々お糸さんはおかん家のアトを繼がなければならぬ立場にあつたが、藝者屋は繼がず、質屋さくら屋こと八木從藏氏に嫁して今日に及んでゐるわけだ。

×

紅葉と深くなつたのは一本筋の色戀の道ばかりでなく、お糸さんのヘキ〳〵した性格にもあつたらしい。世間に文學藝者といふ名は多々あるが、民法藝者といふ名は恐らく類が少いであらう。お糸さんは、その類の少い民法藝者で有名であつた。理窟屋であり、文学を解するところから生れた名であらう。今では小木婦人會の幹事などもやつてゐる。水蔭氏の書によると、お糸さんが紅葉夫人の菊子さんに似てゐるから、それが一つの原因であつたらうとあるが菊子夫人を知らないから筆者にはわからぬ。何れにしても明るい性格の女である。歯と、顔が良かつたらもつと澤山のロマンスを殘したであらう（歯は反歯、顔は餘りにもあがり過ぎてゐる）

×

紅葉は佐渡で盛んに句を吐いたが、お糸さんと二人で興に耽つてゐる時も、作つたものだ。お糸さんは「文豪」とか「日本一の小説家」と聞かされてゐる紅葉と深くなつたことを當時は光榮？とし、起居動作まで違つたらしい。それで見まね、手まねといふことがあるが紅葉が去るとお糸さんも俳句のやうな、歌のやうなものを作つた。お糸さんの作など恐らく新聞に發表されるのは初めてゞあらう。

花菖蒲いつも泥水邊に咲き

櫓棹をみがいた此手拭も今は洗濯竿をみがく

前の句は、お糸さんが當時作つたとすれば、紅葉が去つた時で、紅葉も遊女の作れる俳句として喜んだものと想像される。

×

紅葉とお糸さんの情話は、土地の朋輩藝者や、おかみなどが輪に輪をかけ想像を加へていろ〳〵殘されてゐる。筆者は何もかもお糸さんの口からきゝたかつたのであるが、しかし之は時と場合によつて、失禮千萬のことである。控へたのは不幸にも「失禮千萬」の機であつた。（寫眞はお糸さんの三十歳當時）

紅葉情話餘聞 四

若葉の佐渡をめぐりて（六）

草葉陽太郎

小木の孤獨感

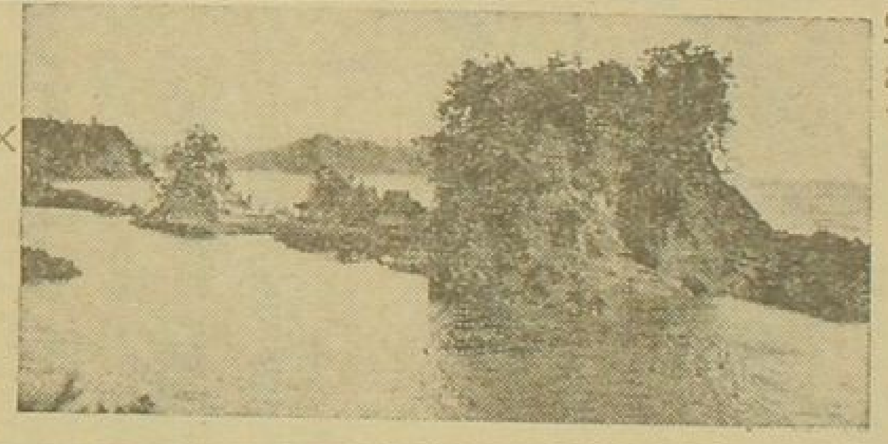
紅葉は瀬根から船で、初めて小木の小さな港へ入つたが、沿岸の風景は彼を晴れやかな氣持に導くよりも、寧ろ「吾孤島にあり」の感を深からしめ、もの想ひに導いたものらしい。伊勢藥屋の主人は、當時の小學校長であり俳句をよくした風間槐溪氏などと出迎へ、角屋といふ旅館へも案内し、紅葉滯在中は、料理屋へ招いたり、招かれたりして、常に接してゐたが、紅葉小木入りの感想にも、それらしいことを漏らしてゐたと聞く。

×

お糸さんとの關係や人情だけで紅葉は小木に長く滯留したものと見られてゐるが、必ずしも、さうとのみ觀るわけにゆかぬ。勿論お糸さんのあつたことが直接の原因であり、最大の原因ではあつたらうけれど、佐渡ケ島の特色を最も濃く現はしてゐる小木の風景が、旅に疲れた彼の心をして、一層哀切、寂寥に導き、その孤獨感が寧ろ文豪に離れ難きなづかし味を與へ、加へて得難き遊女の旅情から流連したものと察するのが至當であらう、お糸さんの友達高津くにさん（小一旅館の女將）なども、當時を回想して、それと同じ意味のことを筆者に語つてくれたのである。

×

紅葉情話は小木が、その背景をなすが、その前に「尾崎ちがひ」の項と、問題の俳句に誤りがあるので補正することにする。順序で野澤卯市氏と落合つた紅葉は、野澤氏にあてた故坂口五峰氏の紹介狀を携へてゐたが、其紹介狀は野澤氏に佐渡滯在中の日程を作つてくれるやうにとの依頼ではなくて氏が赤泊の不便な地に居住する關係から「もし機會あつて、會ふやうな場合あらば役にも立たう」といつた程度のものであつた。それが尾崎の同姓から尾崎行雄と間違ひられたばかりに野澤氏と會ふ機會を作り、五峰氏の紹介狀が、入島第一番目に役立つたものであつた。最初、野澤氏が紅葉の部屋に入ると、行雄ならぬ白面の書生に、びつくりして、ろく〳〵挨拶もせず、不審な面持で、部屋を出やうか、どうしやうかと、もぢ〳〵してゐるうちに、紅葉の方で「實は新潟の坂口君から紹介狀を貰つて來てあるので……」と切出したものである。



×

又、紅葉が新潟で作つた嘆きぬかいたの句は、誤植が繰返されたりして、誤解を招き易いが「短か夜の夢ならさめな嘆きぬた」が正確でやではない。更にこの句について當時宴席に同席された山田殼城氏が、特に一文を草せられたから左に掲げやう（寫眞は紅葉の魂に喰ひ入つた小木の矢島、經島の風景）

樽砧の句

山田生

紅葉山人の「樽砧」の句について本紙に連載の「紅葉情話」には、時に「短か夜の夢ならさめや」ともあつて誤り易いが當時直接山人と同席した自分として特に茲に明記して置くが、句は決して「さめや」でなく卽ち「短夜の夢ならさめな樽ぎぬた」といふのである。

この句については昨年三月十六日の本紙が報に、自分が執筆したこともあるがそれには無論「さめな。」とあり過般OKから放送の新潟を語る座談會席上にも亦その通りにいつて置いたが、その後動もすれば誤られるので他日問題となることもあらうかと考へて重ねてこの點を明かにして置く。

×

なほ刀圭の余技俳句に及んで市内俳壇の重鎭たる清水思水氏から筆者に宛て、この句について一書を寄せ、初句と第二句が一部のいふ如く「新潟や憂ひを知らぬ」では無季となり、強て「樽砧」を季としても冬季になるから、面白からぬ。但し旅行吟には雜も地名だけで句として苦しからぬとする例がないではないが、しかし前日行形亭吟も夏季の句であつたからその翌晩の鍋茶屋吟も「短夜」として夏季の句であるべき筈、且つ「短夜」であつてこそ、山人來市の季節と情調とがピツタリして一點の批難も間違ひもないと信ずる旨わざ〳〵申越されたのである。筆者は清水氏と未だ面識の機會もなかつたのに厚情實に感謝に堪へぬ。

榛原製

紅葉情話餘聞　六

若葉の佐渡をめぐりて（六）

草葉陽太郎

紅葉も浮氣

安らくに余生を送つてゐる老夫婦のところへ、若い男が訪ねて、お婆さんの藝者時代の情事を聞く場面を想像して見るがよい。如何に圖々しく、如何に無禮な男でも「文豪の名に惚れましたか、それとも江戸ッ兒肌の男振りに惚れましたか、それとも……」なんて切り出されたものぢやない。こんな卒直な口上でなくとも「あなたの一通りならぬ親切が佐渡を天下に紹介するに、どんなに役立つたかわかりません」とはいへまい。長火鉢の前には質屋の御亭主が邪険な目をギョロ〳〵させて、時々煙管をヤケに叩くは、ひがみとのみ見ることは出來ぬ。お糸さんの嫁してゐる質屋さくら屋の御主人は、そんな物のわからぬ人ぢやないことは重々承知してゐても、御亭主の手前ぢや、女房の若かりし頃の情事など聞くだけの勇氣を不幸にして持合せてをらなかつた。

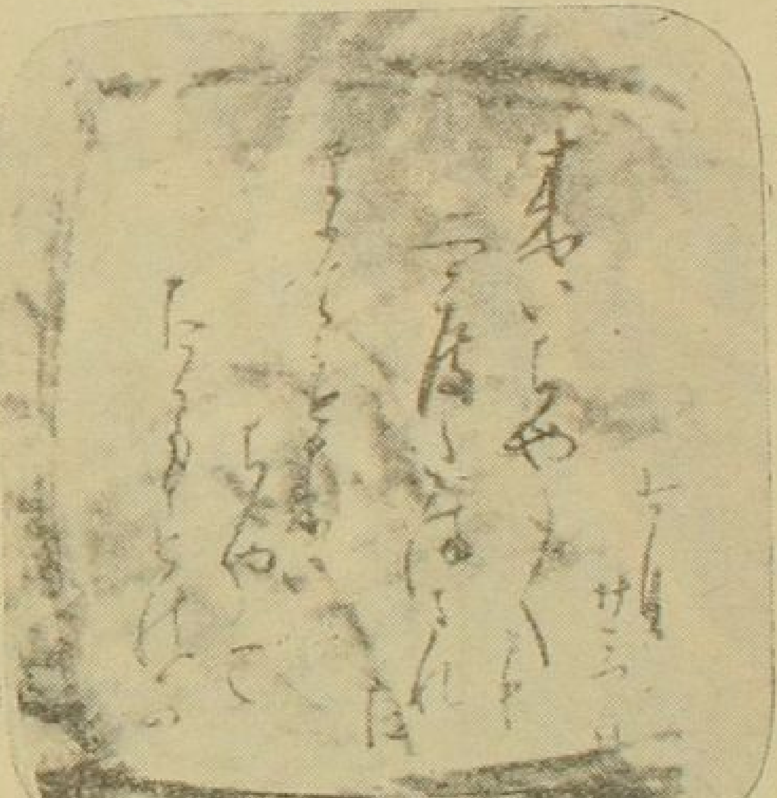
×

そこへ行くと水陰氏は偶然の機會とはいへ「紅葉叢書」を創造するなど、なか〳〵うまいことを考へたものと感心した。紅葉と全然無關係で、又その方面の趣味のないものが如何に御亭主だからとて、のこ〳〵出かけて行く氣遣ひはないから……。それでもお糸さん御當人からは、情話の眞相など聞けなかろう。お糸さんの直話には「發表されてもよい事柄」といふ豫約が無言の間に交されてあるからだ。それにお糸さんは「紅葉の名は汚したくない」といふ一種のプライドを持してゐるが、およそ情話とは逆コースを行くものである。

紅葉の名を汚したくないといふ心理は、同時に、お糸さん自身の名も汚したくないといふ點に轉嫁する一路がある。この氣持ちは人間お糸さんにあつて然るべきものとむしろ感心？しなければならない

×

紅葉とお糸さんが馴れ染めてから、紅葉は旅館には殆ど泊らず、料亭いかな屋で過ごすことが多かつた。おかん屋へも、よく遊びに行つた。俳句や手紙を書いたり、小木町の紅葉ファンと話込んだりしたが、別にまとまつた仕事はしなかつたから、お糸さんと興ずることが大部分を占めてゐたと見ることが出來やう。お糸さんもこれを否定はしない。夜おそく月光を踏んで海邊に二人があるいたことも、しば〳〵であり、朝早く矢島の烏賊を焼いてたべたりした。紅葉は朝海からあがつたばかりの烏賊をその場で焼いてたべるのを非常に愉快がつてゐたが、數は多くたべなかつたといはれてゐるから、やはり胃腸病の關係と想像される。



現在まだ生存してゐる某々氏等が、お糸さんへの軽い反感からか、或は面白半分からか知らないが、大興家のおもよを、お糸にかくして紅葉に紹介した。紹介といふよりは押つけてしまつたのである（前回に「おいん」としたのは誤りでおもんはおかん家の抱へ妓である）紅葉はその時、決して惡い顔はしなかつた。一流の氣位を押包んで、相好を崩し、浮氣の快に耽つた。おもよとの關係が露顯してお糸と二人で大興家の前をあるいて通つたことは、その記憶だけが水陰氏の脳裏にあるやうだから茲では省く

×

紅葉の浮氣はいま一つある。これは結論において浮氣だけれど場所も選ふし、又その周圍の人々が小木人ではない。餘りこの方面のことを精細に述べることは故人に對する禮を失するであらう。又現存の人々の名が明かに出て來るので、この佐渡めぐりの稿には遠慮すべきだ。茲では仕入れて來た材料の斷片だけでよい。何れ時間もあらう……。情話を離れた紅葉逸話に觸れると限られた紙面では書切れぬから之も省くことにする。逸話に粉茂の鮎御膳があるが、水陰氏もこれを放送してゐる。この時の事情は伊藤氏が一番詳しく知つてゐるのである。

×

紅葉がお糸さんの三味に「來いちや、來いちやに二度だまされた又も來いちやでだますのか（七月二十三日書く）」と書きなぐつたことは、かなり有名であり、多くの人に知られてゐる。佐渡訛の「來いちや」の意味がいろ〳〵に想像されてゐるが、意味深げに想像するより、佐渡女の「來いちや」を率直に解した方が面白味があらう。明治三十七年八月十三日の小木大火にもこの三味だけは持ち出し、今では皮だけが保存されてある（寫眞は紅葉が書いた三味皮の文句）

榛原製

光悦手造赤樂雲文茶碗　その二

星岡藏